

東北アジア研究センター叢書

CNEAS

Monograph Series

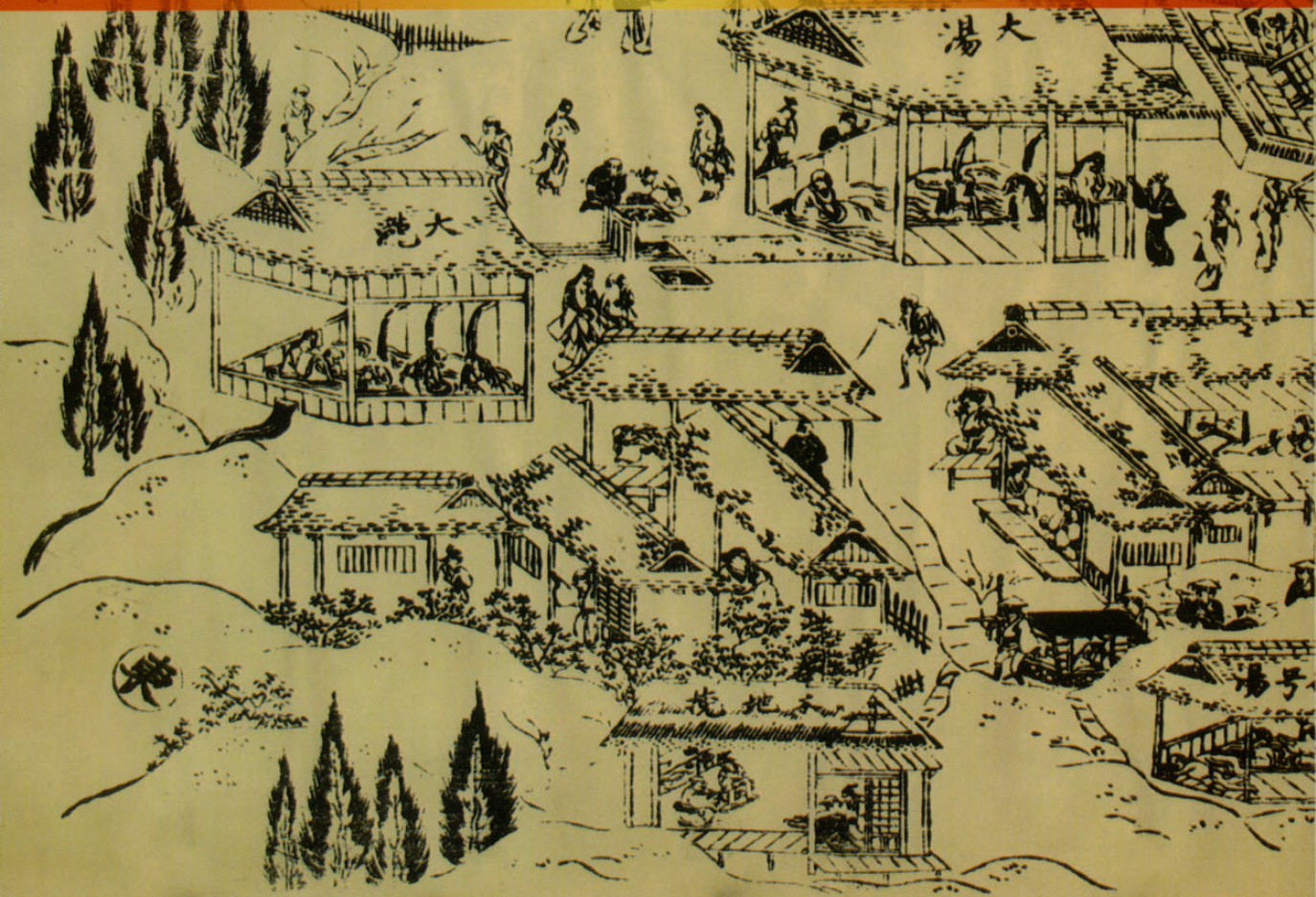
No. 50

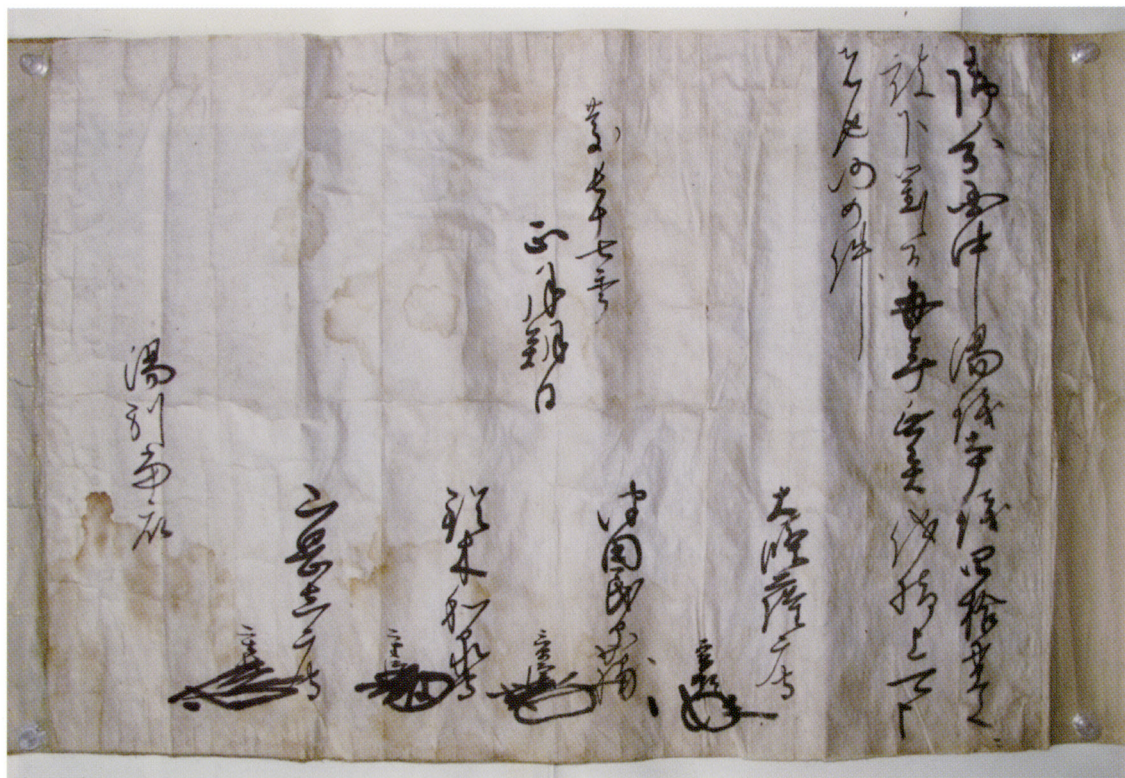
東北アジア研究センター叢書 第50号

江戸時代の温泉と交流

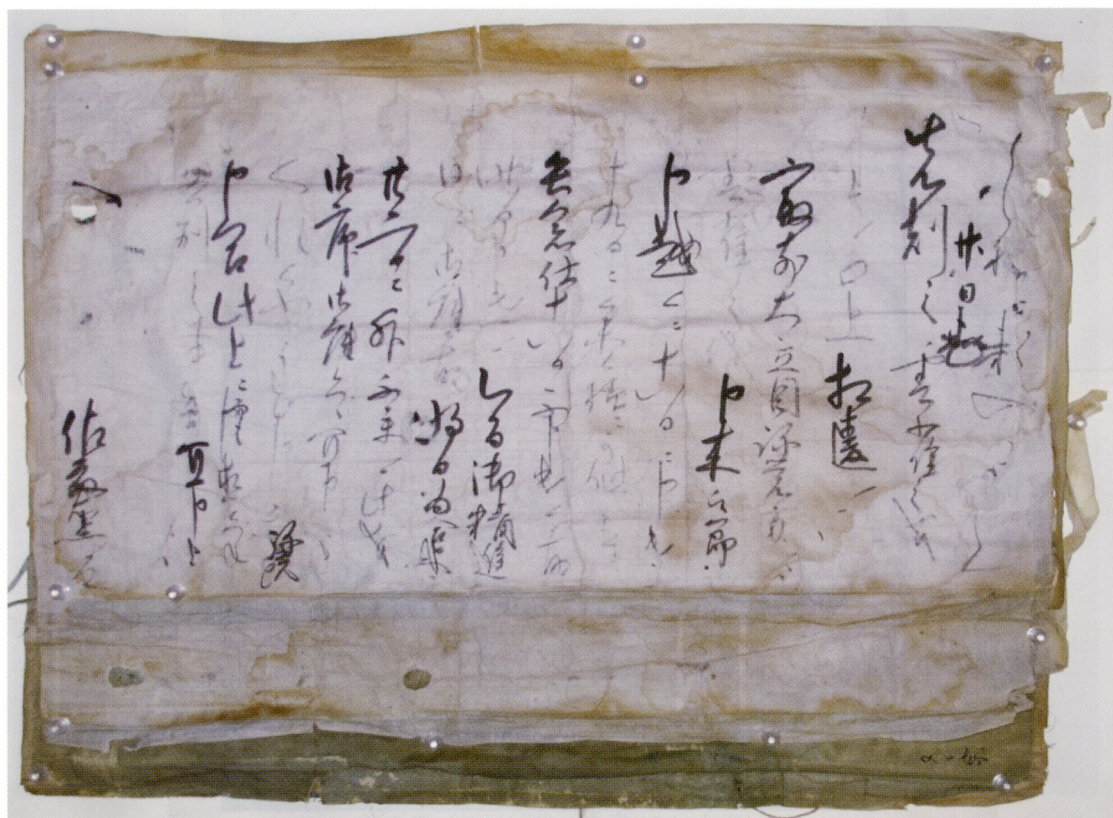
—陸奥国柴田郡前川村佐藤仁右衛門家文書の世界—

高橋 陽一 編著

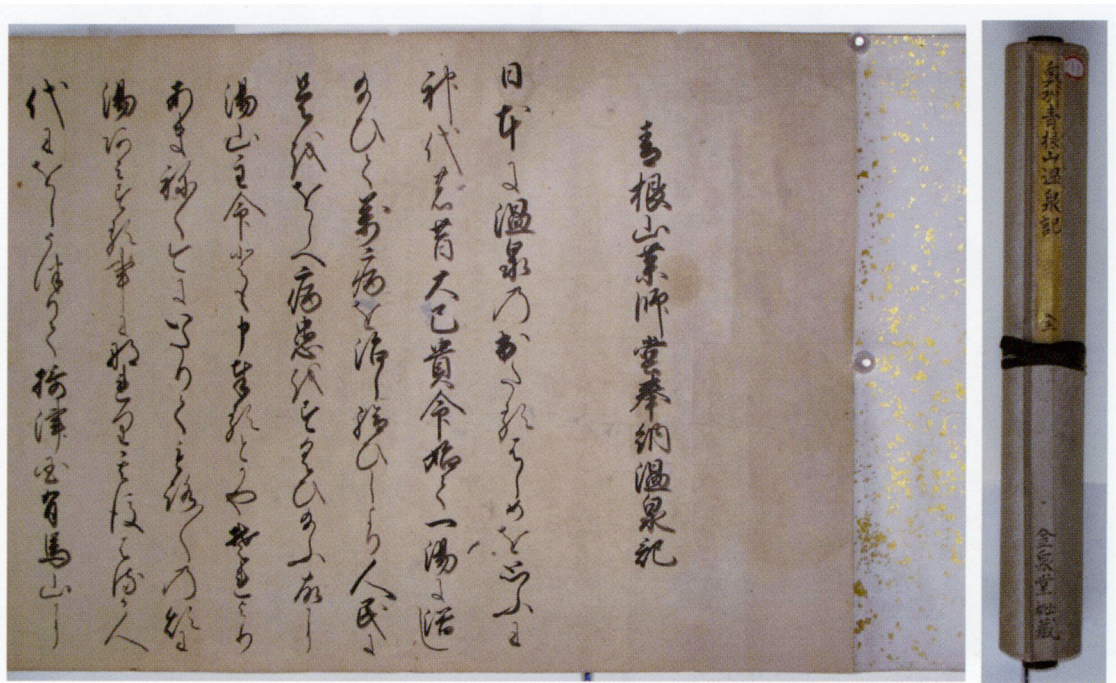




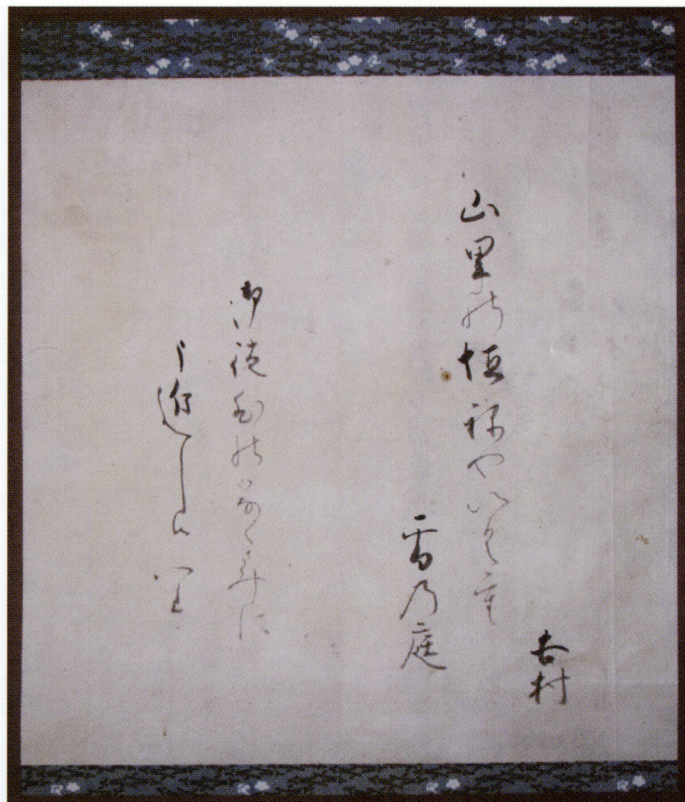
仙台藩奉行人連署状（慶長 17 〈1612〉 年、本書 13 号文書）



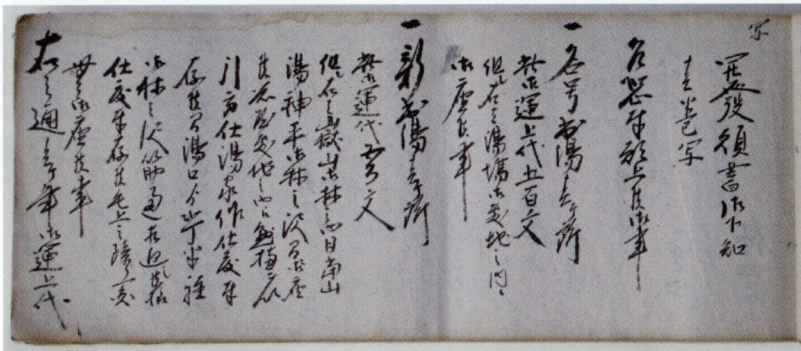
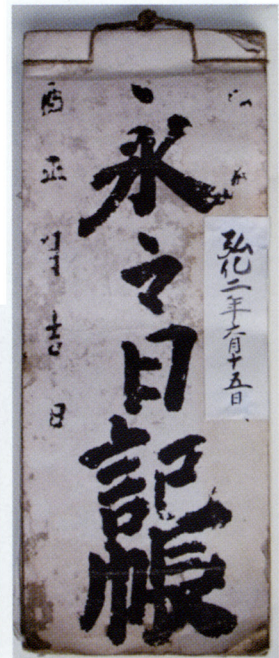
伊達綱村書状（江戸時代、本書 4 号文書）



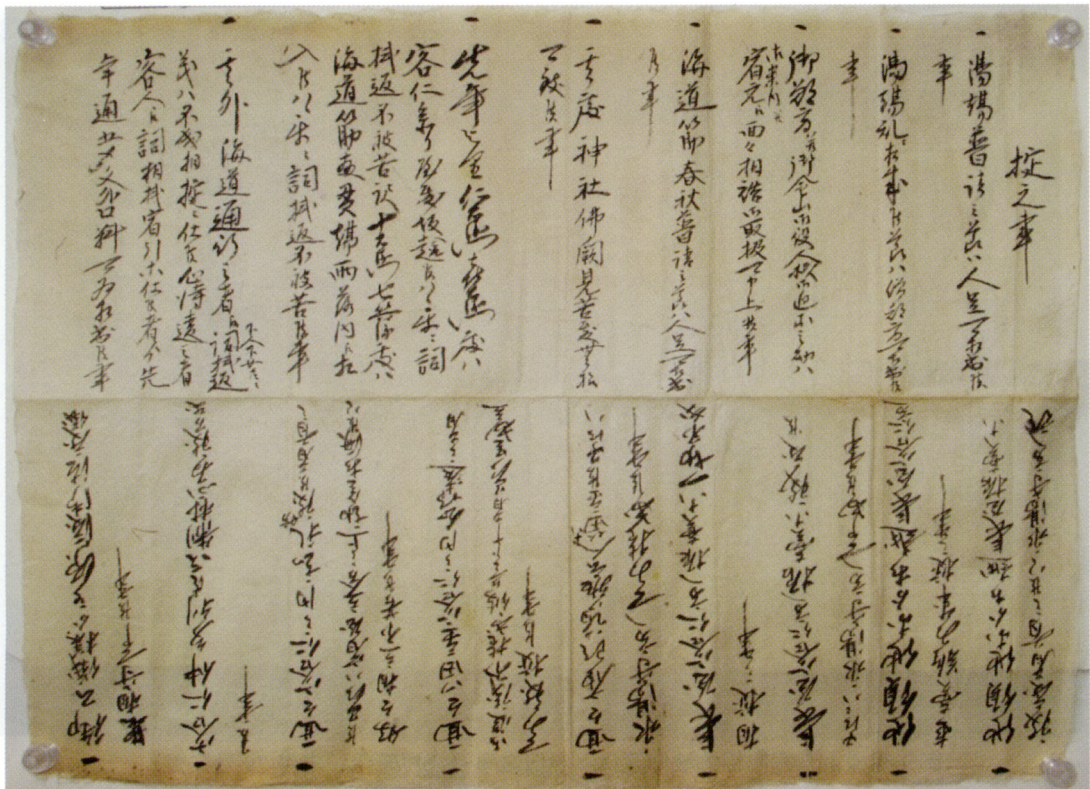
奥州青根山温泉記 全（享保5〈1720〉年、本書1号文書）



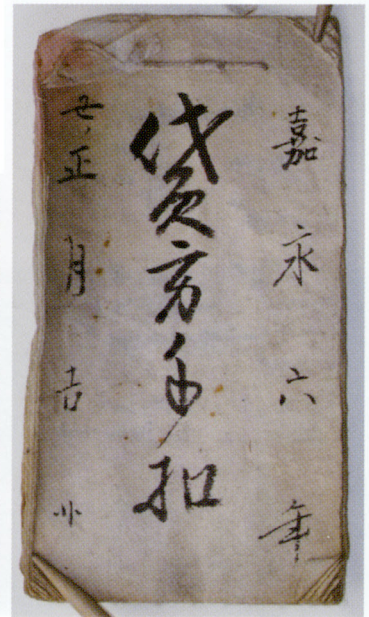
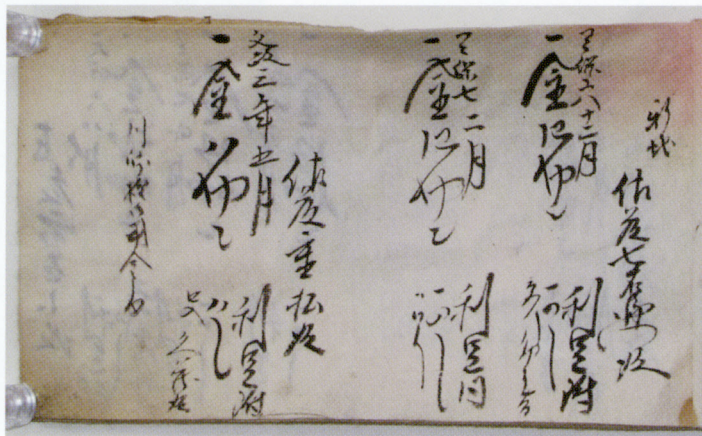
伊達吉村俳句（江戸時代、本書6号文書）



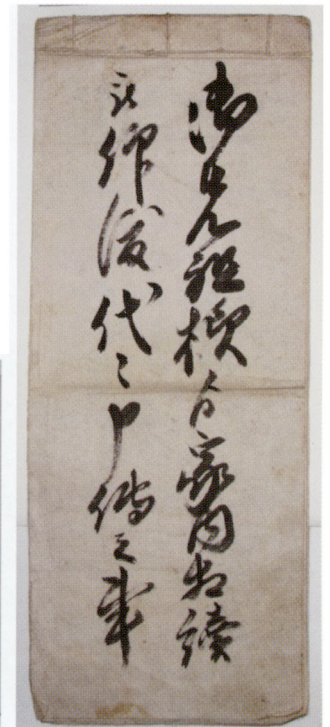
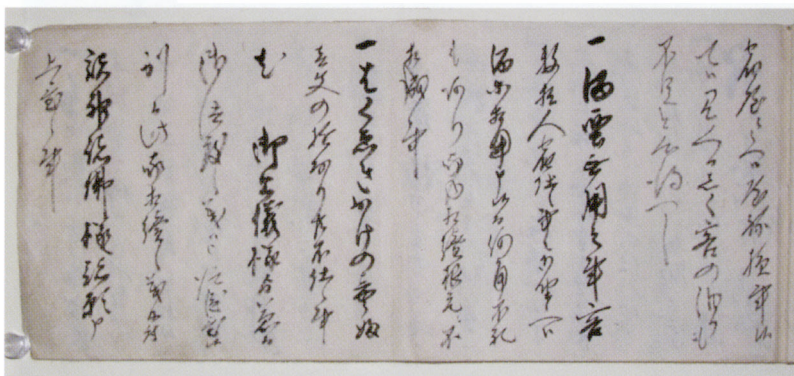
永々日記帳（弘化2〈1845〉年～明治12〈1879〉年、本書11号文書）



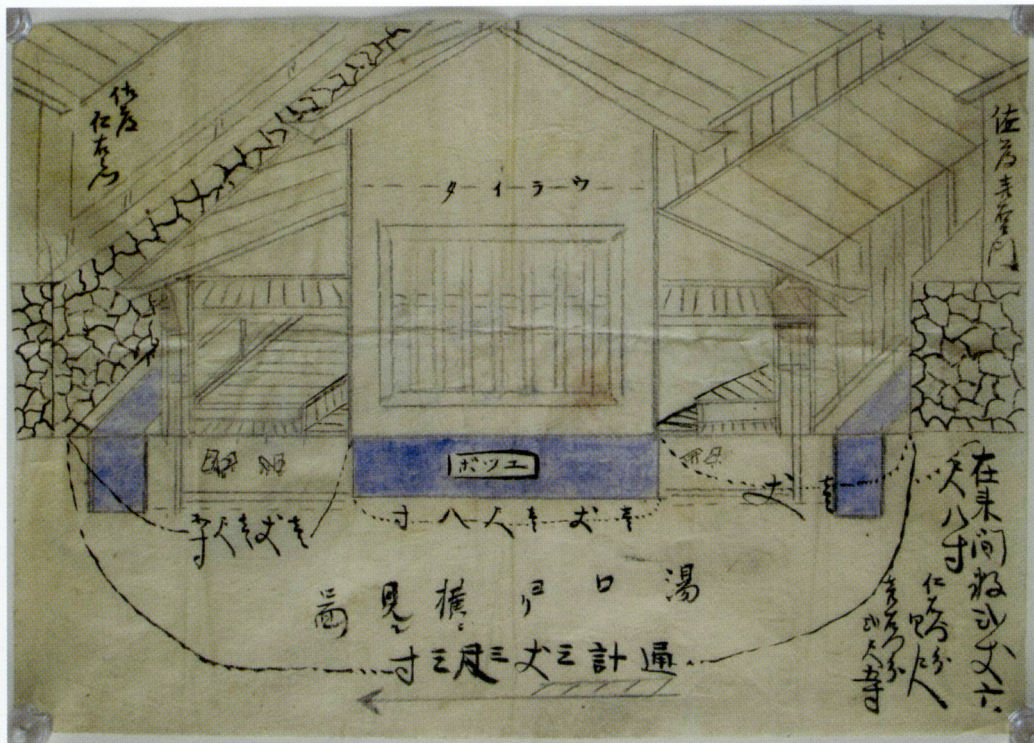
掟之事（江戸時代、本書12号文書）



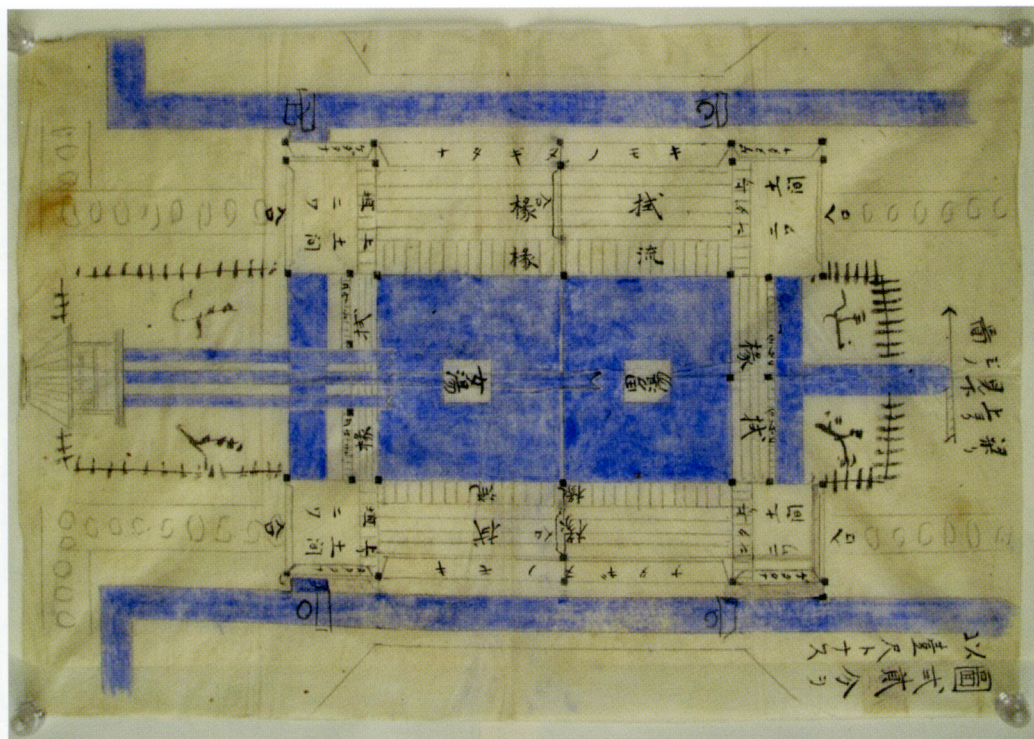
貸方手扣（寛政9〈1797〉年～安政3〈1856〉年、本書40号文書）



御先祖様より家内相続被仰渡代々申伝之事（江戸時代、本書79号文書）



湯家（浴場）図面（年未詳、佐藤仁右衛門家文書）



湯家（浴場）図面（年未詳、佐藤仁右衛門家文書）



陸前国青根温泉場全景（明治 24 〈1891〉 年、永澤小兵衛『宮城県鉾泉志 完』）



不忘閣之図（明治時代以降、佐藤仁右衛門家文書）



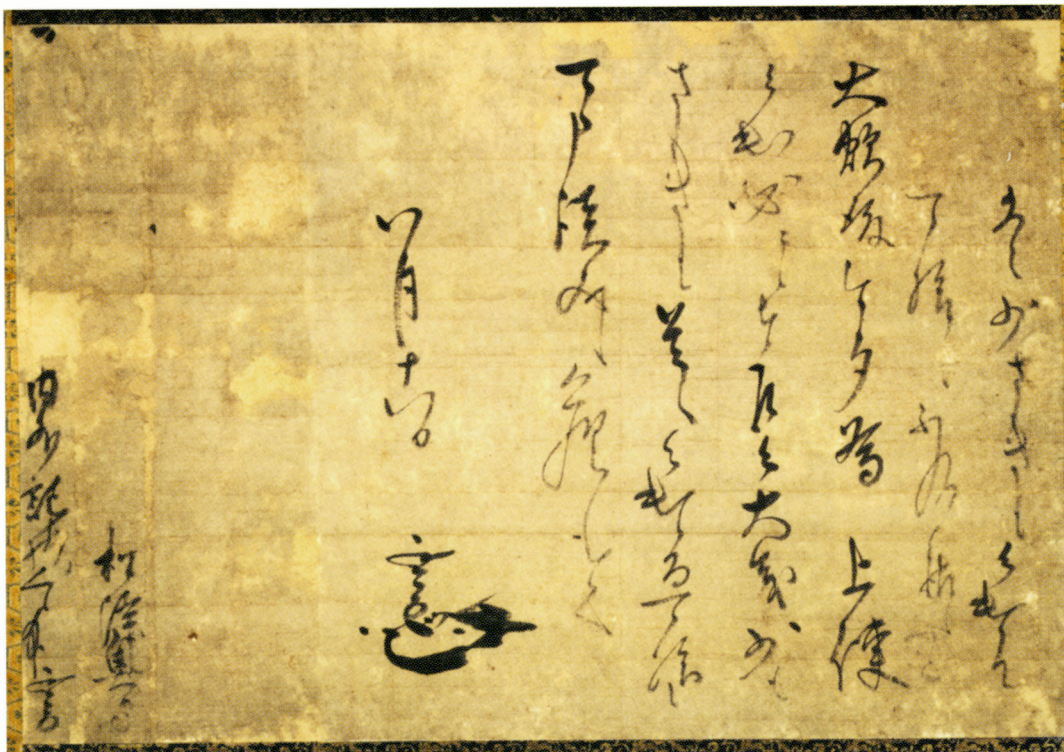
現在の佐藤仁右衛門家（旅館 湯元不忘閣）



御殿



御殿内の展示室



伊達政宗書状（内藤外記正重宛、元和8（1622）年～同9年頃、本書82号文書、
『仙台市史資料編12』2920号文書より）

東北アジア研究センター叢書第50号

江戸時代の温泉と交流

―陸奥国柴田郡前川村

佐藤仁右衛門家文書の世界―

高橋陽一
編著

〔表紙写真〕

『奥州仙臺領青根温泉之図』（江戸時代、佐藤仁右衛門家文書、複製）

◇目次

◇解題

一 本書の内容	5
二 佐藤仁右衛門家と古文書	5
1 家の来歴	5
2 佐藤仁右衛門家文書について	8
3 本書収載史料の概要	10

◇論説 江戸時代の温泉と交流

― 陸奥国柴田郡前川村青根温泉を事例に ―

はじめに	15
一 江戸時代の青根温泉	17
1 温泉の沿革	17
2 温泉の運営	19
二 佐藤家の交流	24
1 香囊帳・書状・貸金帳から	24
2 湯守同士の交流	30
おわりに	32

◇史料編

凡例

一 温泉の歴史

[1] 奥州青根山温泉記 全〔享保五（一七二〇）年〕	38
[2] 青根温泉小誌〔明治二四（一八九一）年〕	41
[3] 〔天文稻荷神社紀元燈碑銘〕〔明治三五（一九〇二）年〕	43

二 伊達家との交流

[4] 〔伊達綱村書状〕	43
[5] 〔伊達吉村和歌〕	44
[6] 〔伊達吉村俳句〕	44
[7] 〔書状〕	45

三 日記・用留

[8] 諸用留牒〔享保三（一七一八）～安永九（一七八〇）年〕	45
[9] 〔諸用留〕〔宝暦二（一七五二）～天保一二（一八四一）年〕	58
[10] 諸御用目録〔元治元（一八六四）年〕	80

[11] 永々日記帳〔弘化二（一八四五）〕明治一二（一八七九）年〕

..... 88

四 温泉の運営

[12] 掟之事..... 137

[13] （仙台藩奉行人連署状）〔慶長一七（一六一二）年〕..... 138

[14] 享保五年柴田郡前川村之内青根湯本え 御湯治ニ付竹木諸
道具渡方帳〔享保一二（一七二七）年〕..... 139

[15] （温泉場運営定約状）〔元文五（一七四〇）年〕..... 140

[16] 乍恐奉願上候御事〔安永五（一七七六）年〕..... 141

[17] 天明二年被遊 御入湯ニ付御小屋材木切方木数左之通り

〔天明二（一七八二）年〕..... 142

[18] 店始末証文之事〔天明四（一七八四）年〕..... 143

[19] （出湯方諸事覚帳）〔寛政二（一七九〇）年〕..... 143

[20] 御分領中所々温泉ヶ所限り御役代并湯守名前帳〔寛政九（一
七九七）年〕..... 148

[21] 乍恐奉願候御事〔寛政一二（一八〇〇）年〕..... 152

[22] 天保貳年五月出湯方請負人人指ヲ以被仰付候御下知巻卷写

〔天保二（一八三二）年〕..... 153

[23] 高遜り替シ証文之事〔天保七（一八三六）年〕..... 155

[24] 本扣 乍恐口上書ヲ以奉願上候御事〔天保九（一八三八）年〕

..... 156

[25] 乍恐口上書ヲ以奉願上候御事〔天保九（一八三八）年〕..... 157

[26] 青根温泉御運上請負人ニ被成下候御下知巻卷写〔天保一〇
（一八三九）年〕..... 157

[27] 御手伝面附帳〔文久二（一八六二）年〕..... 161

[28] 乍恐口上書ヲ以申上候御事〔慶応三（一八六七）年〕..... 163

[29] 慶応三年九月青根御入湯之節同所之者無残諸品御払請候方
上納金可仕旨巻書ヲ以左ニ申渡候〔慶応四（一八六八）年〕

..... 166

[30] 慶応三年九月青根御入湯ニ付同所仁右衛門御払申請金并被

相渡候分左ニ〔慶応四（一八六八）年〕..... 168

[31] （佐藤仁右衛門永湯守願につき達書）..... 169

[32] 柴田郡前川村之内青根温泉請負并宿屋渡世振之義左ニ奉申
上候事..... 172

[33] 乍恐奉願候御事..... 172

五 山林

[34] 乍恐覚書を以奉願御事〔宝永五（一七〇八）年〕..... 174

[35]	柴田郡前川村青根湯前上ノ平山へけ石山御林之内より青根湯守四人之者共炊料伐方之場所年々被相渡帳〔寛政七（一七九五）年〕……………	175
[36]	乍恐柴田郡前川村御百姓善兵衛奉願候御事〔文化五（一八〇八）年〕……………	177
[37]	〔御林松下の儀につき達書〕〔安政七（一八六〇）年〕……………	178
[38]	扣 柴田郡前川村嶽山御林之内日当山片石御林雑木毛上同村青根温泉守善兵衛等四人え新料被松下御直附請書左ニ申上候〔元治元（一八六四）年〕……………	180
[39]	〔御林松下の儀につき達書〕……………	181
六 取引・交流		
[40]	貸方手扣〔寛政九（一七九七）年〕安政三（一八五六）年〕……………	182
[41]	清酒通〔文化二（一八〇五）年〕……………	188
[42]	勘定調書〔天保一四（一八四三）〕嘉永三（一八五〇）年〕……………	190
[43]	金華山道中日記（金銭貸方扣帳）〔嘉永二（一八四九）年〕明治五（一八七二）年〕……………	192
[44]	覚……………	203

[45]	覚……………	203
[46]	覚……………	204
[47]	覚……………	205
七 証文		
[48]	金子借用証文之事〔沼辺村、寛政九（一七九七）年〕……………	207
[49]	証文之事〔宮村遠刈田、寛政一三（一八〇一）年〕……………	207
[50]	〔金子借用証文〕〔小斎村、享和四（一八〇四）年〕……………	208
[51]	〔金子借用証文〕〔文化五（一八〇八）年〕……………	208
[52]	〔金子借用証文〕〔川崎町、文化七（一八一〇）年〕……………	209
[53]	借用仕金子証文之事〔山形檜物町、文化八（一八一二）年〕……………	209
[54]	金子店物請合証文之事〔文化一四（一八一七）年〕……………	209
[55]	証文老札之事〔宮村遠刈田、文化一四（一八一七）年〕……………	210
[56]	〔金子借用証文〕〔川内村、文化一四（一八一七）年〕……………	210
[57]	証文之事〔宮村遠刈田、文政六（一八二三）年〕……………	211
[58]	証文之事〔小村崎村、文政六（一八二三）年〕……………	211
[59]	借用証文之事〔宮村新地、文政七（一八二四）年〕……………	212
[60]	指出シ手形証文之事〔文政一一（一八二八）年〕……………	212
[61]	〔金子借用証文〕〔天保五（一八三四）年〕……………	213

八 家

[62]	証文之事〔天保六（一八三五）年〕……………	214
[63]	〔金子借用証文〕〔天保六（一八三五）年〕……………	214
[64]	証文之事〔天保六（一八三五）年〕……………	215
[65]	金子借用証文之事〔円田村、天保七（一八三六）年〕……………	215
[66]	借用仕金子之事〔山形檜物町〕……………	216
[67]	証文荅札之事〔宮村遠刈田〕……………	216
[68]	親様死去に付御悔覚帳〔寛政元（一七八九）年〕……………	216
[69]	乍恐奉願候御事〔寛政二（一七九〇）年〕……………	219
[70]	柴田郡前川村青根佐藤仁右衛門養子家督奉願候御事〔文化元（一八〇四）年〕……………	220
[71]	乍恐口上書ヲ以奉願上候御事〔文化九（一八一二）年〕……………	221
[72]	〔湯守永請請願書〕〔天保一二（一八四一）年〕……………	222
[73]	乍恐奉願上候御事〔天保一二（一八四一）年〕……………	223

九 補遺

[74]	乍恐奉願上候御事〔天保一二（一八四一）年〕……………	223
[75]	〔湯守永請請願書〕〔天保一二（一八四一）年〕……………	224
[76]	乍恐内願奉申上候御事〔天保一三（一八四二）年〕……………	224
[77]	覚〔弘化三（一八四六）年〕……………	225
[78]	御先祖様ヨリ御遜り之品左ニ印置覚帳……………	227
[79]	御先祖様より家内相続被仰渡代々申伝之事……………	231
[80]	〔書狀〕〔上山裏町・豆油屋作右衛門〕……………	235
[81]	〔書狀〕〔秋保湯元村・佐藤勘三郎〕……………	235
[82]	〔伊達政宗書狀〕〔内藤外記正重宛、『仙台市史資料編一二』二九二〇号文書〕……………	237
[83]	〔伊達政宗書狀〕〔四竈勘右衛門宛、『仙台市史資料編一三』三八一九号文書〕……………	237

◇解題

一 本書の内容

本書は、宮城県柴田郡川崎町青根温泉の佐藤仁右衛門家に伝存する文書群（佐藤仁右衛門家文書）の一部を翻刻し、紹介すると共に、同文書の解読と分析から、江戸時代の青根温泉や佐藤家の活動について明らかにするものである。

二 佐藤仁右衛門家と古文書

1 家の来歴

佐藤仁右衛門家文書に残る御用留『諸御用目録』によれば、佐藤家の先祖は、寛正年間（一四六〇～一四六五）まで柴田郡前川村の八沢屋敷に居住しており、八澤（矢澤）豊後を名乗る武士であった。その後、この地域を治めた砂金家の家老職を数代にわたって務め、その間に佐藤掃部と改名し、掃部の次男が天文年間（一五三二～一五五四）に青根へ移住して彦惣と名乗ったという。この来歴は、天文一五（一五四六）年に、佐

藤家らによって青根温泉が発見されたとする説ともおよそ符合している。これが正しいとするなら、青根佐藤仁右衛門家の歴史は、まさに青根温泉と共にあるといっても過言ではないだろう。

一方、安永七（一七七八）年に、前川村の肝入が村の由緒ある百姓を書き上げた『代数有之御百姓書出』では、元禄期（一七〇〇年前後）の砂金家断絶後に青根に移り住んだ佐藤掃部が佐藤仁右衛門家の初代とされ、二代平助・三代半助・四代市之丞・五代仁右衛門・六代仁右衛門と列記される。元禄期から安永七年まで、およそ七〇年余りの間に当主が六代を数えるというのは、やや不自然にも思われる。また、『諸御用目録』は佐藤彦惣を初代、二代を佐藤掃部とし、三代平内・四代半助・五代市之丞・六代善兵衛事仁右衛門、というように九代までを列記する（【表】）。初代の彦惣を天文年間の者とする元禄期の掃部まで年代に開きがあり、辻褄が合わない。元文五（一七四〇）年の御役代請負に関する定約状には「善兵衛」の名があり、一八世紀半ばには当主が善兵衛を名乗っていたことが確実であ

表 佐藤家歴代当主（室町～江戸時代）

初代	佐藤彦惣
2代	佐藤掃部
3代	平内
4代	半助
5代	市之丞
6代	善兵衛（仁右衛門）
7代	善兵衛（仁右衛門）
8代	善兵衛（佐藤仁右衛門）
9代	善兵衛（佐藤仁右衛門）

※『諸御用目録』（本書10号文書）より作成。

る。二代の「掃部」が元禄期に移住したとされる掃部と別人であるか、青根に移住したのが元禄期よりも前であったとすれば、室町時代（戦国期）の彦惣を初代として、一八世紀半ば頃に当主善兵衛が活躍していると考えられることもできる。正確な事実を見極めるのは難しいが、諸史料から佐藤家の先祖は室町時代の後期まで遡ることができるのである。

『諸御用目録』の当主名記載で気になるのは、六代目以降に「善兵衛事仁右衛門」というように二つの名を併記していること、苗字を付している場合とそうでない場合があること、である。

「善兵衛」と「仁右衛門」については、寛政元（一七八九）年一月に仁右衛門が亡くなった際、忌中明けの翌一二月に、嫡子善兵衛の仁右衛門への改名許可を

前川村の肝入・組頭が藩に願い出ている⁽⁵⁾。また、文化元（一八〇四）年に、佐藤家は仙台国分町大坂屋新七方の添人であった十代吉を養子に迎え、家督を相続させたい旨、藩に請願している⁽⁶⁾。その後、先代の仁右衛門は不慮の事件に巻き込まれ、網地島の長渡浜（現宮城県石巻市）に流罪となり、文化三（一八〇六）年に同地で病死しているが、それ以降も、少なくとも文化九年まで同家当主が善兵衛を名乗り続けていることが確認できる⁽⁷⁾。これらのことから判断すると、「仁右衛門」の名は、佐藤家の家督を継いだ時点で襲名できたわけではなく、先代の仁右衛門が死去し、藩の許可を得た上で公的に名乗ることができたとみられる。

次に、「佐藤」の苗字について。「彦惣」「掃部」の時代は戦国～江戸時代前期にあたり、両者が砂金家に仕える武士であったことから苗字を名乗っていたと推測できるが、正確なところは定かではない。一方、『（出湯方諸事覚帳⁽⁸⁾）』には、「天明二年御殿御次御大所向等自分入料を以建上候に付苗字永々御免被成下候事」とあり、天明二（一七八二）年の藩主伊達重村来訪に際

し、藩主滞在用の御殿等を自普請で造営した功績が認められ、苗字を許されたことがわかる。これが、【表】の八代目当主の時期に該当するのではないだろうか。なお、『(諸用留)^⑨』によると、佐藤家は知行主の川崎伊達家に対しても多大な貢献をしており、寛政八(一七九六)年には、御用金一〇〇切調達の褒賞として帯刀御免となり、組士格に取り立てられている。さらに、翌寛政九年の伊達主殿の婚礼に際しても召し出され、御目見に与り、紋付の袴を拝領している。

続いて、江戸時代の佐藤家の公的な任務について確認しておこう。佐藤家が、肝入等、前川村の村役人を務めていた形跡はみられない。確認できるのは、同家が青根温泉の湯守と刃下石御林の山守を務めていたことである。湯守の任務は温泉を管理し、入湯客から湯錢(入湯料)を徴収すると共に、温泉税に当たる御役代^{だい}を藩に上納することであった。温泉の発見が天文期であるとするなら、仙台藩開藩の早い段階で、同家は湯守に任じられていたと考えられる。江戸時代の入湯は共同浴場を利用するのが通例であるが、佐藤家は大

湯等、浴場の修繕費を負担するなどして、その維持管理、ひいては青根温泉運営における中心的役割を担っていた。他方、山守の任務は藩有林である御林の管理であり、その代償として、状況に応じて藩から御林の払い下げが受けられた。温泉での自炊には薪木が不可欠であり、その意味で湯守と山守の任務は密接に結びついていたといえる。仙台藩領の温泉は山間部に位置している場合が多く、名取郡湯元村秋保温泉(現宮城県仙台市太白区)の湯守佐藤勘三郎家も山守を務めていた。湯守と山守の兼務は珍しいことではない。ただ、佐藤仁右衛門家が山守に任じられた時期や、山守としての活動の実態は詳らかにできない。

青根温泉では、佐藤家のほかに三家が湯守の役割を担っていたが、天保飢饉を境に佐藤家のみが湯守を務めるようになる(後述論説参照)。この天保飢饉後にみられる活動として特筆すべきは、藩への献金と永代湯守の請願である。すなわち、佐藤家は天保一二(一八一八)年に、起返り方御郡備金(荒地の復興資金)として金一五〇両を献金し、御役代年額五〇貫文で永代

湯守を務めさせてほしいと願ひ出ている⁽¹⁰⁾。この請願は認められなかったとみえ、翌天保一三年には、荒所起返り資金として四五〇両、赤子養育資金として一五〇両を柴田郡北方備金として献金し、大肝入格と永代湯守を認めてほしいと願ひ出ている⁽¹¹⁾。しかし、この願ひも聞き届けられず、弘化三（一八四六）年には、藩校養賢堂に百両の献金を申し出、永代湯守を再度請願している⁽¹²⁾。結局、この念願が叶ったのは、元治元（一八六四）年のことで、温泉を含めた藩の鉾山行政を担当する金山方に一〇〇両を献金し、「青根温泉永湯守」が認められている⁽¹³⁾。藩は、永代湯守を容易には認めず、同一人物に湯守を継続させる場合でも、数年おきに御役代額を吟味した上で改めて湯守に任じる手順を踏んでいたのである。

佐藤家の貢献は藩に対してのみみられたわけではない。周辺住民の相続や地域の安定と発展に寄与する活動に積極的に従事していた様子もみてとれる。租税上納に行き詰った者に対して当座の金銭を融通しているほか、天明七（一七八七）年には、飢饉後の復興に際

し他の湯守二名に六〇貫文余を援助し、天保飢饉に際しても、村内の難渋者一〇人に対して金二〇切（＝金二〇歩）を貸与している⁽¹⁴⁾。また、時代は下るが、明治六（一八七三）年、佐藤家（仁平）は小学校設立費として金拾円を拠出し、同七年には上山への新道普請費として金一〇〇円を差し出すなどしている⁽¹⁵⁾。なお、大正八（一九一九）年から同一一年まで、一七代当主仁右衛門は川崎村村長を務めている。

江戸時代の佐藤仁右衛門家は、青根温泉の運営のみならず、非常時などに存在感を発揮して前川村全体の運営にも貢献しており、明治以降は川崎村の発展においても寄与するところが大きかったといえよう。

2 佐藤仁右衛門家文書について

佐藤仁右衛門家文書の調査は、川崎町文化財保護員からNPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク（理事長・平川新、通称・宮城資料ネット）に寄せられた相談がきっかけとなっている。平成二四（二〇一二）年五月六日に、宮城資料ネットの事務局スタッフや筆者



古文書の撮影風景

らが同家（湯元不忘閣旅館）を訪問し、御殿に展示、及び保管されている古文書の所在状況を確認したところ、部分的に文書の虫損や湿気による剥離がみられたため、永続的な保存の観点から、保全活動を実施することとなった。

活動は、デジタルカメラで古文書を撮影し、それを長期保管用の中性紙封筒に詰める作業で、五月六・七日、六月一三・一四日、八月七・八日の三度にわたって行われた。後に撮影

画像を検証した結果、文書の総点数は約二〇〇〇点に上ること、江戸時代初頭以降の幅広い年代にまたがって文書が残存していることが判明した。文書群の全体像把握は、今後の目録作成に委ねられることになるが、その内

容的特徴について三点指摘しておきたい。

一点目は、仙台藩主及び藩首脳との関係を示す文書が含まれていることである。四代藩主伊達綱村の書状や、五代藩主伊達吉村の和歌がまずそれにあたる。吉村は実際に青根温泉を訪れており、佐藤家と交流をもっていた。佐藤家文書には吉村の和歌・俳句が残され、来訪時に薬師堂に和歌などが奉納されたことも記録に残っている。青根温泉には七代重村など、他の歴代藩主も度々入湯に訪れている。また、藩政を統括する最高職の奉行（家老）から下された文書として、慶長一七（一六一二）年の『（仙台藩奉行人連署状）⁽¹⁹⁾』が残されている。



伊達吉村画像（仙台市博物館蔵）

二点目は、日記や用留が含まれていることである。仙台藩の各温泉の歴史は、これまで断片的にしか把握できなかったが、青根温泉に関しては、こうした史料により、温泉

運営の諸相を長期間にわたり通時的に把握することが可能になる。とりわけ、一八世紀後半以降の、藩への請願や浴場の普請といった湯守の活動や、飢饉時における湯守と藩・周辺住民との関わりを明らかにできることは有意義であろう。

三点目は、村内外の住民との関わりを示す文書が多数含まれていることである。具体的には、金品の取引関係書類や証文類、書簡類である。江戸時代の湯守や温泉宿の私的な交流関係については、全国的にみてもほとんど明らかにされていないが、こうした史料により、湯守・温泉宿の日常的な交際範囲や、温泉営業における必需品の入手ルートなどが解明され、温泉の成り立ちを多角的に検討することが可能になるだろう。

以上のように、佐藤仁右衛門家文書は、他地域との交流を視野に入れながら、温泉運営の実態を通時的に把握しうる好個な素材であるといえる。

3 本書収載史料の概要

本書では、翻刻した文書を、その性質と内容から「温

泉の歴史」「伊達家との交流」「日記・用留」「温泉の運営」「山林」「取引・交流」「証文」「家」「補遺」の各項目に分類して収載した。原則として年代の古い文書から収載し、年代未詳の文書を最後に収載している。

「温泉の歴史」には、主として青根温泉の沿革を叙述した文書を収載している。「1」『奥州青根山温泉記 全』（享保五（一七二〇）年）は、内題に「青根山薬師堂奉納温泉記」とあり、青根のほか、日本の温泉の歴史について叙述し、入浴法、温泉滞在時の過ごし方についても解説する。「2」『青根温泉小誌』には、享保五（一七二〇）年、五代藩主伊達吉村が青根を訪れた際、薬師堂に「温泉記」を奉納したと記されており、この『奥州青根山温泉記 全』が、奉納された「温泉記」ではないかと考えられる。『青根温泉小誌』は、『仙台志料』などの編纂に携わった明治期の漢学者岡千仞^{おかせんじん}が著した、温泉の概説である。

「伊達家との交流」には、四代藩主伊達綱村の書状や五代藩主伊達吉村の和歌を収載した。「4」『伊達綱村書状』は、綱村から家臣の佐藤右衛門易信に宛てられ

た書状である。雲雀のことについて、大立目弥寛から一八日に使いがあるはずであったが失念していたため、一九日に使いが来た。このため、二〇日の精進日をのぞき、明日（二一日）に参上するようにしたがあれば伝えてほしい、といった旨を綴っている。「5」『伊達吉村和歌』は、青根に湯治に出かけた千国和尚が、

もみじを紙に書き写して送ってきたのに対し、吉村が、「写し取った紅葉もみじばの色の見事さに気圧けおされて、夏の緑の葉をつけた木々（の見事さ）はそれほどでもなかったのだ（とわかった）」などと、もみじを称賛する二首の和歌を詠んだことを記す。「7」の『（書状）』は佐藤家の御殿に展示してあったものだが、「本郷庄二郎」なる者の手によるのか、他者の手によるのか、定かではない。

「日記・用留」には、佐藤家の事績のほか、湯守の用務や前川村、青根集落の社会状況について綴った簿冊を収載した。「8」『諸用留牒』は、青根住民の事績や藩主・役人の来訪歴、及びその際の住民の対応などについて記録している。「9」『（諸用留）』は、山林の下賜をめぐる前川村と藩との交渉過程や、天明・天保飢

饉時の村民への拝借金穀の状況などを記録している。「10」『諸御用目録』は、佐藤家の事績や藩主の来訪歴をまとめている。「11」『永々日記帳』は、江戸時代後期から明治時代初頭にかけての湯銭や御役代、献金をめぐる湯守と藩の交渉過程を記録するほか、幕末維新期の入湯客数についても記している。

「温泉の運営」には、温泉営業に関するルールや御役代額、浴場の普請など、青根温泉の運営に直接関わる文書を収載した。「12」『掟之事』は、客引きの禁止など温泉での諸商売に関する取り決めを条文化したものである。「13」『（仙台藩奉行人連署状）』は、慶長一七（一六一二）年に、仙台藩の奉行が湯別当衆（湯守）に対して湯銭（ここでは御役代のこと）年額四〇貫文（ただし本代Ⅱ永楽銭）の上納を命じた文書である。前川村『代数有之御百姓書出』（『宮城県史二三』）の湯守喜右衛門家の項目には「慶長十七年御奉行様御書付等」があり、村書出へ記すとあるが、この書付は本連署状のことではないだろうか。「14」『享保五年柴田郡前川村之内青根湯本え 御湯治ニ付竹木諸道具渡方帳』や

「17」『天明二年被遊 御入湯ニ付御小屋材木切方木数左之通り』は、藩主入湯に際して諸施設の普請に必要な材木を書き上げている。「19」『(出湯方諸事覚帳)』からは、佐藤家による周囲の宿屋への支援の状況を知ることができる。「20」『御分領中所々温泉ヶ所限り御役代并湯守名前帳』は、寛政九(一七九七)年時点の仙台藩領内の湯守と御役代を、金山方役人の帳簿から写し取った文書である。「22」『天保弐年五月出湯方請負人人指ヲ以被仰付候御下知老卷写』「26」『青根温泉御運上請負人ニ被成下候御下知老卷写』は、天保期に、佐藤家に御役代を請け負わせることを決定した際の通達や吟味書を写した文書である。「23」『高遜り替シ証文之事』「24」『本扣 乍恐口上書ヲ以奉願上候御事』「25」『乍恐口上書ヲ以奉願上候御事』は、天保飢饉時に湯守喜右衛門が佐藤家に屋敷の一部を譲渡した際に作成された文書である。これら「22」～「26」の文書からは、天保期の青根の不穏な状況を読み取ることができる。「28」『乍恐口上書ヲ以申上候御事』は、幕末期の温泉営業に関する願書類の写しである。「29」『慶応

三年九月青根御入湯之節同所之者無残諸品御払請候方上納金可仕旨老書ヲ以左ニ申渡候』「30」『慶応三年九月青根御入湯ニ付同所仁右衛門御払申請金并被相渡候分左ニ』は、慶応年間の藩主入湯おける佐藤家の金銭的負担を書き留めている。「31」～「33」は湯守請負や宿屋営業に関する願書類で、「31」『(佐藤仁右衛門永湯守願につき達書)』では、藩側の役人が、同一人物である「仁右衛門」と「善兵衛」を別人だと勘違いしており、名前をめぐる混乱の様子が伺え、興味深い。

「山林」で取り上げたのは、材木の下げ渡しに関する文書である。「34」『乍恐覚書を以奉願御事』は、湯守が薪料として使用するために、御林(藩有林)の明山を願い出た文書である。「36」『乍恐柴田郡前川村御百姓善兵衛奉願候御事』では、善兵衛が自分の居久根(屋敷林)の廻りに植えた杉の下げ渡しを請願している。「37」～「39」は、御林の払下げが承認された際の、通達や請書である。温泉では、入湯客が自炊するため、燃料となる薪の調達は重要な問題であった。

「取引・交流」は、江戸時代後半の、佐藤家の金品取

引関係を示す文書を収載した。「40」『貸方手扣』は、

佐藤家の融通先と金額、日時をまとめて書き綴った文書である。「43」『金華山道中日記』も中身は同内容である。金華山への道中日記を綴る予定であった帳簿を、貸金帳簿として使用したのであろう。「41」『清酒通』は、村田（現宮城県柴田郡村田町）の石田屋安左衛門との取引品と代金を記している。「42」『勘定調書』は、名取郡湯元村秋保温泉（現宮城県仙台市太白区）の湯守佐藤勘三郎が作成した頼母子講の会計帳簿である。この講の詳細は不明だが、佐藤仁右衛門家も加入者として出資していたとみられ、金六切一分九厘三毛の返金があったことなどがわかる。「44」～「46」の『覚』は、いずれも村田の大沼屋正七との、米などの取引書類である。

「証文」では、佐藤家が他家に金銭を融通した際の借用証文を収載した。村内はもとより、山形を含めた村外の各家と幅広い金融関係を取り結んでいたことが判明する。また、天保五（一八三四）年の「61」『（金子借用証文）』では、飢饉時の窮民救済を意図して融通が

行われていたこともわかる。

「家」では、佐藤家の事績が明らかになる文書を収載した。「68」『親様死去に付御悔覚帳』は、先代の死去時に寄せられた御悔（香奠）を書き上げた帳面で、佐藤家の交流関係の一端を知り手掛かりにもなる。「69」『乍恐奉願候御事』は、先代死去の忌中明けに嫡子善兵衛が「仁右衛門」への改名を願った文書である。

「71」『乍恐口上書ヲ以奉願上候御事』も、ほぼ同主旨の文書である。「72」～「76」は、天保一二（一八四一）年から翌年にかけて、佐藤家が、藩への献金を条件に、青根温泉の永代湯守に任じられたいと要望した請願書である。「78」『御先祖様ヨリ御遜り之品左ニ印置覚帳』は、調度品など、先祖伝来の品々を書き上げたリストである。「79」『御先祖様より家内相続被仰渡代々申伝之事』は、家訓ともいうべき宿屋営業上の注意事項や相伝すべき事柄について、箇条書きで記している。「80」は、上山（現山形県上市市）の豆油屋作右衛門からの、「81」は、秋保温泉湯守の佐藤勘三郎からの書状である。前者は、入湯時の紛失物の取り計らいを願う

出たもの、後者は仙台の藤山家への借財返済について要望したものである。佐藤仁右衛門家文書には、この他にも多数の書状が含まれている。

「補遺」には、伊達政宗書状を収載した。『仙台市史資料編一二 伊達政宗文書三』および『仙台市史資料編一三 伊達政宗文書四』に収載されており、佐藤仁右衛門家所蔵となっているが、現在は所在不明となっている。「82」は徳川家康・秀忠の家臣であった内藤外記正重宛、「83」は自身の家臣であった四竈勘右衛門宛である。

- (1) 『諸御用目録』（一八六四年、本書一〇号文書）。
- (2) 永澤小兵衛『青根温泉志 全』（一八九一年）。
- (3) 宮城県史編纂委員会編『宮城県史二三』（宮城県史刊行会、一九五四年）。
- (4) 『温泉場運営定約状』（一七四〇年、本書一五号文書）。
- (5) 『乍恐奉願候御事』（一七九〇年、本書六九号文書）。

- (6) 『柴田郡前川村青根佐藤仁右衛門養子家督奉願候御事』（一八〇四年、本書七〇号文書）。

- (7) 『乍恐口上書ヲ以奉願上候御事』（一八一二年、本書七一号文書）、『御先祖様ヨリ御遜り之品左ニ印置覚帳』（年代不明、本書七八号文書）。

- (8) 『出湯方諸事覚帳』（一七九〇年、本書一九号文書）。

- (9) 『諸用留』（一七五二～一八四一年、本書九号文書）。

- (10) 『湯守永請請願書』（一八四一年、本書七五号文書）。ただし、同七二号文書では、献金額は二〇〇両となっている。

- (11) 『乍恐内願奉申上候御事』（一八四二年、本書七六号文書）。

- (12) 『覚』（一八四六年、本書七七号文書）。

- (13) 前掲註1『諸御用目録』。

- (14) 『金子借用証文』（一八一七年、本書五六号文書）。

- (15) 前掲註8『出湯方諸事覚帳』。

- (16) 『金子借用証文』（一八三四年、本書六一号文書）。

- (17) 『永々日記帳』（一八四五～一八七九年、本書一一号文書）。

- (18) 『伊達吉村和歌』（年未詳、本書五号文書）、『伊達吉村俳句』（年未詳、同六号文書）。

- (19) 『諸用留牒』（一七二八～一七八〇年、本書八号文書）。

- (20) 『仙台藩奉行人連署状』（一六一二年、本書一三号文書）。

◇論説

江戸時代の温泉と交流

―陸奥国柴田郡前川村青根温泉を事例に―

はじめに

本稿の目的は、江戸時代の青根温泉（現宮城県柴田郡川崎町）の運営状況について明らかにすること、同温泉の湯守佐藤仁右衛門家を事例に、温泉宿を営業する家が他の家とどのような交流関係をもち、また湯守が他の湯守とどのような関係を築いていたのかを明らかにすること、にある。

筆者は、これまで仙台藩領内の温泉について、地域住民による活用のあり方やそれをめぐる争論^①、さらには領主政策と温泉との関係^②について、明らかにしてきた。ただ、分析対象としたのは、名取郡湯元村（現宮城県仙台市太白区）の秋保温泉や玉造郡大口村（現宮城県大崎市）の川渡温泉で、青根温泉については言及できなかった。後述の如く、青根温泉は領内の温泉の中で藩主伊達家との関わりが最も深く、湯守は江戸時

代の初頭には領内の温泉を統括する任務を負っていたとみられる。青根温泉の運営状況を明らかにすることは、仙台藩領の温泉運営の特質を説明する上で不可欠な過程である。なお、『柴田郡誌 全』（一九二五年）や『川崎町史通史編』（一九七五年）においても、青根温泉に関しては概要が記されているのみである。

江戸時代の温泉滞在は二週間前後の長期にわたることが多く、入湯客は名産品などを購入するだけでなく、生活用の必要物資も現地で購入し、食事等は自炊で賄うことになる。つまり、当時の温泉は、消費活動が非常に活発に行われる場所だったのである。この点、温泉で商いされる入湯客用の必需品や、労働者である奉公人の出入状況を明らかにした成果はみられるが、温泉の成り立ちを検討するにあたっては、今後、そうした物資の入手ルートを説明することも必要になってくる。さらに、そもそも旅行史全般を見渡しても、江戸時代の宿屋について、その種類や機能を述べた文献は確認できるが、宿屋と周囲の家との日常的・非日常的な交流を扱った専論はみられないように思われる。

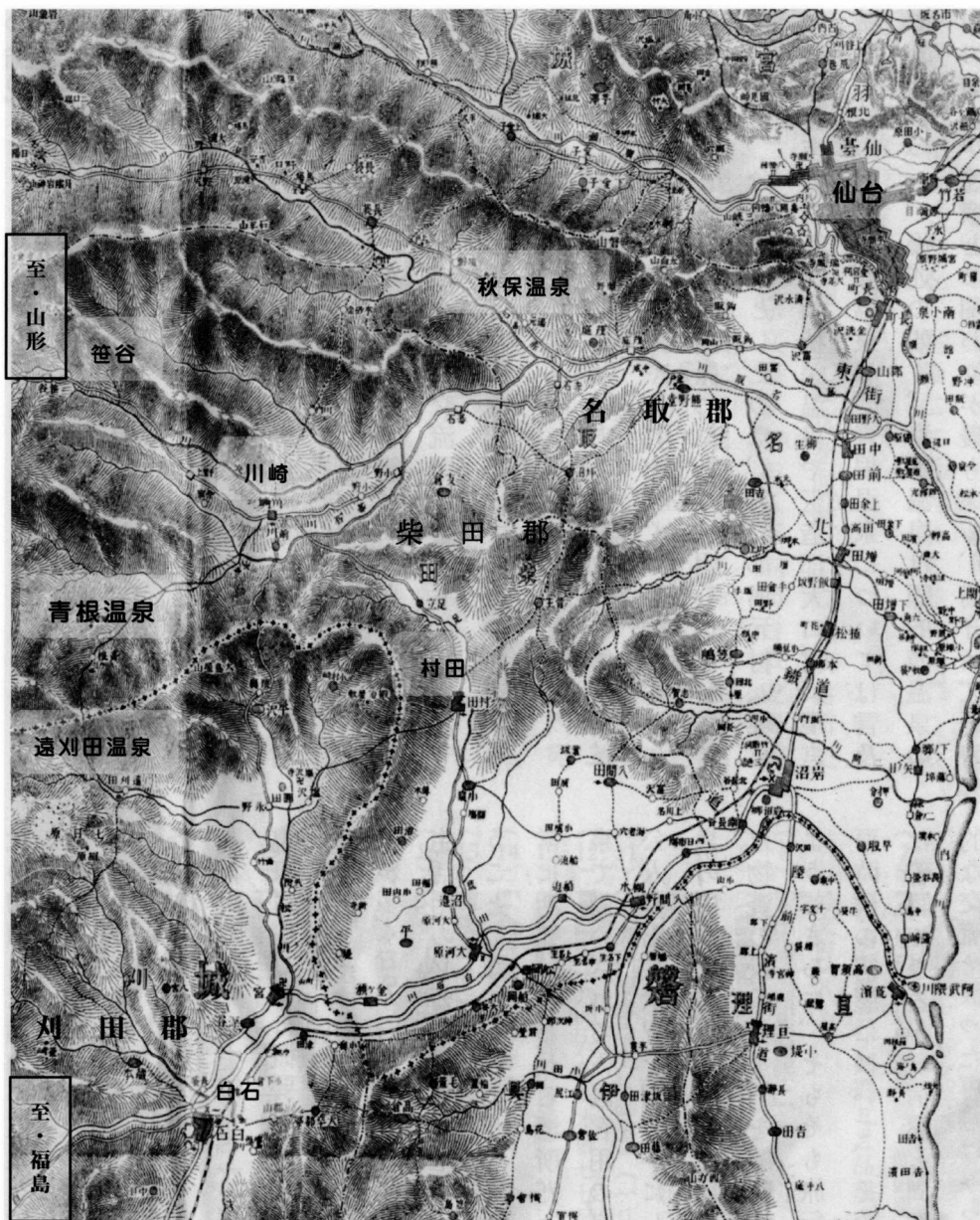


図 青根温泉周辺図（仙台方面、明治前期、『宮城県全図』『日本歴史地名大系 4 宮城県の地名』平凡社、1987 年）に加筆）

こうした分析は宿屋経営の背景に光を当てようとする試みであるが、江戸時代が寺社参詣や名所見物等、旅が隆盛を極めた時代であり、宿屋の果たす役割が大きかったことを考えれば、研究上の意義は決して小さくはないだろう。

本稿は、以上のような課題意識を念頭に置きつつ、佐藤仁右衛門家文書を素材に、青根温泉の運営状況を明らかにすると共に、同家と他家との交流について、その範囲と相手を解明する基礎的作業に取り組みたい。

一 江戸時代の青根温泉

1 温泉の沿革

青根温泉は、蔵王連峰東麓の花房山中腹、標高約五〇〇メートルに位置している。江戸時代には仙台藩領の陸奥国柴田郡前川村に属していた。

明治二四（一八九一）年の岡千仞撰『青根温泉小誌』⁽⁵⁾によると、温泉は享祿・天文年間に佐藤・丹野四氏によって発見されたとされる。また、同年の永澤小兵衛『青根温泉志 全』⁽⁶⁾によると、天文一五（一五四六）年に

前川村八澤屋敷に居住していた先祖佐藤彦惣が佐藤喜右衛門・丹野七兵衛・佐藤権十郎を伴って憶（おも青木）を伐採しようとしたところ、根元の周囲の湯気に気づき、掘削すると温泉が湧出した。以降、温泉は青根温泉と名付けられ、四人が移住して居を構えたという。全国の温泉の発見には高僧や動物にまつわる伝承も多いが、青根温泉に関しては、そうした奇譚はみられない。温泉の歴史は青根佐藤仁右衛門家の歴史そのものといってもよく、発見主が一貫して温泉を守り続けてきたことにより、その歴史は現実的なものとして語り継がれてきたといえるだろう。

江戸時代は、儒医学者により温泉の学術的研究が本格的に開始された時代であった。その分析は視覚（色）・嗅覚（臭い）・味覚（味）・触覚（温度）という五感による方法が中心で、化学的な成分分析手法が取り入れられたわけではなかったが、それでも分析結果をまとめた温泉の専門書が一八世紀以降次々に著されるようになった。その中には、全国の温泉を紹介し、またその効能について論じるものもある。各温泉では、研究

表1 青根温泉を訪れた仙台藩主

年代	期間	藩主名
享保3 (1718) 年	10月17日～11月2日	5代・伊達吉村
享保5 (1720) 年	10月15日～11月1日	
明和3 (1766) 年	8月25日～9月7日	7代・伊達重村
明和5 (1768) 年	8月10日～8月25日	
明和9 (1772) 年	9月28日～10月14日	
安永5 (1776) 年	9月26日～10月8日	
安永7 (1778) 年	9月29日～10月11日	
安永9 (1780) 年	10月1日～10月13日	
天明2 (1782) 年	10月1日～10月13日	
寛政元 (1789) 年	9月20日～10月2日	10代・伊達斉宗
文政元 (1818) 年	9月28日～10月12日	
慶応元 (1865) 年	4月3日～(不明)	13代・伊達斉邦
慶応2 (1866) 年	3月19日～(不明)	
慶応3 (1867) 年	9月6日～(不明)	

※山形敏一「仙台藩温泉志(2)」(『仙台郷土研究』13-10, 1943年)、作並清亮編『東藩史稿』(渡邊弘発行、1915年)、『諸御用目録』(本書10号文書)などより作成。期間は原則仙台到着日を記載。

の成果を取り入れた「入浴心得」が作成され、入浴法と共に温泉の効能がアピールされるようになった。その結果、全国各地の温泉に赴く旅行者がしだいに増加していったのである。

元文三(一七三八)年に京都で刊行された、温泉学術研究の嚆矢ともいわれる香川修徳『一本堂薬撰続編』には、仙台藩領の温泉として、青根・名取(秋保)・玉

造(川渡)・鳴子・鎌崎(鎌先)が紹介されている。江戸時代の比較的早い段階から、青根温泉の名は全国的に知られていたものである。また、一八世紀の仙台藩の官撰地誌『奥羽観蹟聞老

志』⁽⁸⁾・『封内名蹟志』⁽⁹⁾・『封内風土記』⁽¹⁰⁾にも青根温泉の記述がある。『封内風土記』は、村単位に戸数や地理、自然、歴史などがまとめられおり、前川村の項目で青根温泉が紹介されている。温泉のうち、大湯は頭痛・打撲・婦人病などに、妙護湯(名号湯)は疝氣・打撲・眼病・湿瘡(疥癬)に効果があるとされていた。

青根温泉は、仙台藩主伊達家とのゆかりも深く、歴代の藩主が入湯に訪れている。現在判明する藩主の来訪歴を【表1】に示したが、これによると藩主四名計一四度の来訪を確認することができる。仙台藩領内では、青根のほか、鎌先・秋保等の温泉に藩主が来訪していたが、最も多く藩主に利用されたのは青根温泉であったとみられる。

なかでも、とりわけ関わりが深かったのは七代藩主伊達重村である。重村は在任中に計八度青根に通っており、明和九(一七七二)年には、自ら『重村公青根御湯浴之記』⁽¹¹⁾という紀行文を著し、滞在中に紅葉を愛で、和歌を詠み、狩りに興じる様子を書き記している。安永七(一七七八)年にも、『青根山薬師堂奉納和歌』⁽¹²⁾を

著し、「年比ねちけわつらハしう氣をふさき動氣(マカ)などいふものして世のうきふしの事しけく国務など心いれてかうかへぬれは、ものにくしこゝろもうとゝゝしうなりつゝ」と、政務などによって心労が蓄積し、鬱屈した精神状態を吐露しており、それを治癒するために青根に遊歴したことがわかる。なお、この滞在中には、谷風梶之助らの相撲を見物している。⁽¹³⁾江戸時代の温泉旅行は長期滞在が基本であり、仙台藩主もまた二週間程度青根温泉に滞在しているが、その間入浴のみに出精するのではなく、時に趣味を嗜み、時に外出して身体を動かした。重村の来訪時期が常に秋であることは、自然鑑賞による精神の療養効果が期待されていたことを示唆している。当時の温泉療養とはこのようなものであったのである。

なお、明治時代以降、青根温泉には齋藤茂吉や田山花袋⁽¹⁵⁾、与謝野晶子⁽¹⁶⁾などの文化人が訪れている。

2 温泉の運営

江戸時代の青根は、前川村を構成する一集落であつ

た。前川村は川崎伊達家の知行地で、一八世紀半ばには戸数約一六〇であつたが、青根の戸数は判然としな⁽¹⁷⁾い。ただ、元治元（一八六四）年にまとめられたとみられる御用留⁽¹⁸⁾によると、仙台藩唯一の領内総検地である寛永総検地において、青根で名請されたのは仁右衛門家の先祖彦惣のほか、喜右衛門・権十郎・藤七の四名であつた。また、宝暦二（一七五二）年の薬師堂への和歌・温泉記等の奉納者には、仁右衛門・喜右衛門・権十郎・六太の名があり、天明飢饉の際の青根における大麦拝借者は、仁右衛門・七兵衛・喜右衛門・権十郎⁽²⁰⁾であつた。さらに、近世後期に仁右衛門が永久湯守を請願した際、藩の金山本締は「青根之儀ハ人頭四人」（人頭とは本百姓のこと）と述べ、天保二（一八三一）年に仁右衛門が御役代請負人に任じられた文書の中で、金山下代は青根について、「湯守共四人」と述べている。⁽²¹⁾これらの点に後述の御役代請負形態を加味すると、青根の人頭は四人で、実質的にはその全てが湯守の役割を担っていたと考えられる。

湯守とは藩が任命する温泉の管理人のことであり、

宿屋を営業すると共に入浴施設を整備して入湯客の利用に供し、彼らから徴収した湯銭（入湯料）の一部を御役代（温泉税）として藩に上納することを主な任務としていた。湯守は、温泉に一人置かれる場合もあれば、複数置かれる場合もあった。『代数有之御百姓書上』によると、初代藩主伊達政宗の時代の慶長一九（一六一四）年以前には、青根湯守の喜右衛門が遠刈田や秋保、鳴子など、領内一二の温泉から御役代計四〇貫文を徴収していたという。⁽²³⁾本書所収一二号文書は、慶長一七（一六一二）年に、藩の奉行（家老）が湯守に対して本代（永楽銭代）四〇貫文の湯銭（この時代は御役代と同義）の納入を命じた史料である。近世初期には、青根湯守が藩領内の温泉を統括する役割を担っていたのである。

このように、御役代を藩に上納するのは本来湯守の務めであったが、人頭Ⅱ湯守（Ⅱ宿屋）というやや特異な社会構成となっていた青根の場合は少し事情が異なっている。幕末期、仁右衛門が永代湯守を請願するにあたり、これまでの温泉営業について書き綴った史料には、「青根温泉請負之義天保之凶年前は御村耆村請

負ニ罷成、地本ニおゐて拙者初四人共ニ御役銭取立主立仕居申候」とあって、天保飢饉以前には温泉は前川村の村請であり、四人が「御役銭」（湯銭のことか）を取り立てていたことがわかる。⁽²⁵⁾この文面の意味するところは、湯守が入湯客から徴収した湯銭が前川村に納入され、そこから藩に上納された御役代を差し引いた残額が村の収入になっていたということであろう。このような温泉の運営体制（御役代の村請）は近世前期に確立されていたようだが、元文五（一七四〇）年には、青根の善兵衛・六兵衛・喜右衛門・権十郎の四名が村方へ今代（寛永銭代）二〇貫文を配分することを条件に御役代の上納を請け負うことを請願し、認められている。⁽²⁶⁾これは当初四年間のみの措置とされたようだが、安永八（一七七九）年に、火災を理由に仁右衛門・喜右衛門・権十郎・七兵衛が再度の御役代村請を請願した記録も残されており、四〇年近く続いた可能性もある。また、天保二（一八三一）年には、仁右衛門が年間八〇貫文で御役代上納を請け負っている。⁽²⁸⁾いずれにしても、入湯客の動向や村・湯守の経営状況を勘案し、

柔軟な温泉収益の運用方法が採られていたとみられる。

こうした体制が大きく変化したのは、天保期である。

天保飢饉は青根にも深刻な被害をもたらし、湯守の一人喜右衛門は露命を凌ぐため、屋敷地の一部を仁右衛門に売り渡している。⁽²⁹⁾凶作のみならず、入湯客の減少という事態に直面し、他の湯守の経営も苦境に立たされたとみられる。飢饉後の天保一〇（一八三九）年には、御役代の請負を望む者がいなくなり、仁右衛門が以前の半額の年間四〇貫文で請け負うこととなった。⁽³⁰⁾以後、青根温泉の湯守を務めるのは佐藤仁右衛門家のみとなる。幕末期の鉱物資源の請負状況をまとめた『仙台領鉱物調』には、青根の「出湯」、および「名号湯」「新湯」の請負人として「永湯守善兵衛」（善兵衛は佐藤家の当主）のみが記されている。⁽³¹⁾天保期頃を境に、青根温泉は、「湯守四人・前川村御役代請負」から「湯守仁右衛門・同人御役代請負」へと運営の体制が変化したと考えられる。⁽³²⁾

なお、（大湯の）御役代の額は、一八世紀中は飢饉などの非常時を除いて年額五〇貫文であったが、寛政一

〇（一七九八）年に藩の温泉管理体制が強化されて以降は、同年に五五貫文、天保二（一八三一）年に八〇貫文と増額された。⁽³³⁾飢饉時に一時無税の措置が採られ、既述の如く同一〇年からは四〇貫文となったが、以後再び増額され、安政年間には九〇貫文となって幕末に至っている。仙台藩では、玉造郡の川渡温泉（現宮城県大崎市）で、文政年間に御役代が一〇貫文となっていることが確認できるが、⁽³⁴⁾青根温泉の御役代額はこれに次いで高額であった。嘉永六（一八五三）年からは、名号湯・新湯の御役代も上納されることとなり、年間各五〇〇文で仁右衛門が請け負っている。⁽³⁵⁾

江戸時代の青根温泉の入浴施設にはどのようなものがあつたのだろうか。『奥羽観蹟聞老志』によると、まず青根には東西六間南北二間の湯舎（浴場）があり、山間から湧出した湯を笕（樋）によって浴場へ流落させていた。また、これとは別に長い笕を設け、浴場近くの土橋の下をくぐらせて下降させ、川の下流に設けた四間四方の浴場に流落させていたという。⁽³⁶⁾この浴場のうち、前者は大湯、後者は大瀧湯であつたと考えら

表2 青根温泉の木賃・湯銭など（1人1泊あたり）

年代	木賃代 (1人1泊)	湯銭 (1人1泊)	他の代金、備考	出典
天保8 (1837) 年	50 文	10 文	これ以前は木賃代 40 文。	『(諸用留)』(本書9号) 『永々日記帳』(本書11号)
嘉永6 (1853) 年		10 文	湯銭は嘉永6年に領内の温泉で統一となる。但し、青根は湯銭 12 文であったとする同年の記載もある。	
安政7 (1860) 年	60 文	10 文		
文久3 (1863) 年 (か)	70 文	10 文		
慶応2 (1866) 年	木賃湯銭合計 120 文		大布団 1つ 23 文、小布団 1つ 13 文。	
慶応4 (1868) 年	160 文	10 文		
明治2 (1869) 年	260 文	20 文	布団 1つ 100 文、燈明銭 8 文。	
明治3 (1870) 年	330 文	23 文	布団 1つ 110 文、小布団 1つ 60 文。	
明治4 (1871) 年	400 文	28 文	夜着 1つ 180 文、布団 1つ 150 文、小布団 1つ 80 文。	

※各年代間の代金は不明。

れる。江戸時代の温泉は共同浴場が一般的だが、大湯は青根温泉の中核をなす浴場であり、御役代も原則的に大湯に対してかけられていた。大瀧湯も一八世紀から時折史料中にその名がみられるが、大湯の附属的な浴場であったと思われる。『封内風土記』に大湯と共に登場するのが名号湯（妙子湯、名子湯、妙護湯）である。⁽³⁷⁾ 名号湯も元文元（一七四〇）年の史料に「大瀧妙子普請仕度候」⁽³⁸⁾ などとあるように、遅くとも一八世紀には発見されていたとみられるが、継続して史料上に登場するわけではない。

その利用状況が判然とするのは、嘉永六（一八五三）年に、仁右衛門らが名号湯と新湯の新規開発願いを出して以降のことである。この年、仁右衛門らは、御役代年間各五〇〇文での開湯を請願している。新湯はこの時初めて開発された浴場であるとみられる。⁽³⁹⁾ おそらく、名号湯は早い段階で発見されていたものの、入湯客がそれほど多くなく、当該期に至り多少の利用が見込める状況になったため、御役代上納を条件に本格的な開発・営業が企図されたのではないだろうか。

江戸時代の入湯客は食事を自炊で済ませており、宿屋は木賃宿で、入湯客からは木賃代と湯銭を徴収していた。【表2】は、青根温泉で徴収されていた木賃代や湯銭の変遷を示したものである。これによると、天保八（一八三七）年に五〇文であった木賃代はじわじわと上がっていき、慶応年間以降に一気に跳ね上がっていることがわかる。また、湯銭も慶応四（一八六八）年から翌年にかけて二倍に引き上がっている。布団代も嘉永六（一八五三）年と比較すると、明治二（一八六九）年は約五倍となっており、幕末維新期の狂乱物

価と社会の混乱ぶりをみてとることができる。

木賃代値上げの手順については、天保八（一八三七）年には、近隣の温泉場でもある遠刈田の者と相談して値上げを決めていることがわかる。⁽⁴⁰⁾ また、安政七（一八六〇）年には、青根や秋保など、領内の南部を中心とする各地の温泉湯守が藩に請願を行い、鉾山行政を担当する金山方役人の実地検分を経て値上げが認められ、領内温泉の木賃代と湯銭が木賃七〇文、湯銭一〇文に変更された。⁽⁴¹⁾ こうした木賃代や湯銭の統一は、天保年間には川渡や鳴子を含む領内北部の玉造郡の温泉で確認することができ、⁽⁴²⁾ これに既述した青根や遠刈田といった南部の統一の動きが相俟って領内全体での統一が実現していったといえるだろう（詳しくは後述）。これ以降も、値上げに際しては領内の温泉湯守が連名で請願を行っていくことになるが、このことは藩や他の湯守の同意を得ないままでの恣意的な代金の変更が認められなかったことを意味している。

江戸時代の青根温泉には、どのくらいの数の入湯客が訪れていたのか。明治二四（一八九一）年の『青根

温泉志』によると、当時の宿屋は、大湯と新湯に近接した佐藤仁右衛門・丹野七兵衛・佐藤重太郎の三軒と、名号湯に近接した佐藤文四郎・丹野七三郎の二軒、計五軒であり、宮城県内及び福島県・山形県などから年間一〇万人以上の入湯客が訪れていたという。⁽⁴³⁾ ただ、江戸時代に関して知りうる史料は少なく、佐藤家文書の『永々日記帳』⁽⁴⁴⁾ から、幕末維新期の断片的な情報を明らかにできるのみである。これによると、明治六（一八七三）年は五軒合わせて三万二一四七人、同七年は三万一八六八人、同八年は三万五七二八人、といった数字が確認できる一方、別の箇所では慶応二（一八六六）年一一一七人、同三年一七七〇人といった数字も確認できる（表3）。特に、明治以降の人数把握に大きな隔たりがみられ、整合的な判断が難しいが、おそらく【表3】は佐藤仁右衛門家一軒の宿泊者数であり、五軒合わせて三万人超という数字は延べ人数（延べ泊数）ではないかと考えられる。表からは、戊辰戦争や維新期の混乱の影響で明治元（一八六八）年から同三年にかけて、宿泊者数が著しく減少していることがわ

表3 青根温泉の宿泊者数（佐藤仁右衛門家）

年代	人数	備考
慶応2（1866）年	1117人	
慶応3（1867）年	1770人	7月以降の人数。
明治元（1868）年	73人	
明治2（1869）年	688人	
明治3（1870）年	651人	
明治4（1871）年	1160人	
明治5（1872）年	（不明）	
明治6（1873）年	1282人	
明治7（1874）年	2618人	
明治8（1875）年	3179人	
明治9（1876）年	2717人	
明治10（1877）年	3559人	

※『永々日記帳』（本書11号）より作成。

かる。当時の宿屋経営は苦難に満ちていたと思われるが、その後は回復傾向にあったようである。

複数の宿屋が隣接する温泉では、運営に関して住民の間で取り決めがなされることが多かったが、青根においても『掟之事』（年不明）と題した

合には、永代湯守佐藤仁右衛門家へ届け出ることとされている。入湯客の扱い、つまりは集客をめぐるトラブルは江戸時代から全国の温泉で後を絶たず、仙台藩でも秋保温泉で客引きや宿屋の新設、濁酒商売の看板掲示などをめぐって藩の裁定を仰ぐ争論が発生している。⁽⁴⁶⁾ 特定の宿屋に宿泊者が集中することやトラブルの発生を未然に防ぐため、青根温泉でも入湯客の取り扱いには細心の注意が払われていたのであり、住民による商売上の自由競争はある程度掣肘されていたのである。

二 佐藤家の交流

1 香奠帳・書状・貸金帳から

全一七ヶ条の規約が定められている。普請の際には人足を出すこと、藩役人廻村の際には案内を出すこと、といった住民同士の協力を約した条文がみられるほか、特徴的なのは客引きや商売に関する条文が多くみられることである。「客人え詞相掛宿引等仕候者より先年通五匁文咎料可為相出候事」とあるように、来訪者に声をかけ、自らの宿に呼び込む客引行為は禁止されており、罰金五貫文が課されていた。また、座頭や芸人を留め置く際や、長屋の入湯客に振売等が商売をする場

本章では、佐藤家を例に、江戸時代の宿屋・湯守の交流関係を検証したい。まず、香奠帳と書状から、佐藤家の周囲との交流状況を確認してみよう。寛政元（一七八九）年、先代の仁右衛門死去に際して寄せられた香奠をまとめた帳面が、『親様死去に付御悔覚帳』である。⁽⁴⁷⁾ 【表4】は、この帳面に登場する人物を地名ごとに

表4 『親様死去に付御悔覚帳』(寛政元年)
に登場する地名と人名

郡名	村・字名	人名
柴田郡	前川村大向	喜左衛門
		次兵衛
		伊兵衛
	前川村下浪形	次郎兵衛
		弥左衛門
	前川村上浪形	松之助
		庄兵衛
	前川村浪形	十左衛門
	前川村水上	甚之助
	前川村鉤取	利三郎
		七兵衛
		喜右衛門
	大河原本町	長蔵
		権兵衛
	川崎中町	源太郎
		半太
		林右衛門
		留吉
		太郎八
	川崎本町	次兵衛
		庄太郎
		源七
	(川崎家中か)	樫山左膳
	今宿村立野	太四郎
		喜四郎
		市太郎
	今宿村笹谷	九郎右衛門
		清四郎
		清治
	今宿村野上	李兵衛
		源之助
	村田郷	利左衛門
		庄右衛門
		市之丞
		清之丞
		庄七
刈田郡		圓四郎
		久五郎
	村田本町	源太郎
	円田村永野	清右衛門
		八太郎
	宮村新地	七太郎
		十吉
	宮村遠刈田	六太郎
		十兵衛
	宮村	蓮蔵寺
	白石中町	喜六
	(白石家中か)	大波七兵衛
	小下倉村	武兵衛
	(平沢村か) 大橋	久次
		万蔵

整理したものである。青根温泉に居住する七兵衛や喜右衛門を除いて、人名から佐藤家との具体的な関係を導き出すことは難しい。一方、地名に着目すると、前川村をはじめとする柴田郡内の町村が多いことがわかる。佐藤家が居住する前川村と近隣の町村がみられるのは当然のことともいえるが、川崎や今宿笹谷・野上、村田といった街道沿いの町場が目立つことは特徴の一つとみてよいだろう。

仙台藩領内では、一九世紀以降に新たな商人の台頭がみられるため、この表にみられる特徴を江戸時代一般の傾向として認識することは難しいかもしれない。

ただ、ここではひとまず一八世紀後半の状況として、佐藤家の弔事に際して香奠を寄せるような親密な関係にある家は、柴田郡や刈田郡内という、地縁性に基づく近隣の範囲に限定されていたこと、その中でも町場の家との交流が密接であったとみられる点を指摘しておきたい。

次に、書状から同家の交流関係を確認したい。佐藤家文書には、同家に宛てられた多数の書状が残されている。ほとんどの書状には年代が付されていないため、時代を特定できないものもあるが、肩書や内容から江戸時代のものであると判断でき、差出側の情報が明らか

かなものを一覧としてまとめたのが、【表5】である。宛名については、「御兄様」などと表記され、人物が特定できないものは除き、江戸時代中後期以降の当主である「仁右衛門」「善兵衛」が含まれているものをリスト化している（内容や差出人の名前から一九世紀以降の書状が多いとみられる）。また、同一人物から複数の書状が出されている場合は、代表的な用途を「内容」欄に記載しており、家族内でやりとりした書状（例えば、仁右衛門が遠方から子息に宛てて出した書状など）は、表から除いている。

【表5】からまず明らかなのは、【表4】と比べ、山形方面を含む比較的広範囲にわたる交流関係が確認できるということである。もともとこれは、【表4】の寛政年間とは異なる年代の書状が多く、交流環境が変化している可能性が考えられること、そもそも前川村内など近隣住民とはわざわざ書状のやりとりをする必要がないと考えられること、といった事情からある程度は想定しうる傾向である。

次に、具体的な交流相手としては、村田や仙台城下

の商人が目立っている。なかでも、村田の大沼正七家や大沼庄治郎（正次郎）家は、江戸時代後期には紅花をはじめとする商品の製造販売を業とする豪商として知られていた。佐藤家文書には、大沼正七家との米の取引に関する文書などが残されている。⁽⁴⁸⁾ 同じく村田の山多（田）屋直治は、仁右衛門の「親類」として佐藤家文書中に名前が登場する。この山田家は、村田で最初に酒造業を始めたとされる山田新五郎家の系統であろうか。また、仙台城下に関して、二日町の嵯峨屋作蔵は、城下の味噌醤油仲間の一員として史料上⁽⁴⁹⁾に登場する嵯峨屋順作との関係が想定される。大坂屋新七は、享和二（一八〇二）年時点で佐藤家善兵衛のいとこであることがわかっており、文化元（一八〇四）年には、新七家の添人「十代吉」を養子に迎え、家督を相続させたい旨、仁右衛門が願い出ている。⁽⁵¹⁾ 佐藤家と大坂屋は商取引の相手という関係に止まらない、親密な人的交流関係をもっていたようである。

また、【表5】からは、湯元村秋保温泉の湯守佐藤勘三郎家や宮村遠刈田温泉の湯守大沼勘十郎との交流も

表5 佐藤仁右衛門（善兵衛）宛書状一覧（江戸時代）

差出人	内容
前川村・久吉	拝借金御責付仰せ渡され恵吉方へ責付候共不在につき、ご相談のこと。
(肝入) 大宮久次	市四郎 12 日飯前までに大河原会所へ罷出候様なさるべし。
御村中、(肝入) 市之助	村備初につき、安き初これあり候間、御預金子の利足金お出し下されたきこと。
(肝入) 久七	町方へ5両送付のこと。
川崎町・常吉	刈田より拝借金のこと。
一ノ鳥居役所・大宮善吉、大宮仲蔵、大宮太郎七	白石寛治殿不始末の段につき御存慮伺い。
一ノ鳥居先達中	お話の儀、私共下山の砌に直々申達すこと。
一ノ鳥居・般若院	城下材木町講中より簀1流奉納の儀のこと。
遠刈田・大沼勘十郎	借用金のこと。
遠刈田・半蔵	金子の儀、3切ずつになし下され当月末に差し上げ申し候こと。
遠刈田・繁右衛門	借用金の年賦願い。
遠刈田・久次	金子拝借願い。
村田・石田屋源兵衛	新米4斗用立てのこと。
村田・山多(田)屋直治	儀左衛門一件のこと。
村田・大沼屋正七	御勘定延引のこと。
田専(村田・田山屋専吉)	醤油受け取り下さるべし。塩は当分御私留のこと。
大沼屋庄次郎	頃日お頼みの儀について。
大沼屋庄太郎	米の儀色々手配仕候所、至って出穀これなく買方難しきこと。
仙台国分町・頓宮屋直助	金子のこと。薬2品調達のこと。魚類八百屋物参り下さるべし。
仙台国分町・大坂屋新七	旧冬出火の儀につき相談。家内丈夫にて越年のこと。膳など受け取りのこと。
仙台国分町・大坂屋利七	白綿綿受け取りのこと。染糸出来次第お届け申し上げること。
仙台宮町・佐藤屋清左衛門	酒不足代お貸し下されたきこと。
仙台二日町・嵯峨屋作蔵	病気に付き吟味延引のこと。
仙台・藤山秀輔	申し合わせの50切と去年分利足勘定のこと。
湯元村・佐藤勘三郎	仙台藤山様方の御借財御返済なさるべきこと。頼母子金のこと。
白石・阿部傳十郎	岩沼町菊次当暮まで待ちくれ候様申し述べに罷り越し候こと。
白石・石田屋近蔵	商売元入金拝借願い。
梁川・関東屋儀左衛門	村田山三殿貸金引き受けのこと。
宇田郡程田村・覚法院	私母湯治につきお世話願い。
東根・武右衛門	俵なしにて4斗5升差し上げ申し候こと。
山形繪物町・漆屋吉之介	荷物の件、遠刈田荷物と作合に致し差し上げのこと。
山形繪物町・漆屋四郎治	村田縁組の義仰せ下されありがたきこと。金子受け取りのこと。注文品送品のこと。
上山裏町・豆油屋作右衛門	入湯の際品物紛失につき、吟味願い。
大浄院	此度何分御勘弁然るべく第一何事御覚悟のこと。
中木儀左衛門、同八十八	御用達の金子、元利返済のこと。
兵三郎、五郎治	親類中かわりなく安心されたきこと。
大宮半蔵	借用金子の儀、いか様にも利足勘定の見詰御座なきこと。
■村・栄吉	品代金孫市殿へ相渡すこと、当春五日町焼失のこと。
よしのや吉兵衛	ろうそく430挺差し上げ申し候こと。
斎又左衛門	借金返済見詰これなく、当年越年難しき程のこと。
十(重)太郎	年賦金の返済について。
■町・武田久松	金子受け取りのこと。たばこ差し上げ申候や御報下さるべくこと。
金山下代・伊藤宗五郎	一日も早く登仙なさるべし。
相原屋留八	ろうそく代勘定下値にいたし差し上げのこと。
三坂九郎次、三太郎	病状見舞いと連絡。
石津屋兵蔵	塩鮭1尾ご惠贈の御礼。御姉様のお見舞い。
小関東作	頼母子掛け金持参の事。
高橋貫太夫	借用金のこと。
大山■意	返金の儀、2月中まで延滞願い。
庄二郎	損料は皆済につき、借用致す覚御座なきこと。
大永左衛門、樫広治	金子拝借願い。
和合屋清兵衛	代物今日差し上げ候につき、金子御貸し渡し下されたし。
佐十右衛門	金子当座指繰御用立のこと。
石田や尽蔵	金2両受け取り。残りはこの度差し上げ候内へ入帳仕候こと。
若長左衛門、高右衛門七	当座の金子借用願い。

※文書中に差出人の地名が明記されていない場合、他文書から特定できる箇所は適宜補っている。

確認できる。勘三郎家とは頼母子講を通じた付き合いも確認でき、大沼家かどうかは特定できないが、天保八（一八三七）年には、佐藤家が遠刈田に赴き、相談の上で湯銭の値上げを決定している。⁽⁵²⁾秋保温泉や遠刈田温泉とは湯守としては勿論、金融や宿屋営業をめぐっても深い交流関係を築いていたといえよう。

なお、書状の内容については、表から明らかな通り、金銭貸借と取引品に関するものがほとんどであるといつてよい。書状から明らかになる佐藤家の交流範囲は、仙台城下から村田・遠刈田を中心とする藩領南西部一帯にわたっており、山形など藩領外にも広がっていた。仙台藩の領内市場は決して一枚岩ではなく、南部や奥地域は独自の商品流通構造をもつて別個の地域経済圏を形成していたとされるが、佐藤家の交流関係もこの傾向に凡そ合致しているといえようか。この交流関係は、金融や商取引、つまりは家及び宿屋経営に関わる業務を通じて構築されており、姻戚関係をもつ密接なものに発展しているケースもみられるのである。

さて、金融という面に関して少し敷衍すれば、佐藤

家文書には、同家が金銭を融通した相手との間で作成された借用証文が多数残されている。⁽⁵³⁾相手は村内外は勿論、仙台藩領外にも及び、内容も上納金行当りや店物仕入金行当り、飢饉時の窮民救済的な意味をもつものなど様々である。佐藤家宛の借用証文が同家に残されていることは、貸金が回収されなかったことを意味しているようが、多数の証文の残存は、同家が他家と幅広い金融関係を構築していたことを明示するものであり、金銭的融通を一種の業としていた可能性を示唆するものではないだろうか。

この点を補足する史料として、佐藤家文書には同家が融通した相手と金額をまとめた帳簿が残されている。その内の一つ、『貸方手扣』⁽⁵⁴⁾に登場する貸付相手と地名、金額を表示したのが、【表6】である。これを見ると、文化・文政期を中心に、連綿と貸金が行われていることがわかる。相手としては、【表5】で確認された、遠刈田や村田といった温泉営業や商取引上の関係をもつ地域の者がみられるほか、地名が確認できない者には前川村内の住民が含まれているとみられる。佐藤重松

治は「平澤御家中」と肩書きが付されており、土分の
への貸付は「川崎様御用金之内」と注記され、太田長

この点は興味のひかれるところである。元手資金の蓄積の手立てを論じる用意はないが、佐藤家は湯銭・宿

表6 『貸方手扣』（嘉永6年）にみえる地名・人名・金額

年代	地名	人名	金額
文化丑年～文政8年		大宮忠蔵	金10切半と銀15匁5分
文化14年～文政12年	宮村遠刈田	遠藤勘五郎	金18切
寅6月	宮村遠刈田	小室庄七	金4切
文政5年～未8月	宮村遠刈田	大沼勘十郎	金24切
文政12年		大沼亀吉	金5切
文化14年～文政4年		小室久蔵	金28切
文化13年～文政元		大沼久兵衛	金11切
天保7年～文政6年		大宮軍治	金14切と7分5厘
文政6年	宮村遠刈田	我妻銀蔵	金3切
寛政13年		大宮半十郎・半蔵	金33切
天保6年		大宮寅吉	金4切
天保6年		藤六方みちよ	金2切
天保6年		大沼千代吉	金2切半
天保6年～天保7年	新地	佐藤七右衛門	金8切
文政3年		佐藤重松	金8切
天保6年～天保7年		佐藤市太郎	金10切
文政12年		永野清兵衛・清七	金12切
天保6年～天保7年	円田村	銀治	金15切
寛政9年～寛政12年	小泉村	銀右衛門	金50切
寛政9年	沼辺村	運右衛門	金4切
文政5年～9年	小村崎村	庄七	金53切半
享和元年	村田本町	長蔵	金50切
享和4年	村田本町	石田屋安左衛門	金15両
文政13年	白石本町	石田屋近蔵	金9切
文政10年	白石本町	関屋清之助	金50切
文政13年	円田村	林吉	金2切
文政13年		太田長治（平沢家中）	金3切
文政3年	海老穴村	十三郎・幸十郎・卯左衛門	金20切
嘉永2年		宇佐美勝能（平沢家中）	金25切
	宮町	丹野喜衛	手形40両
	八幡町	善蔵	金2切と銭748文
安政3年		薫三郎	金47切

※他史料から地名が判明する場合、適宜補っている。また、各個人の記載で「両」と「切」が併用されている場合は、「切」に換算して表記している（1切＝1歩で計算）。

者に対しても貸付が行われていたことがわかる。金額は、金二切から金一五両、手形四〇両まで幅広い。また、他の帳面からは、嘉永期から明治期にかけても同様の貸付が行われていたこと、仙台城下柳町の庄治、同立町多々田市兵衛、同荒町庄吉、同着町川村屋源吉ら、仙台城下の者も多数相手先に含まれていたことが判明する。入湯に訪れた際に滞在費が不足し、融通を受けたケースもみられるが、貸金は業務的に常態化しており、その範囲は、【表5】で確認できる範囲とほぼ同様の広がりをもって展開していたと考えられる。

青根に限らず、江戸時代の温泉は、農業に不向きな山肌に面した場所に立地していることが多い。そのような場所で年貢・諸役を負担しなければならぬ宿屋の家の経営基盤は、果たして入湯客からの収入のみであったのか。

表 7 仙台藩領湯守の集団行動（青根湯守を含む場合に限定）

年代	内容	行動に加わった温泉・湯守	出典
安政 7 (1860) 年	南方御郡湯守及び黒川郡 台ヶ森湯守らが湯銭・木 賃の値上げを請願。	秋保・青根・台ヶ森ほか、南方御郡湯守（具 体的な温泉・湯守の名は不明）	『永々日記帳』 (本書 11 号文書)
元治元 (1864) 年	南方御郡 7ヶ所の湯守が 向こう 30 年間年 20 両ず つを備金として藩に上納 することを提案。	定義：要之助、遠刈田：勘十郎・源兵衛、小原： 太郎兵衛、作並：奥山伊三郎・喜蔵、青根：仁 右衛門、鎌先：市兵衛、秋保：寿右衛門	『出湯方御用留帳』 (『宮城県史写本資 料 28』宮城県公 文書館蔵)
(慶応年間)	領内の湯守が湯銭・木賃 の値上げを請願。	星湯：庄右衛門・孫左衛門、川原新湯：平蔵・ さと、川原湯：覚兵衛、滝ノ湯：源蔵・善十郎・ 勘左衛門、鵜峨新湯：松本仁右衛門・菅原覚次 郎・文右衛門・忠蔵、赤湯：平六・万五郎・勘 七、鷺湯：新助、真坂目ノ湯：惣四郎、川渡： 吉郎右衛門、鬼首荒湯：平右衛門、寒風沢湯： 戸左衛門、轟湯：久三郎・源兵衛、花山：養之助、 宮沢：為右衛門、湯倉：専蔵、定義：養之助、 作並新湯：奥山伊三郎、須川湯：彦太夫、作並： 喜蔵、秋保：寿右衛門、青根：仁右衛門、遠刈田： 大沼勘十郎・治兵衛、小原：太郎兵衛、鎌崎： 市兵衛	『秋保町史資料編』 佐藤勘三郎家文書 199 号

泊料などの温泉営
業に関わる収入の
ほか、金融を通し
た収入によって経
営を維持、発展さ
せていたのではな
いかと推測できる。
当時の旅行産業は
景気や季節変動の
影響を受けやすく、
特に山間部温泉の
場合は、冬場に入
湯客数が落ち込む
のが通例であり、
宿屋は不安定な経
営を強いられるこ
とになる。こうし
た条件を考慮すれ
ば、他の温泉宿の

経営実態についても、同様の観点から分析を試みる必
要があるだろう。

2 湯守同士の交流

佐藤家の広範な交流は、地縁や血縁、または温泉宿
を含めた家の経営上の必要性のみから形成されていた
訳ではない。江戸時代後期には、いわば職能性に基づ
いて湯守同士が結集し、藩に対して働きかけを行うケー
スがみられた。これについては、筆者が以前に論じた
ところではあるが、⁽⁵⁸⁾佐藤家に関係する行動に着目し、
改めて述べておきたい。

仙台藩領内の温泉湯守が合同で藩に対して請願その
他の行動をとる例は、天保期頃から確認できる。活発
な動きをみせたのは、川渡や鳴子といった著名な温泉
が集中する玉造郡（現宮城県大崎市）の各温泉の湯守で、
連名で湯銭の値上げ許可を請願している。青根湯守の
佐藤家が同様の動きをみせはじめるのは、やや年代が
下った幕末期になるが、現在確認できる三例を【表 7】
に示している。

安政七（一八五九）年には、「南方御郡」、すなわち藩領南部の湯守が中心となり、それまで合わせて六〇文であった湯銭木賃代を七〇文に値上げさせてほしいと請願し、認められている。

元治元（一八六四）年にも、南方御郡の七ヶ所の温泉湯守が、藩に三〇年間年に二〇両ずつ上納し、その半額を利息付きで定期的に年番の湯守に下げ渡すことを提案している。この目的は、家屋等温泉の維持管理費の捻出と臨時的な出費への備えにあったようであり、佐藤家は二〇両のうちの二両三朱を負担していることが確認できる⁽⁵⁹⁾。

慶応年間には、南北の地域的な垣根を越え、領内の主要な温泉湯守が揆を一にして、八〇文から一六〇文への湯銭木賃代の値上げ許可を請願している。【表2】で、慶応四（一八六八）年に湯銭木賃計一七〇文を青根で徴収していることが明らかことから、この要求も認められたものとみられる。

以上は僅かな例であるが、玉造郡の例なども含めると、合同する湯守の数や地域的範囲が時代が下るにつ

れて拡大していく傾向を読み取ることができよう。佐藤家は当初、南方御郡湯守の行動に加わっているが、これまでの分析から同家との結びつきの強さを指摘できるのは、秋保の佐藤勘三郎家と遠刈田の大沼勘十郎家であり、領内北部は勿論、南部の各温泉湯守との日常的な交流関係を佐藤家が有していたとは考えにくい。安政期のケースでは、秋保湯守が「筆頭」とされており、より広域的に各湯守との関係を築いていた秋保湯守が調整役となつて行動が組織化されたと考えられる。この請願の背景として史料中にみえるのは、物価の高騰と入湯客の減少という社会経済情勢の変化であるが、前年の安政六（一八五九）年には、同様の事情と要望を掲げて玉造郡の湯守が合同で請願に及んでおり、南方御郡の行動は、こうした北方の行動に触発されたものであったとも考えられる。なお、慶応年間における領内湯守合同での請願の理由もこれらと同様である。

領内の南北で組織化され、さらに領内一統にまで発展した湯守の集団化は、天保期以降の物価高騰と入湯客の減少という社会経済情勢の変化に直面し、自らの

家の経営、ひいては温泉の存立に対する危機意識と共存共栄の志向性を各湯守が共有した結果として促進された現象であった。当該期は、佐藤家が献金を条件に、藩に永久湯守の承認を求めていく時代にもあたる。温泉営業の存続と既存の地位確保を希求する意識が、湯守という職能に基づく集団形成の原動力となっていたということであろう。

おわりに

本稿の分析結果をまとめておきたい。

まずは青根温泉の温泉運営について。天文年間に開湯したとされる青根温泉の湯守は、江戸時代の初頭には仙台藩領内の温泉を統括する立場にあったとみられる。青根温泉と仙台藩主伊達家とのゆかりは深く、七代重村をはじめとする歴代の藩主が入湯に訪れている。

温泉では、当初佐藤仁右衛門家をはじめとする四家が湯守の役割を担い、青根集落の人頭もこの四家のみであったと考えられる。宿屋など温泉での商売に関しては掟が定められており、客引きの禁止などが条文化

されていた。藩に上納する御役代は村請とされていたが、状況に応じて湯守から上納されることもあった。

天保飢饉時には入湯客が減少し、温泉は相当な被害を蒙ったとみられる。この天保期頃を境に、青根温泉は、「湯守四人・前川村御役代請負」から「湯守仁右衛門・同人御役代請負」へと運営体制を移行したと考えられる。仁右衛門は幕末期に永代湯守となっている。

次に佐藤家の交流関係について。香奠帳から伺える佐藤家の親近な交流は、前川村内から柴田郡内の周辺町村という地縁性に基づくものにある程度限定されていたが、街道筋の町場との交流が目立つ点が特徴であった。このことは、同家の親近な人脈が宿屋経営における取引関係上の人脈と重複していたことを示唆しているともいえる。書状の分析からは、仙台城下から村田・遠刈田を中心とする藩領南西部一帯、さらには山形に至る広範な同家の交流範囲と、有力商人との取引関係の形跡が明らかになった。かかる交流関係や人脈は、金融や温泉での必需品の取引、つまりは家及び宿屋経営に関わる業務を通じて構築されており、姻戚関係を

もつ密接なものに発展しているケースもみられた。

佐藤家文書には多数の借用証文が残されている。また、貸金帳簿からは、江戸時代後期に連綿と貸金が行われ、業務的に常態化していたことがわかる。こうしたことから、佐藤家は湯銭・宿泊料などの温泉営業に関わる収入のほか、金融を介した収益によって経営を維持、発展させていたのではないかと推測できる。

江戸時代後期の天保年間頃から、仙台藩領内の温泉湯守が合同で、藩に請願その他の行動をとる例がみられるようになる。佐藤家も南方御郡の湯守として幕末期には集団の一員となり、湯銭木賃の値上げ要求を行っていた。湯守の集団化は、物価高騰と入湯客の減少という社会経済情勢の変化に直面し、自らの家の経営、ひいては温泉の存立に対する危機意識と共存共栄の志向性を各湯守が共有した結果として促進された現象であった。佐藤家の場合、遠刈田や秋保とは日常的な交流を築いていたようだが、他の湯守との繋がりは、地縁・血縁や日常的な金融・商取引を背景に形成されたのではなく、既存の地位確保を希求する意識の醸成を

背景に、湯守という職能原理に基づいて構築されたと考えることができる。

以上が本稿のまとめである。一読して明らか通り、内容は基礎的な分析に終始しており、綿密な分析と考察を行うには至っていない。ただ、現時点の検証からは、佐藤家の経営が、地縁・血縁関係、金融・商取引関係、職能関係、といった（時に重複する）多層的な交流関係に支えられて成り立っていることが指摘できる。こうした関係性は、温泉宿については勿論のこと、一般の旅籠屋や木賃宿を含めても、これまで正面から言及されてこなかった。その意味で、本稿には一定の価値を見出すことができ、宿屋経営における他家との交流という視点の有意性を主張することもできる。また、本稿の分析結果を一つの指標とし、他の宿屋についてより具体的かつ精細な分析を行い、宿屋経営の特徴を浮かび上がらせることは、江戸時代の旅の歴史的特質の一端を明らかにすることに繋がっていくであろう。

最後に改めて付言すると、本稿において、立論の際に参照した史料の多くは佐藤仁右衛門家文書である。

史料分析により、これまで明らかにし得なかった温泉営業や宿屋経営の側面が浮き彫りにできたことは、佐藤家文書が高い史料価値をもつことの証左であるといえる。本稿の分析は、この意味においても有意義であるといえよう。

- (1) 高橋陽一「近世の温泉運営と湯守・村―陸奥国名取郡秋保温泉を事例に―」(『歴史』一〇四、二〇〇五年)、同「近世の温泉史料にみる争論―史料紹介―陸奥国玉造郡大口村・藤島家文書(上)―」(『東北文化研究室紀要』四六、二〇〇五年)。
- (2) 高橋陽一「近世の温泉と領主政策―仙台藩領の温泉を事例に―」(『日本歴史』七〇八、二〇〇七年)。
- (3) 山本英二「自然環境と産業 近世の温泉」(井上勲編『日本の時代史二九 日本史の環境』吉川弘文館、二〇〇四年)。
- (4) 宮本常一『日本の宿』(八坂書房、二〇〇六年)、深井甚三『江戸の宿 三都・街道宿泊事情』(平凡社新書、二〇〇〇年)。
- (5) 岡千仞撰『青根温泉小誌』(二八九一年、本書二号文書)。
- (6) 永澤小兵衛『青根温泉志 全』(一八九一年)。
- (7) 香川修徳『一本堂葉撰続編』(一七三八年、東北大学附属図書館狩野文庫蔵)。
- (8) 佐久間洞巖編『奥羽観蹟聞老志』卷之四(一七一九年、鈴木省三編『仙台叢書奥羽観蹟聞老志上』仙台叢書刊行会、一九二八年)。
- (9) 佐藤信要編『封内名蹟志』卷第二(一七四一年、鈴木省三編『仙

- 台叢書第八卷』仙台叢書刊行会、一九二五年)。
- (10) 田辺希文編『封内風土記』卷之六(一七七二年、『復刻版仙台叢書 封内風土記第一卷』宝文堂、一九七五年)。
- (11) 山形敞一「仙台藩温泉志(三)」(『仙台郷土研究』一三、一一、一九四三年)、川崎町史編纂委員会編『川崎町史史料編』(川崎町、一九七二年)。
- (12) 前掲註6『青根温泉志 全』。
- (13) 山形敞一「仙台藩温泉志(二)」(『仙台郷土研究』一三、一〇、一九四三年)。
- (14) 「青根温泉」(『念珠集』鉄塔書院、一九三〇年)と題した手記が残されている。
- (15) 「温泉周遊 東の巻」(金星堂、一九二二年)の中で青根温泉について触れている。
- (16) 佐藤仁右衛門『青根詞叢』(一九三一年)に和歌が紹介されている。
- (17) 前掲註10『封内風土記』。
- (18) 『諸御用目録』(一八六四年、本書一〇号文書)。
- (19) 『諸用留帳』(二七一八〜一七八〇年、本書八号文書)。
- (20) 『諸用留』(二七五二〜一八四一年、本書九号文書)。
- (21) 「佐藤仁右衛門永湯守願につき達書」(年未詳、本書三二号文書)。
- (22) 「天保式年五月出湯方請負人人指ヲ以被仰付候御下知書卷写」(一八三一年、本書二二号文書)。
- (23) 『代教有之御百姓書出』(二七七八年、宮城県史編纂委員会編『宮城県史二 資料編一』宮城県史刊行会、一九五四年)。
- (24) 「(仙台藩奉行人連署状)」(二六二二年、本書一三三号文書)。
- (25) 「柴田郡前川村之内青根温泉請負并宿屋渡世振之義左ニ奉申上候

- 事」(年未詳、本書三二号文書)。
- (26) 『温泉場運営定約状』(一七四〇年、本書一五号文書)。
- (27) 前掲註20『(諸用留)』。
- (28) 前掲註22『天保式年五月出湯方請負人人指ヲ以被仰付候御下知
沓卷写』。
- (29) 『高遜り替シ証文之事』(一八三六年、本書二三号文書)。
- (30) 『青根温泉御運上請負人ニ被成下候御下知沓卷写』(一八三九年、
本書二六号文書)。
- (31) 笹原昌之助『仙台領鉈物調』(宮城県史編纂委員会編『宮城県史
三二 資料編九』宮城県史刊行会、一九七〇年)。収載されてい
るのは、明治二七(一八九四)年の伊達家家令松倉恂による写
本である。
- (32) ただし、寛政九(一七九七)年に、藩の金山方役人の帳面から
写し取られた『御分領中所々温泉ヶ所限り御役代并湯守名前帳』
(本書二〇号文書)には、青根湯守として仁右衛門のみが挙げら
れており、仁右衛門家が単独で湯守を務めるようになった年代
は、さらに遡る可能性がある。
- (33) 仙台藩の温泉管理体制の変容については、前掲註2「近世の温
泉と領主政策」を参照。
- (34) 高橋陽一「近世後期の川渡温泉―(史料紹介) 陸奥国玉造郡大
口村・藤島家文書(下)―」『東北文化研究室紀要』四七、
二〇〇六年)。
- (35) 青根温泉の御役代は佐藤家文書から明らかにした。
- (36) 前掲註8『奥羽観蹟聞老志』巻之四。
- (37) 前掲註10『封内風土記』巻之六。
- (38) 前掲註26『温泉場運営定約状』。
- (39) 前掲註6『青根温泉志 全』では、新湯の発見は享保五(一七二〇)
年で、ほどなく廃湯になったとされる。
- (40) 前掲註20『(諸用留)』。
- (41) 『永々日記帳』(一八四五―一八七九年、本書二一号文書)。
- (42) 高橋陽一「近世後期仙台藩領の温泉について―湯守の位置と集
団形成―」『文化』七〇・一・二、二〇〇六年)。
- (43) 前掲註6『青根温泉志 全』。
- (44) 前掲註41『永々日記帳』。
- (45) 『掟之事』(年未詳、本書一二号文書)。
- (46) 前掲註2「近世の温泉と領主政策」。
- (47) 『親様死去に付御悔覚帳』(一七八九年、本書六八号文書)。
- (48) 『覚』(本書四五号文書)など。
- (49) 『味噌醬油仲間留帳』(一八一六―一八六四年、仙台市史編さん
委員会編『仙台市史資料編三近世二城下町』(仙台市、一九九七
年)九号文書)。
- (50) 『御先祖様ヨリ御遜り之品左ニ印置覚帳』(本書七八号文書)。
- (51) 『柴田郡前川村青根佐藤仁右衛門養子家督奉願候御事』(一八〇四
年、本書七〇号文書)。
- (52) 『勘定調書』(一八四三―一八五〇年、本書四二号文書)。
- (53) 前掲註20『(諸用留)』。
- (54) 朴慶洙「仙台藩の流通政策と地域経済圏」(渡辺信夫編『近世日
本の生活文化と地域社会』河出書房、一九九五年)。
- (55) 一部は、本書の「七 証文」に収載している。
- (56) 『貸方手扣』(一七九七―一八五六年、本書四〇号文書)。

- (57) 『金華山道中日記』（金銭貸方扣帳）（一八四九～一八七二年、本書四三号文書）。
- (58) 前掲註42「近世後期仙台藩領の温泉について」。
- (59) 前掲註41『永々日記帳』。

◇史料編

凡例

①史料表題の「」は、編者（高橋）が便宜的に付した史料番号であり、現地調査時に付けられた史料番号とは異なる。

②史料表題は、原則として原典の記載のままとした。原典に表題が付されていない場合には、編者が（）付きで表題を付した。（）内には史料の成立年代を記しており、簿冊等の追記形式の史料で成立年代が不明確な場合は、記載記録の年代範囲を記している。また、証文類には史料作成者の居住地（前川村以外）を付記した。

③帳面等の表紙に付された表題や、紙面の挿入箇所は「」つきで記した。

④収載史料の改行箇所は、可能な限りで原典に従った。抬頭・平出・欠字はすべて原典のままとした。

⑤日記や留書において、記載内容や年代が変わる場合

には、空行を設けた。

⑥翻刻文収載に際しては、読解に便利のように、適宜読点（、）を補った。

⑦文意の通じない箇所や文字の異同がある箇所については、その右側に（ママ）と表記し、疑問のある箇所には（ゝカ）と表記した。その他、注記事項は本文中の（）内に記した。

⑧地名や人名といった固有名詞を除き、異体字は原則として常用漢字に改めた。また、変体仮名や合字についても、「者↓は」「江↓え」のように、現行の平仮名に改めた。

⑨解読不能箇所は、一文字につき■で表した。また、破損や薄字により解読不能な箇所は（）で表した。

⑩棒引抹消箇所は「文字」のように表した。抹消文字が判読できない場合は、「■■■■」のように表し、それが長文にわたる場合は、「（棒引抹消部分あり、省略）」などと記した。

一 温泉の歴史

「1」奥州青根山温泉記 全〔享保五（一七二〇）年〕

（外題）

「奥州青根山温泉記 全 金泉堂秘蔵」

青根山薬師堂奉納温泉記

日本に温泉の出たるはしめをとふに、神代の昔大己貴命始て一湯に浴し給ひて万病を治し給ひしより人民に是ををしへ病患をすくひ給ふ、故に湯山主命とも申奉るとかや、それよりあまねく今にいたりてもろくの煩に湯あミする事になれり、其後はるか人代にをしうつりて摂津国有馬山に温泉出来て本朝三十五代舒明天皇三年の秋はしめて御幸なりてより此かた孝徳天皇三年行幸ましゝて温泉灵湯奇験の神窟となれり、また聖武天皇御宇行基菩薩此山に來り石像の薬師如来を温泉のうちに作りこめしと也、そのかみ薬師仏示現し給ひ行基にまミえ契約有しかや、生前多病の苦をのそき身後煩惱の垢をすゝかむ幽冥衆生悉蒙開曉随意所趣作諸事業との御ちかひ誠にありかたく覺ゆ、国々の温

泉をかそふるに大和に戸津河の出湯あり但馬に城崎信濃に犬飼御湯七久里草津諏訪湯上野伊賀保下野に那須相模塔沢塔ヶ嶋底倉湯元芦湯宮下城賀出羽温海田川伊豆に走湯熱海伊東小名連臺寺伊豫道後長門に俵山肥後杖立肥前塚崎同嶋原陸奥名取御湯佐波古御湯同釜崎鳴児美作に勝間田諸所温泉の数上ていふにたらず、わきて諸国にまさりたる名湯其名高く今にいひもてはやては摂州有馬の温泉なり、其余は或あまりにことふかく名のミはかりいひ伝へあるは山川万海を隔て人の行来やすからざる国はをのつからすたれゆくたくひもおほかり、こゝに我領国奥州柴田郡青根山の出湯は大概百三四曆をもふるにやさのミ久しきことゝも聞えすはからすも所のもの此地をひらきしときより出はしめたるよしいひふるゝはかりにてくハしきゆへは知者なくいつとなく諸病にいゆるとくあることをいひ広め他国よりも入もてきたれり、予おとゝしの冬はしめて此所に入湯しこゝろミ侍るにけにと人のいふにたかハす其功甚奇妙のしるしあり、しかあれとも病によりて応ずると応せざる有、やめる人このあちはひを弁考かへす

たゝやまひたにいへは浴する事にのみおもへり、かくしてはかへりてわさはひをもとむなかつちなり、是をふかくなけきおもふ故又は入湯にもあまたの心得あるへきなれハ是等の事を人にしらしめむ為にことし神無月の比二たひこゝに來る事をさいはひにみしかき筆をとりてみつからこゝろミ侍るかたハしをしるし彼湯を守るものにさつけをきぬ、みる人もにひとつもとりて益あることを得は本意ならむかし

一先飲食の後入をよしとす、空腹なるにはあしきあれはとて食事の後則入もまたあしくしハしありて食氣のめくらむときに入へし、卒示に湯のうちに惣身をひたすへからず、先あし計を入れて柄杓様の物にて湯を汲肩よりかけて後しつかに入へし、あまり久しくひたり過すへからず、湯のあつさの程は入人のほと能かよし、ひねもすしけく入もあしゝ、強き病には一日一夜に三四度をかきり弱きやまひには一二度をよしとす、久しく湯に入をれば強き人もあたまよりすき表氣ひらけ汗出て元氣をつみやすのわさはひあり、いかにもかろく入へし

一すへて入湯の日数の中身を慎しむを第一とす、湯より上り板の上に久しくをりて風にあたるへからず、邪氣入やすし、上戸たりとも酒に長すへからず、氣めくり飲食進むとも大食すへからず、あるいは熱性のもの甚寒冷の類ひ食すへからず、色欲をおかす事ならひに灸治する事甚忌、入湯の日数過ても二七日程ハ慎むへし、ときく歩行して氣をめぐらし食物を消して入事第一によしとす、日数おはりても風雨はけしからんに歸るへからず

一此所山ふかくして甚山嵐瘴氣おほし、夏もひやゝかにして蚊稀なり、秋冬ハ里にかはりて冷寒猶つよく雪もまたふかくつもれり、さハありといへとも地高く陽氣にむかふゆへなへての山中にハかはりて湿氣ハうすく入湯の間一編の補藥熱藥を用捨すへし、又渴方も虚弱の人はあしゝ、只氣を調和せしめ山嵐の氣をはらふ輕藥を用ひてよし

一惣而温泉に冷湯熱湯とてふたつのしなあるよし世俗にいひつたふ、医術を学ふ人もまれにハかくいふもあり、然れ共すへて温泉は硫黄の氣をもて涌出るゆ

へに熱性なり所によりて硫黄の氣ふかきと薄きハあり、但本草注に朱砂泉ハ不熱とあり是等をもつて冷湯といひあやまりしにや、或は塩氣ある湯も有、又ハ色濁りて味しふきもあり、所によりてかはる、此山の湯ハ清水のことくにしていさゝか濁る事なし、味もなし、和順にしてさのミ熱湯といふ程にもあらず、すへて此山金山なるゆへ金氣をもて生する間きひしく咎むるやまひなし、しかあれとも応すると不応ハおほし、其内邪熱強きわつらひ虚熱ある人中風の性暑氣にあたりて腹下るには甚あしゝ、かならずつゝしミて浴すへからず、惣而内の虚したる煩ひ心氣のつかれたる様の病ひには応せず、其外もろくの病苦人によりしるしあるもあり、又しるしなしもあまたあり、病惱と人の性によるなれハひとかたにはいひかたし、此湯に入て応せざるわつらひには刈田郡釜崎の湯に浴するときハ必応す、又釜崎の湯にあたりたる人此所に来りて入ときハこゝろよし、わつかの道を隔て如此にかはるをもつて能々やまひと湯の性を考合すへし

一 汲湯とて此地にいたらずして遠境より汲よせてあたゝめ浴する人ありいさゝかも益なき事そかし、涌出るせひをもて肌膚筋骨までもよく通しぬ、遠所え汲よせて入らんによの常の入湯にこそひとしからめ、その上日数をへて後陽氣つき水の性変するのミか再ひあたゝめかへして何の功かあらん、無用の事たるへし

一 此山中にわつか壺二町北にあたりて妙子湯といひならハして地中より涌出る湯あり、もと名号の湯なりいひあやまれり、其ゆへハ世俗に弥陀の名号を唱へて地をふめはかならず湯涌出るとて名号の湯といへるよしいひつたふ、しかれとも左にはあらず名号を唱へすしても地をあらくふめは涌出るなり、余り奇妙をいはむとてかくいへるなるへし、摂州有馬山にも妬湯とて此たくひありといふ、湯もとへ立よりていかめしうはらたちいひのゝしれハ湯花たちて涌あかるをもて名つくるといふ、まことハ是も左にあらずいつくにて水底熱て水たゝへたる地は皆如是人のものいひにも限らず音曲鐘鼓のこゑにひゝきても

ミなおなし山に答る木魂のたくひとしるへし、いさゝか湯の性もとの湯とはかはる入人心得て浴すへし、眼病瘡の類等によしといふ、疝気瘡にハ相応せざる人もありとそ

享保五庚子年

十月季七

隣松軒識之

〔2〕青根温泉小誌〔明治二四（一八九一）年〕

（外題）

「青根温泉理由」

青根温泉小誌

青根以温泉著也尚矣而無地誌足徵者游人病焉辛卯七

月余東省一遊因録其所見聞纂為一篇

青根 青根隸宮城県柴田郡川崎邑前川村北距川崎三里南距遠刈田一里戸口六戸寄留十戸人口百余皆仰食温泉熊野山為郡巨鎮支脈東延者為花房山青根当其東南麓峰巒環擁唯東南半面眺望四達牡鹿宮城名取

亘理四郡海山皆攢寸眸之中如金華松島在直径十数里以内岬湾之向背船隻之隱見瞭如指掌柳々州所謂数郡土壤悉萃襟帶之下尺寸千里無得遁隱者是也地高海面二千尺以其涌温泉伏陽氣無濕熱之虞瘴毒之患雖盛夏熱度不上九十度夜無蚊蟲湯戸飾樓閣修庭園浴室淨潔構造宏壯澡浴游客日夕闐咽県内諸泉無与之比其隆者

温泉 泉凡三源各異其性質浴場五所其二磬石為澡池曰大湯泉源万斛溢為瀑流飛沫噴雪泉色透明不帶些渣滓味亦和順山本金坑少帶金氣無臭氣無澱垢不発氣泡曰新湯泉源相距八町樋至大湯東十步地別開浴場透明讓大湯無臭氣無澱垢不発氣泡微帶鹹味曰妙号湯距大湯二町泉性微鹹稍帶渋瀟時発氣泡泉入澡池始見濁色樋中見綠色澱垢其初発撿此湯或唱南無妙号泉愈涌出慶為仏恩呼為妙号湯建弥陀堂安仏像明治維新憎玄誕徹之有馬有妬湯大声罵詈則泉涌熱海有平左湯大声呼平左則泉涌蓋泉触声響涌出与巖竅応呼号之響同一理

治病 大湯温度摂氏四十度泉質含塩氣硫酸曹達格魯兒

迦俚牟用之爨炊無異井泉治上衝頭痛疝氣肺勞脚氣及婦人帶下病新湯溫度四十九度泉質含塩石灰硫酸曹達格魯迦俚牟治金創打撲痞塞諸病妙号湯溫度五十三度泉質含鉄気塩気石灰硫酸曹達格魯兎麻倔熱斯垂治眼病梅毒性諸病凡温泉有適其病与否浴者偶觀其奏奇効謂斯泉必効斯病則失矣間觀浴青根而不效者浴鎌先而効浴鎌先而不效者浴青根而効此皆泉有適其病与否者人有強弱有老壯々且強者日浴三四次為度老且弱者二次為度切忌過食暴飲及過房事人或有駄致泉水澡浴者凡温泉以天然温氣適肌膚筋骨始奏其效若遠路運致則陽氣漸滅無異常水也

沿革 温泉小誌記佐藤丹野四子伐青樹根斃檢温泉頗属伝会藥師堂温泉記享保五年所撰有青根開湯距今百三十四十年之語然則其斃檢温泉享禄天文年間之事今考佐藤氏之家記日前川村有八澤氏邸址八澤豐後世領其地後事川崎邑主砂金佐渡為家宰称佐藤掃部掃部二子彦總始開青根移住元禄十六年砂金氏邑除掃部来青根依彦總子孫称仁右衛門世業湯戸天正年中西館夫人臨浴慶長十七年藩宰山岡重長鈴木重信津

田景憲大條實賴連押文書署湯別当日歲調湯錢四十貫然則天正以前青根已為士庶游浴之地享保三年獅山公臨浴与侍臣詠歌僧香國撰八勝賦詩供覽五年再臨命文臣撰温泉記納藥師堂此後藩公及夫人後先臨浴構公殿除諸租与松島觀瀾亭鰲麓園囿並称曰三殿佐藤氏特免称姓帶刀掌殿事称殿守於是大湯開二浴場付其一丹野新湯妙号二湯付族人主之

不忘閣 樂山公臨浴為慶応紀元藥師堂所扁廻春窟字此時所賜維新藩廢行殿帰佐藤氏之有歷世藩侯之所游予一旦廃棄佐藤氏深傷侯駕不再勝迹永已明治廿年就遺趾剗削巖壁建築宏廈邃宇隆棟四廻欄干閣之上下分為四室上室安樂山公真影棟角雕竹雀九曜徽章巍然奐然復藩時之旧乃取于山名曰不忘閣蓋寓不忘其旧之意也

雜 温泉之起廢治痼有勝医藥者此不特温泉奏奇効其地風土氣候暢舒神思驅除病鬱之功居其一也蓋温泉之所在槩山水清麗之地游者一朝離城市游山林雲林出沒峰巒掩映無一非洗滌塵土悅懌耳目之具起臥有澡浴之爽游步有泉石之適怡然如有所得憮然如有所喪

此亦仙境而已此僊丹而已其杳然不復知二豎在其身
不亦宜乎余游青根有所体試于此并次以終此篇

明治二十有四年星次辛卯七月

上浣於不忘閣雨窓

仙臺 鹿門道人千仞撰

龜庵逸史正人書

(印)(印)

〔3〕(天文稻荷神社紀元燈碑銘)(明治三五―一九〇二

年)

夫惟ミルニ当温泉之開湯去今三百五十六年前天文十五年丙午四月出湯ヲ堯見シ我祖先矢澤豊後守ト称ス近郷ヲ領ス、后チ砂金佐渡守ニ仕ヒ姓ヲ佐藤ト更メ執権タルコト亦久シ、而シテ時佐藤彦惣此地ニ来リ湯孔ヲ穿チ丘ヲ鑿リ澤ヲ埋メ起工百精ヲ凝ラス、居住茅茨ヲ創立シ衆庶ノ沐浴ニ便ナラシメ漸クニシテ活路ヲ開キ經營ナスコト數百年、斯ク経歴送光殊収未異荏苒以テ諸系ヲ連綿ス、之レ一大天幸ナリ、故ニ開祖彦惣思惟ラ

ク四囲吉方ヲ辛位之高丘ニ選シ胤裔富丘之安キヲ祈リ宗祠ヲ勸請シ神号天文稻荷大明神ト宗祀セリ、家運長久百難避滅神明加護アラシコトヲ詛誓セラレ毎且敬拝之爾予聊カ其遺因ヲ報恩ス、茲ニ録紀元獻燈以テ祀之

開祖十七世嗣裔佐藤仁右衛門信康敬白

明治三十五年壬寅七月

右ハ天文稻荷神社ヘ紀元燈奉獻ノ旨意也

二 伊達家との交流

〔4〕(伊達綱村書状)

(前欠か)

貴様ニ頼入候、以上

廿日 (花押)

先刻之雲雀之義、

上候口上相違候、

最前大立目弥覚方より

雲雀之儀申来候節

申越候ニ、十八日ニ申遣

十九日ニ参候様ニ可■有之ヲ

失念仕、十八日不申遣候故

昨日申遣候、今日御精進

日ニ御座候故明日為合来

廿二日ニ外不参候、此義

御序御座候ハ、宜申上

くれ候やう事ニ候、弥覚も

申合此上ニ而も直かね

各別之事候間、宜申上候、

以上

佐藤右衛門殿

〔5〕（伊達吉村和歌）

青根山のもみちを見

まほしく千国和尚の

湯あみにとて行れ

けるにいひつかハしけれハ

紙にうつして送られける

それにかきつけつかハしぬ

うつしとる色にけたれて紅葉（は）の

なつはの木々ハそれとしもなし

えならすよふかき（ハ）の色染て

うつすもあかぬ木々の紅葉ハ

吉村

〔6〕（伊達吉村俳句）

吉村

山里の垣ねやいく重

雪の庭

御徒然の御なくさみに

申進之候 以上

〔7〕（書状）

付札出来候て元日より

七日迄候ハ今晚爰元へ

可越候、八日以後をハ明日

見可申候、尤付札四ツ過ニも

出来可申候ハ、明日見可

申候、以上

十日

本郷庄二郎

三 日記・用留

〔8〕諸用留牒〔享保三（一七一八）〜安永九（一七八〇）

年〕

（表紙）

「享保三歳 佐藤仁右衛門

諸用留牒

戊正月吉日

山神様御身体被相納ニ付

川崎安養寺ニ而御出被成置候

一 御遷宮為御名代と横沢半右衛門様

御代官青木庄吉様御上廻り

目黒三助様右御三人御出被成候、

右山神様御迎ニハ肝入五郎兵衛

子共三四郎、仁右衛門、喜右衛門右三人

仙臺へ罷登り 御城より

御身体受取直々川崎迄御

供仕、安養寺ニ御一宿青根湯元迄

御供仕同二日御遷宮ニ御座候

山神様御遷宮ニ付入料覚

一 糯白米 四斗三升五合

一 白木綿 五反

一 水色 壹反

一 らうそく 廿丁

一 こさ 拾枚

一 こも 拾枚

一 子手縄 六百尋

一 から竹 貳本

一 御菓子 色々

一 杉はら紙 壱状

一 桶 壱つ

一 玄米 五升

御人足貳百三拾人被下置候事

青根尤前川より貳百人余出

一 享保六年四月

從 大守様為御意之青根

近所へ杉御植立被成置候、木数

貳千本御座候、其節の御役人

様ニハ大石小右衛門様と被申御役人御

下り被成候

一 享保十五年肝入五郎兵衛殿御

村中へ願相出し青根湯元の

出湯御役代 御上え奉願候而

戌ノ年よりとらの年迄五ヶ年

五郎兵衛殿手前ニ而自由被致候

段、御人足何人ニ而も諸式入料

五郎兵衛殿方より相出申候、右御

役代ハ壱分判五拾切さし上

申御儀も御座候

一 木地挽喜兵衛先祖先年

青根湯元へ取移し申候義を

御上より御尋被遊候処、右喜兵衛

白石小十郎様御家中ニ而何様之

始末ニ而取移申候哉も相心得不申

段々御吟味ニ罷成、享保十八年

十一月御竿入ニ罷成から地ニ被仰付候、

依之先祖始末不都合之致方之

由ニ而右喜兵衛白石より三日之延慮被

仰付事

一 七兵衛事、先祖より代々今宿村

御百姓ニ候処、前川村へ入作仕前川
村高所持仕人数帳今宿村え
相■青根湯元ニ住居仕候段

享保十八年夏中より

御公儀様より御吟味罷成、尤

色々願申上享保十九年三月

より前川村御百姓ニ相立申候、七兵衛

義先祖より御上へも不申上青根ニ

住居仕候段不調法之致方ニ

被仰付三月六日より十三日迄戸

結被仰付候、今宿村の仮り肝入

源兵衛戸ゆい十日前川村之肝入

甚右衛門十五日の戸ゆい被仰付相済申候

一

青根湯元之義享保十九年

より薪山沓ヶ年ニ御運上拾四貫

四百文宛被召上右薪山沓ヶ年切ニ

被相明被下置候義、享保十九年

三月八日佐藤庄左衛門様、油井

市兵衛様、堀口四郎兵衛様右御三人
御出新御林之金山沢中峯

被明下候、先年ハ願指上段々

御林之内御運上なしに被明

下候処、御運上拾四貫四百文

被仰付指上申候

一

木地挽喜兵衛屋敷え御竿

被相入候義ハ享保十九年五月三日ニ

被相入候、御代官梅津新右衛門様、

八郎様、孫市郎様右三人御出被成候

持高御蔵入名号屋敷ト云

一

八文

喜兵衛

一

柴田郡前川村青根湯守組合

村肝入支配ニ御座候、右四人之内仁右衛門、

喜右衛門、七兵衛家内之者共三人内々別家

ニ仕置申候、外ニ抱地も木地挽壱人

御座候計近所ニ人居も無御座候、
右四人方ニ湯治人余り申候節ハ家内
之者共ニもまれニ宿仕候、木地挽
方ニ而ハ一円宿不仕候、右出湯御役
錢壹ヶ年五拾切宛ニ而御村定
御受ニ而上納仕候、湯錢取立并ニ
湯元始末ニ御村中肝入組頭吟
味仕人柄成者壹人相附置申候、
右始末之次第ハ誰所え何方之
者何人余りと帳面ニ相記申候、
尤宿仕候者方ニ而も右之通
扣置申候、まれニも壹人者参候節
知人もなくうたかわ敷風俗の者ハ
一円宿不仕候様ニ
御上様より被仰付暮ニも相掛り
候ハ、右始末相付一夜留翌日
相立申事段々先年より申来候
ニ付書上仕候様享保廿年十一月廿八日
指上申候事御座候、為覚の如斯

仁右衛門
喜右衛門
享保廿年十一月廿八日

権十郎
七兵衛
組頭

甚内
肝入

四郎兵衛

大肝入

佐山八郎兵衛殿

一
元文四年五月より取立候而上ノ大
湯普請御村より縄御人足手伝右
普請入料貳拾五貫文相掛り
申候、元文五年春より出湯御
役代申ノ年より亥ノ年迄四ヶ年
御村方より青根四人の者共え相渡
五拾貫文之御役代外ニ貳拾貫文

の御村方へ引配代含テ七拾貫文

二而右四ヶ年申受候、大瀧妙子湯

の普請仕候事肝入より村方へ吟味

仕候処、御村方吟味相片付不申

候ニ付肝入老人の心入ニ而目錄

印形を以青根四人方へ相渡申候事

寛保元年の夏大瀧普請

一字立方青根四人ニ而仕候事

延享元年より又以御村方より

被願湯錢御役代其外普

請方四年湯元四人ニ而重立

仕候事

延享五年卯の六月取立候而

名号湯の坪普請いたし

候ニ付、仙臺肴町升屋喜兵衛

ニ而老分判金拾五切手伝被致

候事

一 宝暦四年三月上ノ大湯

又以普請仕候事

一 明和三年八月大湯

屋形様御入湯に付御普請ニ

被成下候事

一 安永九年九月大湯

屋形様御入湯被遊候に付

御普請被成下候事

享保五庚子年十月十五日

屋形様御出駕被遊候内御

山追品々被遊候事

一 十月十八日刈田郡會の澤

御勝負なし

一 同十九日刈田郡あますか金山

同断

一 同廿二日柴田郡沼の平

同断

一 同廿六日刈田郡白はき

一 同廿八日刈田郡相澤

一 同廿九日柴田郡上へげ石

右日数之内獅子式つ御勝負

あり

御小性

一 獅子壱つ 岩山縫之助様

肥膳御内

一 同 太右衛門

右御せこハ御供御侍様方御村方より

御勢子ハ相出不申候事

一 獅山様先年御入湯被遊候

節薬師堂え御献納物被遊候事

一 温泉記 一軸

一 御和歌 一軸

一 大年寺香國和歌 一軸

右何時の頃ニや盗れ候ニ付

御上え申上候所、寛延三年三月八日

の朝申上候処、御代官目黒四郎兵衛様

大肝入佐藤太右衛門殿被参候、同廿一日青根

家内之者不残御詮議被成置候事

申上候ハ何者之諸行ニ御座候哉

何時頃ニや一円心付不申、勿論

とうじ人も無之候段申上候、太兵衛

みたりニ付太兵衛事同三月廿七日

御ろうしや被仰付、四月廿七日ニ御

免被成下本所へ被相帰候事

一 同四月九日青根四人其外家内之

者共不残御評定所男名代

被召登御尋被成置候事、則
十日本所へ被相帰候事

一 獅山様御出駕寛延三年へ

三拾二年ニ罷成候事、御奉納物

三品共ニ盗人相出被召取段々

御詮議之上喜右衛門親子、仁右衛門、

権十郎、六太郎同十二月十八日御

評定え被召出御取合之御尋、同

廿二日御尋、同廿三日皆々本所え

被召帰候事

一 右御奉納物盗取候者は

刈田郡白石深谷村小市と申者

御座候事

一 宝暦二年三月十五日

一 御和歌并温泉記

其外品々御ふくさ包ニ而

箱入

御代官男沢四兵衛様、大肝入

左藤太右衛門殿御供ニ而

薬師堂え直々御献納

被遊候事、仁右衛門、喜右衛門、権十郎、

六太罷出被仰渡候趣奉承

知候、末々共ニ大切ニ相守虫ほし等

仕候とも四人立合候而可仕候由被仰渡候

段奉承知候、右男澤四兵衛様へ

書上仕候覚

一 御和歌 一軸

但し御ふくさ包ニ而箱入

一 温泉記 一軸

右御ふくさ包ニ而箱入

一 其外三つくそく御前つくへ

御戸でうとんす沓枚物ニ而

右之通下拙共御引添

御奉納被遊候、末々共大切ニ仕候様

被仰渡候、随分謹而相守可
申上候、已上

柴田前川村青根湯守

仁右衛門

同

喜右衛門

宝曆二年申の三月十五日

権十郎

六太

同所組頭

万右衛門

同 肝入

伊平次

大肝入

太右衛門

男澤四兵衛様

一 薬師堂屋ね宝曆貳年

六月より取付右こは屋ね壱分判

貳両ニ而相渡申候、已上

一 青根湯元より所々え道法覚

一 川崎町へ貳里廿九丁廿九間

本駄ちん七拾貳文

軽尻 四拾八文

川崎より

一 小野町へ三十五丁八間

本駄賃貳拾四文

から尻十六文

小野より

一 碁石町へ壱り十七丁三拾四間

本 三十七文

から 廿六文

こいしより

一 赤石町へ壱り一丁十八間

本駄賃貳拾六文

から尻十七文

赤石より

一 茂庭へ壱り六丁

本駄ちん廿七文

から尻 十八文

茂庭より

一 鉤取町え壱り十六丁拾四間

本 三十五文

から尻廿三文

かきとりより

一 長町え壱里七丁三間

長町より

一 北目町え三拾三丁

青根より

一 仙臺國分町迄壱り程

一 秋保長袋愛子通十一里十五丁

二十九間

一 永野菅生通拾貳里三十四間

青根より

一 角田町へ十一里六丁四間

青根舟岡通

一 亘理町へ十貳里貳拾四間

青根より

一 野上町へ二里十四丁

本駄賃六拾四文

から尻四拾貳文

野上より

一 笹谷町へ二里拾四丁

一 山形御城下え 十一里十六丁

三十三間

御分領中御境目覚

名取郡

柴田郡

刈田郡

一 二口

一 笹谷

一 湯原

刈田郡

刈田郡

伊具郡

一 上戸沢

一 越河

一 大坊木

今欠入二有り

伊具郡

同郡

同郡

一 水澤

一 峠

一 大内

宇田郡 同郡 伊沢郡

一 菅谷 一 駒ヶ峯 一 相去

同郡

一 釣師

伊沢郡 賀美郡 同郡

一 下嵐井 一 軽井沢 一 田代

同

一 寒風沢

玉造郡 江刺郡 江刺郡 今抓木田ニアリ

一 尿前 一 上口内 一 水押

同

一 寺坂

気仙郡 気仙郡 江刺郡

一 人首 一 唐丹 一 野手崎

気仙郡 気仙郡 栗原郡

一 上有住 一 下有住 一 鬼首

国分

一 作並

都合貳拾五ヶ所

笹谷、湯原、越河、上戸沢、駒ヶ峯

右五ヶ所えの御役人ハ拾貫已上より

三拾貫已上被遣候由、尤御境目横目

と申銘出御城ニ御奉行様より

被仰渡候由、其外御境目えは

御出入より被仰渡候事

一 笹谷峠名所古跡ニ有リ右

山の惣名

大笹山白王谷千人澤

別当東國山

仙住寺

一 有耶関トハ 羽州新山の事也

一 無耶関トハ 笹谷の事也

古歌

武士の出さ入さに

しおりける

とや／＼島の

有耶無耶の関

大笹山白王ヶ谷歌

うつもれる末長橋の

渡る世に

こきていとふき

山かけの瀧

延享三年七月御巡見様

御出被成置候覚

一 七月六日

村田町御置馬

同日

川崎町御泊り

同七日

笹谷町御置馬

同日

山形御泊り

同八日山かたより御上り 笹谷町御泊り

同九日

川崎町御置馬

同日

永野町御泊り

同十日

白石町御置馬

同日

越河町御泊り

夫より相馬え御通り被成置候事

御家老

一 山口勘兵衛様

牛嶋喜三五

西田重行

御人数上下四拾七人

御宿笹谷町

彦左衛門

脇亭主青根

仁右衛門

御家老

一 神保新五左衛門様

貞村治兵衛

上田津右衛門

御上下式拾七人

笹谷御宿

庄兵衛

脇亭主青根

権十郎

御家老

原安右衛門

関口九兵衛

目付役

皆川太内

大所より役

同次役

平 平吉

長崎善左衛門

新四郎

平田直右衛門

甚太

栗嶋武太夫

馬場益太夫

佐藤甚右衛門

今宿村野上町笹谷町共ニ
高七拾貳貫九百九拾三文

小林文右衛門

内六拾八貫三百三拾七文 本地

森田喜右衛門

田代六拾貫八百拾四文

御上下三拾貳人

此丁場拾三丁四反五セ四歩

一 本駕籠

老挺

銘ハ貳百八拾文米金方四切ト拾切迄

一 山駕籠

二

同田代五拾老貫五百廿三文

一 けしやう馬

九疋

此丁百廿八丁八反廿三歩

一 鞍馬

五疋

銘ハ大豆六分一金方四切より拾切迄

一 細井金五郎様

仙臺見届御役人

一 四貫六百五拾六文 新田

平山六右衛門

田代老貫貳百四拾五文

賭御役人

此丁九反九セ十八歩銘ハ貳百八拾文

次田弥五郎

一 同田代三〆四百拾老文

此丁八丁五反忒セ廿三歩

銘ハ大豆六分一金方三切より拾切まで

内

笹谷町

一 高五貫八百六拾四文

金五切ノ銘

一 町家数

三十八間

一 町丁場

三丁程

笹谷より山形関根迄の道法

一 さゝやより関根へ三里此本駄賃

一 百六拾七文

から尻

一 百拾壹文

かこ代

一 百六拾六文

但し歩夫忒人分也

一 宝曆四年亥ノ年作等至而不作ニ而

及難義ニ同五年中より相続成兼山根

通りニ而ハわらひのね山の物計取り候而

命をつなき罷在候事、右ニ付

死たるもの数十人有、米壹斗壹升

より三四升迄大麦四拾八文大豆壹升ニ付

五拾文より六拾文迄小豆七拾文米の

さくつ壹升ニ付十忒文より拾六文まで

そば壹升ニ付四拾五文其外万物

高直成事何年ニも覚無之候事

御上より御慈悲を以大麦御借

被下置村田町槻木町御蔵一字

被下借御分国中え御金壹軒ニ付

壹切宛被下候事、たねもミ

等迄被下候而御百姓相続仕候事、

右覚之事此末ヶ様事可有

御座と覚心掛ヶ可申事第

一也

[9] (諸用留) (宝曆二へ一七五二) 天保一二へ一八

四一〇年

(前部破損)

一 初式斗九升三合九文 濟

此代五百八拾八文

外二九文大麦願入料

右之通上納仕候、以上

天明二年六月廿七日濟申候

一 百五拾文 当春御塩駄ちん

同日

一 式十四文 御礼御初尾代

右之通組頭方へ納仕候、以上

寅三月廿四日濟

一 百六拾文 当春御塩先納代

同日

一 三拾九文 御地頭様方薪料駄送代

〆百九十九文上納仕候、以上

天明二年十月十七日山手御役代半役二而七貫貳百文喜

右衛門相濟申候事、せ^(たいカ)人権十郎方二而相納申候、
野上町へ持参申候

天明三年分御山手御役代凶作二而入湯人も不足品々願
申上■御免被成下候事、以上

二月一 渡候事

此間は御様子不承候弥無御別条御座候事ト目出度存候、
私共無異儀罷在候、然ハ当春大嶋新右衛門取立之頼母
子之鬩御取付被成候処、右集金代御渡致候儀ニ付品々
致御相談候処、其節相分無申候ニ付右新右衛門方へ相
談為申登候処、別紙之通り申越候間、同人罷下り候以
後御直談被成候事と存候、此上私方ニ而御相談可申様
無之候、仍而新右衛門紙面尅通遣申候間、御披見可被
成候、御披見以後紙面ハ可被相返候、此段可得御意如
此御座候、当番ニ而此間仙臺屋敷ニ詰居候而用事取込
候故早々如此御座候、以上

四月廿日 加茂勇右衛門

仁右衛門様

一 去月頼母子被相過給仁右衛門殿御取付候由御同人
え御悦御申可給候、扱また御直段致候而之上御渡
致事御座候間、左様ニ御心得夫迄ハ其通被成被指
置可被下候、筆紙ニ而相訳兼候儀御座候間、左様
ニ御心得可被下候、折入之儀ニ而なく紙面ニ而
申達兼候間、其間御待被下候様仁右衛門殿え尤連
中へも御申伝可被下候、細身罷下り万事可申達候
間取込罷成早々如此御座候、以上

三月廿九日

大崎新右衛門

加茂勇右衛門様

青根出湯御役代往古より御村方定御受ニ御座候ニ付、
御村方より重立へ被相登役所被相立御役代取立始末并
大湯、大瀧、名号の湯、右三ヶ所共ニ普請、又ハ御郡
司様初万御役人様方御出御泊り御昼御賄諸入料其外御
村方より被相登御村御役人衆中御山守衆中御役所御賄
ニ被成来り候処、拙者共親之代元文中御村方中御吟
味候上重立外被為相登、右始末之儀私方へ被相任候ニ
付去年迄数拾年私共方ニ而御受合始末仕候処、当正月

私共類焼不残仕候故居宅計も作事仕度色々相働申候得
とも、當時の世からニ而諸才覚も仕兼普請仕兼罷在候
体、来春ニ相成候て居宅計も作事仕度奉存候処、右御
役代諸始末之儀御受合罷在候而ハ何様ニも仕兼申儀御
座候間、来年より先年之通御村方より主立被為相登御
始末被成置候様可被成下候、以上

安永八年十二月

仁右衛門

喜右衛門

権十郎

七兵衛

組頭 十蔵殿

同 久次殿

同 万右衛門殿

右之通相認御村方へ申遣候処、夫より川崎中町次兵衛、
前川つきぬき久次、川崎肝入五郎助、右三人請方仕宿
喜右衛門方罷居御役代始末仕候処、不景氣故間ニ合不
申儀ニより安永九年十年と二ヶねん始末仕候上また以
御村方より青根三者共ニ被相頼天明式年より始末仕候
事

御殿上財木被下置候被仰渡品々扣書

左之通被仰渡候間其心得首尾有之沓卷可被指戻候、以上

以上

目黒弥門

大肝入

日下伊平次

十二月廿八日

肝入

大宮五郎助殿

左之通被仰渡候間其心得首尾可有之候、以上

西 嘉蔵

十二月廿七日

大肝入

日下伊平次殿

左之通山林方より申聞候間其心得首尾可有之候、以上

堀江新五郎

十二月廿六日

田 甚内

西田嘉蔵殿

左之通被仰聞致承知候向々首尾合候上沓卷不残指上候、

十二月廿二日

田母神甚内様

御同役様中

青根湯守仁右衛門儀自分家作仕御入湯之節御用立候に付、御財木被下置候御下知別紙各連名に而申来候間、相廻候条御首尾合別紙被相戻候様致度候、御郡司首尾合あるニ付如此ニ候、以上

田母神甚内

大沼彦太夫

十月廿九日

牧野新兵衛様

御役様中

柴田郡青根湯守仁右衛門儀自分家作仕 御入湯之節御用立候に付此度御財木被下候間、木数欠数共吟味被達候様御紙面之沓卷被相渡承知仕罷下り右仁右衛門承届候処、雑木上道具大小木数貳百五拾七本相入候内別紙申出候に付山所等候儀候間、尚又仁右衛門引添吟味仕

候処、同所へけ石御林ニ而被下置候後は引隔不申候、
運方共ニ勝手ニ罷成候段申聞候間、右御林ニ而被下置
候方と吟味仕候、勿論長式間木より式間半木迄相見へ
候処、雜木ハ短木ニ而式丁取ニ不相成候間、本木ニ而
右木数之通被下置数末木ハ同所御山守御払ニ首尾可仕
候、仍而被相渡御紙面之卷并右仁右衛門申出候別紙
共ニ指添相達申候、以上

新山左仲

金須甚太郎

十一月廿五日

左之通吟味被申聞合承知無異儀ニ付其心得首尾可有之
候、以上

十一月晦日

源左衛門

目黒弥門殿

柴田郡青根湯守仁右衛門儀自分家作仕 御入湯之節御
用立候に付此度御財木被下置候に付、右首尾可仕由被
仰渡承知仕木の品欠数向々承届候処、上道具雜木大小
木数貳百五拾七本同所へけ石御林ニ而被下置可然由、
別紙之通り新山左仲申聞候、仍而吟味仕候処、右御林

ニ而被下置候へハ運方共ニ勝手ニも相成候事ニ相聞得
申候間、別紙調書之通木数被下置数末木ハ兼而之通御
払被相立候様ニ首尾可仕候条、無御異儀候ハ、御下知
被成下度別紙指添相達候事

目黒弥門

十一月廿八日

左之通御奉行衆被仰聞に付其心得兼而之通被下候、首
尾可有之候、以上

平源左衛門

十月廿七日

田母神甚内殿

牧野新兵衛殿

尚以伐方之儀ハ前々之通り是又首尾可有之候、以上

青根湯守仁右衛門自分家作仕御入湯之節御休所御療所
ニも御用立候様仕度趣相聞得候処、右家作上道具今以
自分才覚成兼普請ニ取付兼候趣ニ付此度上道具被下置
候間、仁右衛門ニも被申渡右財木ハ其所ニ而薪木料被
相渡候御林より被下候間、其心得伐方等之儀ハ兼而之
通首尾可有之候、以上

十月廿六日
平源左衛門殿

豊前

小豆夏罷成貳百廿文但し壺升ニ付
大豆壺升ニ付百四拾文迄

玄米壺升ニ付仙臺城下三百六拾文

玄米壺升ニ付貳百四拾文伊達郡ハ仕候事

卯十月九日

一 大麦六石六斗六升

右ハ青根人数三拾七人え拝借被成候事、村田御蔵
ニ而受取申候

一 仁右衛門方

拾文宛小麦壺俵ニ付八匁文宛
七人分

一 大豆壺升六拾文くらい春相成候而ハ百廿文迄仕候
七兵衛

事 九人

一 小豆壺升ニ付八拾文より九拾文迄春ニ罷成候而壺
喜右衛門方

百七拾文迄
十三人

十二月廿六日村田市ニ而玄米ニ而八升五合壺切相調申
権十郎方

候事 八人

千葉壺つニ六拾文宛相払申候、手前下人伊四郎ニ持参
メ三拾七人

為致候事、春相成最上米六升五合仕候

天明四年正月相成川崎ニ而白米壺升貳百文御座候事

御助大麦拝借被成下候前川村中人数壺人ニ付貳升七合

宛天明四年正月十四日組頭所ニ而受取

一 人数四人分 仁右衛門方

大麦壹斗八合右諸掛り物

七拾四文宛右忝人ニ付十八文外宛

一 人数六人分 七兵衛方

大麦壹斗六升式合

一 人数拾人分 喜右衛門方

大麦貳斗七升

一 人数五人 権十郎方

大麦壹斗三升五合

天明四年辰正月廿三日凶作ニ付御助麦拝借被成下候事

一 大麦壹斗五升式合 仁右衛門

人数四人忝人ニ付三升八合宛

諸方小遣駄ちん迄百三十式文相出ス

忝人ニ付三十三文の割ニ而如此

一 同三斗八升 人数拾人分 喜右衛門

一 同貳斗貳升八合 人数六人分 七兵衛

一 同壹斗九升 人数五人分 権十郎

天明四年辰閏正月御助大麦拝借被成候事

一 大麦壹升六合 人数四人分 仁右衛門

一 同貳升四合 人数六人分 七兵衛

一 同四升 人数十人分 喜右衛門

一 同貳升 人数五人分 権十郎

同年同月廿四日大麦拝借被成下候事

一 大麦貳升式合 人頭忝人え計 七兵衛

一 一同 喜右衛門

一 一同 権十郎

右之通受取申候、手前仁右衛門はいか様ニも仕候事御上え被及御聞前川村之内ニ而浪かた庄八、久次、三右衛門手前仁右衛門×四人えは此度ハ不被相渡候事、当时渴命候者え計被相渡候事

天明四年辰二月 御上様より御金拝借被成下候事、前

川村え三両被相渡候、右割合を以左之通

忝人ニ付四十九文如此

一 百九拾七文 人数四人 仁右衛門

一 貳百九拾五文

人数六人 七兵衛

一 百九拾七文

人数四人 権十郎

一 四百四拾三文

人数九人 喜右衛門

〆老貫百三拾貳文

右之通青根人数貳十三人え被相渡頂戴仕候

辰二月十日

組頭五郎作方より受取

天明四年辰二月廿八日御助大麦貳斗五升青根廿四人被

下置

一 四人 仁右衛門

一 九人 喜右衛門

一 六人 七兵衛

一 五人 権十郎

同年辰三月三日御助大麦拝借被成下候事、青根廿四人

え大麥三斗七升八合

一 四人 仁右衛門

一 六人 七兵衛

一 九人 喜右衛門

一 五人 権十郎

右之通拝借被成下候事

辰七月末相成玄米老升四拾八文より三拾八文迄白石ニ而売買御座候事、夫より段々と引上ケ五拾文六拾文七拾貳文くらい九十月ニ相成売買御座候、右は村田ニ而老切ニ付貳斗貳升くらい仕候十一月相成老斗九升致候

天明四年十一月 御上様より山根通七ヶ村え御米被下

川崎前川村へ三拾貳俵四斗八升入ニ而被下置、右之内

飯肝入長次拾俵遣込其外ニ地肝入久次、組頭善兵衛、

十左衛門右三人三斗貳升宛受取其外村人頭老人ニ玄米

貳斗宛割渡前川坂ノ下組頭善兵衛所ニ而受取、十一月

晦日

一 米貳斗 仁右衛門

一同 七兵衛

〆四斗受取申候、已上

右は槻木より前川迄老俵ニ付百九十老文かゝり物

御上え書上之扣

此度前川村青根

御殿谷津甚助様願之上御建方被成置候ニ付、御殿御座敷通り地方御引渡左ニ申上候

一 四間ニ弐間半 青根湯守 仁右衛門

但し御座の間通り

一 四間ニ弐間半 同 喜右衛門

但し御療所通り

一 四間ニ弐間 同人

但御物置通り

右之通御用立上候、拙者共御引添御引渡相違無御座候、以上

前川組頭

利四郎

天明弐年

同

七月

弥太郎

前川仮肝入

熊谷源兵衛

大肝入

菊田

幸左衛門様

日下伊平次

御殿守被仰渡御下知写

左之通御下知被仰渡候間其心得首尾可在之候、別紙は返上写を以如此ニ候、以上

大肝入

天明三年

日下伊平治

卯十二月廿六日

前川仮肝入

長次殿

御殿守

仁右衛門殿

同

喜右衛門殿

左之通被仰聞候条湯守仁右衛門、喜右衛門兩人

御仮屋守本役ニ申渡候首尾可在之候、以上

御仮屋敷地ハ列目被建下候段是又被仰渡候間来春相改

候様可申候条例高書出調置御伴地帳へも引合置候様可
在之候、右兩人ニ御合力等被下候様ニ申達候処、段々
御吟味之上難被下品々も此段被仰渡為心得申渡候、以
上

次 太郎右衛門

十二月

下 玉蔵

諏 吉三郎

大肝入

日下伊平次殿

村上伊七殿

尚以御写ハ返達候様被仰渡候間首尾合以後早速玉蔵方
へ可被指戻候、以上

左之通追々被御申聞候処兩人共本役ニ被申渡首尾有之
御仮屋敷地列目ニ被立下候首尾可在之候、最初文言不
直ニ申渡ニ付被御申聞通ニ如此ニ候、以上

堀 新五郎

十二月

諏訪部吉三郎殿

下々 玉蔵殿

次田 太郎右衛門殿

天明三卯十月九日大麦年普拝借被成下候、各此度上納
仕候

天明五年七月

夫七兵衛

一 貳貫三百六拾貳文

大麦代済

諸かゝり入料共ニ

右三拾七人割老入前六拾四文宛

天明六年七月十一日

夫善兵衛

一 壹貫八百文

大麦五斗

一 五拾人

俵拵諸掛り

一 百人

御蔵守方へ出ス

一 一百三十八文

米壹升

一 一十貳文

わらんし壹足

〆貳貫百文

右ヲ三拾七人割五拾七文ニ当り候

八十文かへ

一 大麦四斗八升

一 同老斗六合 前川村次合

〆五斗八升六合

外ニ此代四〆六百四十八文

百文 かゝり物俵方へ

百文 御役人様へ遣物

百文 御藏守儀兵衛方へ

右之通上納手前仁右衛門宛相済申候、以上

未七月六日

一 撫角錢天明四年辰六月より青根ニ通用仕候事

天明六年午四月

屋形様御下向被遊候に付大川原へ詰歩人足式人当り手
前より老人向の市四郎参り候事、村なミニ而老人前五
百文ニ而手前より式百五拾文七兵衛方より式百五拾文
受取都合五百文ニ而参り者障たヲれ損御座候事、重而
脇の者遣候事ニ御座候ハ、右之割ニ而錢相出可申候事、
右ハ当所者遣候節覺ニ扣候事

天明六年薪山願御下知書覺

青根湯守共炊料山御役代御免被成下度段夏中仮肝入義
四郎を以申出置候相達候所、如願之当年も御役代御免
被成下候段御下知申来候間、其心得湯守共へも無延引
申渡候様可有之候、願紙面ハ直々返上首尾いたし候間、
書拔を以如此ニ申渡候、以上

大肝入

九月十日

日下伊平次

肝入

大宮久次殿

右願書御下知九月十八日前川より相届達候事

寛政元年出湯御役代御免被成下候御下知之写

左之通御下知相出候条、去天明八年分ハ式拾貫文其節
相納候処、残三拾貫文ハ被減下当寛政元年分ハ撫角錢
五十貫文を以寛永錢割合不被相掛御役代被召上候間其
心得首尾可在之候、尤此御下知ハ諸役帳引合ニ相入候
事ニ候間、無間違指出諸帳面引合相請候様可在之候、
以上

酉の

九月十六日

日下嘉右衛門殿

下 玉蔵

出湯御役代寛政元年酉戌亥子四ヶ年願申上相済撫角錢
五拾貫文ニ而上納仕候処、右四ヶ年季之内ニ御座候得
共前川肝入久次方より御役代始末仕置、村方へ内々相
談候上久次、七右衛門、宇右衛門、健助、右四人ニ而
湯錢子の年より始末仕候

寛政四年子閏二月 扣置

寛政七年卯正月より出湯御役代受方前川庄兵衛

而は縦式拾貫文被成下候而も撫角錢を以相納候節兩錢
相場割合被相懸被召上候而ハ五拾貫文よりも相過猶相
納兼候事御座候間、去年分御役代は式拾貫文ニ被減下
当年より撫角錢五拾貫文を以相場無割合相納候様被成
下度由、追々被御申聞合承知無異儀候条其心得首尾可
在之候、以上

佐 勇治

二 運治

酉ノ

九月十三日

下 玉蔵殿

右之内へ遠刈田へ源右衛門殿湯治被参忝人相除
又以速ニ庄七方前を遣同人方へ忝人かし置
十一月御小人参候節庄七前遠刈田へ夫歩忝人遣同人方
へかし

此末夫歩ハ七兵衛方前也、役人宿前ハ喜右衛門方也
三月廿六日

屋形様御登三月廿八日右御人足手前老人右貸代角銭壹
〆七百文ニ而相頼前川千吉ニ遣

川崎へ先年より度々御用金被仰付候金高百切程御貸
与仕候に付御称被仰付候覚

寛政八年辰四月六日川崎へ罷越御扱檜山多門殿宅ニ而
翌七日御料理被下置夫より御下屋敷え被召出

御目見被仰付夫より別紙書立を以被仰渡候事、帶刀御

免身分の義は組士格ニ被仰渡候事

苗字上下の義ハ先年

御公儀様より御免ニ被仰付候事

辰の正月廿八日青根出立登ル

寛政八年江戸御詰合御役人様覚

御隠居様方

一 御年寄 高泉主計様

沼倉元次

一 佐伯直衛様

御家来片山津右衛門

佐藤平次

一 小性頭 多川丹波様

一 同役 村上平兵衛様

一 御用人 黒沢右仲様

一 御近習 丹野貫左衛門様

寛政八年江戸御詰合

当屋形様方

一 奉行 平賀藏人様

一 御小性頭 石田豊前様

倉本又右衛門との

一 同 松坂団次様

石田太五右衛門殿

一 若年寄 鈴木志摩様

川崎伊達主殿様御婚礼寛政九年巳十二月八日右御祝
儀ニ同十日被召出、御広間に而御酒被下御盃御指な
りしに被下置 御目見被仰付候上

御意の御言被下置かけかわふしと申御上下於御広間御

座敷ニ而 御あか付立ひきりやうの 御紋付御上下御
拝領被仰付候事

寛政九年巳八月十九日川崎へ被罷出御用金被仰付候処、
春中より三ヶ度ニ金貳拾五切禄上金ニ申上候処、九月
十五日被召出身分御小性通り川崎ニ而の名替佐藤寛左
衛門と被仰付候ハ、
御公儀方ハ佐藤仁右衛門と名のり可申事

伊達主殿様方

一 先年より度々御用立金仕置、此度金三拾切御納戸
方ニ而御用金被仰付指上候に付、為御意御刀拝領被
仰付候、寛政十一年未十月廿一日川崎え罷越頂戴仕
候事

一 御刀銘和州正長ト有

極札貳枚五両ト有

長サ貳尺三寸五分有、袋入ニ候

祖父代野山ニ杉植立置候処、川崎より当所七兵衛、
喜右衛門品々手入之上申来候事覚

佐藤仁右衛門
佐藤喜右衛門

丹野七兵衛

右之者共先祖代中末々用木のため近所野山内へ杉植立
仕候由之処、品々御吟味之上御用木ニ被召上候処、青
根の義は山中ニハ候へ共杉木等至而不足末々用木迷惑
候筋相聞得、此度壱人前より金三切其上金申上候に付、
右杉一字三人の者共勝手次第自由被仰付候事

忠左衛門

寛政十一年

未八月

又左衛門

惣左衛門

大森吉太夫殿

右之通此度申渡候様可在之候、已上

右之趣御座候間杉林の義は追而御郡へ相窺候上吟味可
仕候、後日為用之如此写置

寛政十二年申六月十七日隣の庄次郎、手前下人利助う
らの畑のくわの木枝と落大根畑へ少落候ニ付、私留主

の所へ参り右之品々かけ合悪口申、其上五升たき鍋壺
つうちかうし申候事、為後日之扣置

祖父代野山杉植立置候に付御代官様より被仰遣候
書付候覚

青根湯元

御殿守佐藤仁右衛門先祖代願候上同所野山へ植立候杉
木元在之候事ニ相ミへ候処、今程成木可申候処、木高
寸面承届急速可申聞候、御用ニ相入候間無延引承届可
被申聞候、此段共申渡候、已上

前 甚左衛門

寛政十三

酉正月廿六日

大肝入

日下嘉右衛門殿

青根庄七古土蔵相調候事ニ付右始末手形写
私古土蔵判金三拾切ニ大工周吉殿御取持を以売払申候
義実証ニ御座候、右蔵ニ付何方より如何様之義申来候

共貴殿方へハ御苦勞相懸申間敷候、何方迄も私罷出急
度相分ケ可申候、為後日之請合相立手形仍而如件

前川村青根売主

寛政十三

庄七

酉二月

川崎受合

大宮吉左衛門

小野村受合

佐藤軍次

佐藤仁右衛門殿

寛政十一年未七月三日七兵衛方より使を以申遣候ニハ、
水やりのほり海道垣のねへほり在之不自由ニ御座候而
手前屋敷之内ニ水雨ふりの時分流候様致候様申聞候所、
扱又先年より百年余如此のほりニ而是迄仕来候間、雨
ふりの時分不自由成ル年も可在御座候得共新キ事も無
御座候間、是迄之通り致呉候様申遣候処中々以聞濟不
申候間、又以組合を以喜右衛門、庄七ヲ以右之趣申遣
候処、聞濟不申其方ニ而屋敷之内へほり方不仕候ハ、
此方よりほり可申や抔と申遣候処、何と此方ニ而見合

水さへ流候ハ、何ニも可仕と申遣候而見合罷在候内、三月五日朝七兵衛父子其外下人抔手間取人都合五人ニ而手前屋敷方へほりかた致馬足通用も六ヶ敷候処、追而見合

御上様へ願可申出候事

青根入湯御役代去年より寛永錢五拾貫文定御受ニ而上納仕候処、其節前川な^(か)ミ^{火也}た庄兵衛受主ニ而肝入久次、当所七兵衛、川崎家中惣右衛門、右三人ハ内のりニ而始末仕受おいニ御座候処、御上様より御吟味候上御分領中湯元御役錢増ニ願候者在之候て右之者ニ被相渡候段、御金山下代和泉林左衛門殿、門脇新右衛門殿、目黒庄右衛門、右三人廻村被致右之趣被申渡候に付、当所喜右衛門、庄七、兩人五貫文増ニ而丸錢五拾五貫文ニ而御受負可仕と願申出候処、前川村受人方より五拾五貫五百文被相渡候様ニ追々申出、丸代五拾五貫五百文相成候事

寛政十年

午の六月廿六日改置

右之御役代セリ上御受負仕候儀も追々罷成候而無然事ニ奉存候間、佐藤仁右衛門事ハ相加り不申候事、留置

山形大十調

子文政十一年六月

一 金貳兩貳歩

太鼓貳つ

みやふはち貳つ

同

一 同十三切ト五分

ほりちん

一 柴田蔵人様御事

天保三年七月六日当所え入湯被成置候処、御同人様私宅え御出被成置候訳ニ御座候所、馬子之者七兵衛所へ宿引来此度は七兵衛所え御泊り被成置候、右ニ付私七月六日御着刻御見舞ニ罷出尤献上物指上候、直々御目通被仰付御酒等被下置候、猶瀬戸御盃并台共七月十一日晚被下置候事、其節之御取次役人清水定之助様七月十二日御出立ニ相成候事

一

藏王山御山役四拾八文ニ御座候所、盛り中は御小屋へ別当より話合在御山役取立いたし候、不盛節は面々宿々へ札守願置候而取都ニ相成候所、宿々ニ而も別而合力も無之ゆへ則道も不在依之私存慮ヲ以参詣人老前より拾文つゝ合力ニ被下候ハ、面々則道も可在と勘弁いたし蓮藏寺御相談在四拾八文取都別当方へ三拾八文つゝ勘定可在訳に約定在候事、其節之役増丸森住居蓮花寺也、天保三年一ノ鳥居請合御メ役関谷七郎左衛門様也、本寺御住処在方為御代也

一

是まては湯治人木錢老前四拾文つゝ御座候処、此度吟味仕五拾文つゝ請取候様当所并遠刈田え取合如此候、全体四十文つゝ取立候節とは追々諸道具等迄おこり湯治人へけへはくの世の中ニ相成候而諸かゝりおふにて私仲間へ相談仕候処、可然訳にて夫より遠刈田組頭亀吉方へ内談仕、八月三日ハ二百十日ニ而二日よりしやうしんおかみ宿遠藤市右衛門同人所迄私罷越遠刈田もの共惣座候処え

出会仕、右相談いたし候処、是以同意ニ而八月三日天志屋萬吉之日也、此日より五拾文つゝ取立候事

天保八丁酉年八月三日

天保四巳年大不作ニ付村方并川崎町極難渋之者共へ天保五年三月廿九日施米仕候者共左之通

玄米相場八升之時也
極上千米五升つゝ

村方へ

なミかた屋敷	同	同	同
一 利七	又治	市之丞	専太郎
大向	大向	前丁	前丁
権兵衛	市之介	清左衛門	十四郎
大森	たから	水上	水上
千吉	金蔵	善治	甚七
坂の下	槻木屋敷	北屋敷	北屋敷
助右衛門	栄蔵	久太	久松
メ拾六人			

川崎本町

甚吉 平之丞 運吉 福松

磯吉 佐吉 三藏 乙治

清右衛門 庄治郎 藤内 孝太郎

半兵衛 五平太

同中町

庄八 又吉 弥惣八 勇治

佐治郎 多吉 寅吉 平吉

養藏 吉五郎

外二 廿四人

三升 浅右衛門

同 覚兵衛

惣人数三拾式人

此節青根之者共不申請訳ニ付相渡不申候事

此度当所喜右衛門、重太郎、兩人難渋ニ付相続六つヶ敷故、豆腐売買当年より向三ヶ年引立之ため為任くれ候様肝入久治、組頭市之介、罷越候而願ニよつて、如此印

天保九年五月六日

一金子貳両也

右金は村方もの共極難渋ニ付種麦調可申様無之、肝入久治、組頭市之介、兩人ニ而手前へ罷越村方難渋之者共八人へ手当ニ被下度願ニ付直様金子相渡申候事

人数左之通

門三郎 助右衛門 勘七 千吉 市之丞

久右衛門

天保九年九月

此度重太郎方え被相任候品々壹ツ書ヲ以左ニ申遣し候

一 あんもち まんちう

一 あんころもち いか餅

右四品当年より末五ヶ年

右之通十太郎不相続ニ付各方吟味之上被相任右年数中脇方より弘人罷越候共指支不相弘様御手入被下度候、私事仲人ニ而右之段彼はニ申上候、委細は先日喜右衛

門え直談致申遣し候間、此段共申進候

前川村肝入

久吉

天保貳卯七月

七兵衛殿

湯守衆中

手形之事

一 太鼓 壹対

一 明鉢 貳かう

右は青根屋敷佐藤仁右衛門義如斯之寄進ニ付願之上先祖ハ院号居士大姉者也、其儀より此末永々居士大姉相伝者也、依而如件

龍雲寺

文政十一年 廣海判

子八月

青根ノ

仁右衛門殿

右之通手形請取置候間末々迄如斯心得申候様可有之候

地光院儀孝慮順居士

清寿院昌明知順大姉

右は去年より之大飢饉ニ付寺不相統故調達金御寄進御座候間如此

院号居士大姉免許致置申候、以上

牌所

龍雲寺

天保八酉年 法山

青根屋敷

佐藤仁右衛門殿

嶺孝院得公羽富伝居士

見智院歛相妙喜大姉

右之通前書ニ相印置候趣ニ有之如是ニ扣置候

同年同月 同寺

法山

善右衛門殿

写

一 此度志願調達ヲ以屋号御免被成下候もの数多有之候所、御免被成下候者之外心得違之者屋号何屋と相唱居数之内ニは暖帘かんはんとふへ相記置候ものも在之哉に相見得不相濟儀ニ候間、在町共ニ此末御免之外屋号相唱候儀は勿論、暖帘等へ相記候儀は一切難成候間、各其心得早速首尾可有之候、以上

御郡奉行

矢野甚左衛門

天保十二丑年

八月

御代官衆

御郡方横目衆

右写之通被仰渡候間、各其心得首尾有之心得違之もの無之様早速首尾可申候、指当り町場々ニ而は屋号相記かけおき候者数多相見得、万一も御止口等有之候而不輕痛ニ相成候、数之内ニは難立候者も可相出候間、大急に首尾有之心得違之者えは急度申含宿板等ニ至ルまで此紙面届き次第為外候様急度首尾可被申候

一 屋号御免被成下度志願調達金指上度ものは式拾五両献金致候へは御免被成下候事に有之候間、是亦志願之者有之候ハ、急度取調可被申聞、此段も為吟味之申遣候

かり大肝入

小泉村 新七

同八月十一日

久治殿

右之通被仰渡候間、委細は御紙面之趣ヲ以肝入首尾可被成候

同月十七日

久治

村与頭 市之助殿

当所湯神堂大破ニ付御林より

材木被下置候御下知一卷写

文化九年より同十一年九月十日

乍恐口上書ヲ以奉願上候御事

一 槻木拾本

但し三尺廻り

右当所湯神薬師堂大破ニ付此度立替申度奉存候故、去
六月中村邊下石御林右木数被下置度奉願上候所、類外
之義ニて難下置義被仰渡奉承知候、右御堂之義ハ享保
四年中立替申候砌も嶽山花房山御林ニて槻木元三本雜
木取合被下置材木伐方被仰渡御山林御役人様鈴木茂右
衛門様御首尾御林御本帳ニ相見得申候義ニ御座候間、
右写相添奉願上候条此度迎も邊下石御林ニおゐて被下
置度奉願上候、是辺之御堂ハ小サク御座候間人数も相
入不申候、此度立替申候御堂ハ九尺四面仕度奉存候故、
木数も余慶相入奉願上候条恐入奉存候得共、前文之通
邊下石於御林槻木拾本被下置度奉願上候、仍而御山守
連名ヲ以如此奉願上候条此段宜敷様被仰上被成下度奉
存候、已上

文化十年十一月

柴田郡前川村之内
青根屋敷 庄七
同 後家女
同御山守 七兵衛
同 平吉

同 敬右衛門
同湯守 仁右衛門
肝入
久吉殿

組頭
奎之助殿

御別紙御下知被相渡候条御一卷共ニ相渡候間、写取元
印可被相返候、以上

肝入 久吉

九月十日

四人衆中

御別紙被相渡候間、其心得首尾有之一巻は写置無延引
可被戻候、以上

九月七日

大肝入

肝入 平間嘉藏

久吉殿

左之通被仰聞候条首尾合已後指戻候様可被申候、以上
九月六日 末 七左衛門

大肝入

平間嘉藏殿

左之通山林方本×等申聞候間、其心得首尾有之可被指
戻候、以上

九月四日

末永七左衛門殿

柴田郡前川村之内青根湯神藥師堂達材木槻木元拾本被
下置旨別紙之通御下知被仰渡候間、首尾合之上相廻し
申候条追々首尾合以後被御戻候様仕度此段申達候、以
上

九月二日

守屋仲左衛門

針生奎右衛門

中村八郎右衛門様

左之通針生奎右衛門等被申聞令承知無異儀候条、各其
心得槻木元拾本被下首尾可有之候、御郡奉行えハ為御
用之連名申渡候、已上

小 三左衛門

八月十七日

中村八郎右衛門殿

針生奎右衛門殿

守屋仲左衛門殿

鎌田正治殿

柴田郡前川村之内青根湯神藥師堂大破仕候ニ付同村邊
下石御林より槻木元拾本被下置度願申出候所、在々神
社仏閣為修覆之御林より木元被下置候前例無之候間、
難下置段山林方御郡奉行取扱中相達無御異義御下知被
仰渡候所、右御堂為修覆之享保年中御林より被下置由
ニ付本帳写指添追々共ニ願申出候ニ付吟味仕相達罷成
被仰渡承知仕右木元御留木ニも有之、尤類■ニも罷成
容易可被下様無之訳ニ御座候得共、前々共ニ被下置候
事ニ有之由ニ申出候ニ付、此度鎌田正治義余御用有之
出村仕候間右本帳見合申候所、被下置候事ニ首尾見得
前々共ニ被下候上之義ニ御座候間尚又吟味仕候処、持
運之木元之義尤嶽山ニ而御材木等可被相出様無之所柄
ニ御座候間、願之通被下置候方ニ吟味仕候条無御異義
御下知被仰渡候ハ、不被紛様木元引渡之首尾可仕被相

渡壺巻指添此段相達申候、以上

針生杢右衛門

八月 守屋仲左衛門

鎌田正治

一 百四拾〆七百三拾四文

右は丑年分調

一 百八〆百拾六文

右はとら年分調

一 百四拾六〆百四拾貳文

右は卯年分調

一 百三拾五〆百四文

右は辰年分調

一 百三〆八百四拾五文

右巳年分調

一 百四〆七百八拾五文

右午年分調

宝曆二年申五月十三日

野山え杉植立仕候に付御向々御役人様へ願申上御下知相濟植方仕候

御公儀様方御役人男沢四兵衛様、目黒三助様、右御兩人御取持を以願相濟願之上大肝入佐藤太右衛門、村肝入川崎本町伊平次、右取次ニ御座候事

左之通被仰渡候、各其心得首尾可有之候、同役方へ指出可被申候、以上

成 安右衛門

二月十六日

大肝入

さ藤太右衛門殿

湯元之儀元来板敷無御免之所柄ニ候処、此度御吟味之上他領山宿之方を以往還町場同様ニ家作御免被成下候間、御奉行衆被仰渡候由出入司被仰渡候条各其御心得湯元御郡へ可被御申渡候、定役人連名申渡候善右衛門蟄居候ニ付我等方へ如此ニ候、以上

宮 与右衛門

二月十四日

茂屋利右衛門殿

同役衆中

右之通被仰渡候、委細御紙面之趣ヲ以首尾可被成候、以上

大肝入

佐藤太右衛門

二月十九日

右之通被仰渡候間其御心得可仕候、併造作仕候共内々取合可仕候、以上

肝入

明和三年二月廿四日

伊平次

青根四人衆中

仁右衛門

先祖は寛正年中迄

前河村八沢屋敷ニ八澤

豊後迎古来之者ニ而武士

に而、代数幾代住居仕候事

か相知不申、夫より川崎砂金

佐渡様御家老ニ相成数

代右家老役相勤佐藤

掃部と申候事、右二

男天文年中青根え取移シ

彦惣と申せし候事

一 砂金佐渡様亦次郎様

元禄十六年迄川崎御

知行所ニ御座候所、御息様

御死去被成■御家相

立不申、元禄十六年之

頃仙台へ御知行被召上

〔10〕諸御用目録〔元治元へ一八六四〕年〕

諸御用目録

佐藤屋

紙数随用

川崎ニは伊達肥前様

御知行ニ相成候事、夫より

佐藤掃部二男の彦惣

方へ取移候事

居家ニ三間の玄関

御公儀様より御免を

蒙り候事

一 佐藤彦惣

一 佐藤掃部

一 平内

一 半助

一 半助

一 平内

一 市之丞

一 善兵衛事

一 仁右衛門

一 善兵衛事

一 仁右衛門

善兵衛事

一 佐藤仁右衛門

善兵衛事

一 同 仁右衛門

一 天正年中之頃

西立御前様と申奥様

御入湯被遊候事

享保三戌年十月十七日

獅山公様御入湯被遊候事

十一月二日御帰城

享保五庚子歳十月十七日

獅山公様御入湯十一月

朔日御帰城

明和三戌歳八月廿六日

当屋形様被遊御入湯

九月六日御帰城被

遊候事

明和五子年八月九日夜ノ

五つ時御着同廿三日御帰城

被遊候事

明和九辰九月廿八日

御入湯被遊十月十三日

御帰城被遊候事

安永五申歳九月廿六日

御入湯十月八日御帰

城被遊候事

安永七戌歳九月廿九日

御着同十月十一日御帰城被遊候事

安永九庚子年十月朔日

暮六つ時御着同十三日朝

七つ御出立御帰城被遊候事

天明二年寅十月朔日

昼の七つ時御着同

十三日御帰城被遊候事

寛政元年己酉九月廿日

夜四つ時 御着被遊候

十月二日御帰城被遊候事

明和九年辰の三月廿七日御着

御中奥様御入湯被遊候

四月九日御帰城被遊候事

伊達阿波様御入湯

御宿

一 銀子三枚 仁右衛門

外二

湯錢木賃惣此御人数ヲ以

被下置候事

但し惣〆切御入之節計

一 御幕代老貫五百文

一 金老切 喜右衛門

一 金老切 権十郎

一 金老切 七兵衛

木地挽

一 金老切 喜兵衛

獵師

一 金老切 十右衛門

右之通御金拝領仕候事

御宿

一 御献上物 仁右衛門

大くり山いも先例ニ而仕候事

御一門様御一家様御入

湯御宿覚

亘理

一 伊達阿波様

川崎

一 伊達将監様

涌谷

一 伊達安芸様

宮床

一 伊達肥前様

一 伊達式部様

角田

一 石川大和様

右御老頭様計

白石

一 片倉小十郎様

舟岡

一 柴田蔵人様

岩沼

一 古内久米様

平沢

一 高野備中様

村田

一 芝多駿河様

小村崎

一 石田豊前様

伊具坂本

一 大條監物様

柴田郡前川村

青根湯守

仁右衛門

青根御仮屋御次

御大所向等自分入料

を以建上奇特成事ニ候

依之永々苗字御免

被成下候事

右御用之義天明六年

ひのへむま二月十六日大肝入方

より申参り候処、善兵衛他行

仕候に付、来ル廿五日時分

罷出可申段申上置、同

廿五日出立槻木泊り、同

廿六日国分町御用宿菊地

屋平三郎所泊り、国中大肝入衆

被召登候に付御用取込、右ニ付

廿七日より晦日迄逗留、三月朔日

御出入熊谷斎様屋敷ニ而

御郡司様御役人様方御寄合ニ而

被仰渡難有奉承知、夫より

御郡司黒沢仲様御引廻シ

ニ而御役附様方へ御礼罷出候事

一 御奉行 大町将監様

中嶋丁

一 御出入 平源左衛門様

一同	北六番丁	一同	塩倉丁	一同	北四番丁	一同	げき丁	一同	御郡司	一同	小田原	一同	常善寺通り	一同	東四番丁	一同	ぬかくら丁	一同	本柳町
黒沢右仲様		脇坂次兵衛様		六角義蔵様		斎藤繁之右様		堀井新五郎様		熊谷斎様				目黒弥門様		橋本平八郎様		目黒清内様	

一 御代官 今野半右衛門様
 北六番丁杵山通り
 一同 下 玉蔵様

三月二日

御城御郡御会所へ平三郎

案内ニ而罷出右被仰渡事受取候事、

夫より休足仕五日出立川崎泊り

伊達織部様方へも右之段申上候、

三月六日目出度帰宅仕候事

三月九日槻木大肝入方より

罷越候様申来り同十日

出立参り候処、

御仮屋守被仰渡候事

柴田郡前川村
 青根湯守

仁右衛門

青根

御仮屋守申渡候事

右之通可申渡由御奉行衆

被仰聞候条、其御心得無御

指合旨被御申渡、其段可被

御申聞候、以上

熊 齋

天明六年

ひのへ

むま 三月朔日

黒沢右仲殿

寛政六年甲寅正月廿三日

日柄能下人善蔵召連上下

式人ニ而江戸へ出立、日光参詣

夫より出流観音岩船地藏尊え

相廻り所々一見仕候処、二月七日昼

九ツ時江戸千駄木大保福寺様

着、翌八日寛々休足、九日仙台

御隠居松平左兵衛守様袖ヶ崎

御屋敷え罷出御取次御役人

御医師

西村理雲様

御小姓頭

佐伯直衛様

御入御小姓

丹野右仲様

御膳番

佐々布八郎左衛門様

御医師

松井元恵様

右之通御見舞申上理雲様

御長屋泊り、翌十日逗留仕十一日

御小姓頭佐伯直衛様ニ而御

賄御酒等被下置

御隠居様え御献上物済

一 御国本紙布壹疋

一 御紙子 三端

右之通御献上仕候事
御上様より御拝領物

一 御金貳百疋

一 麻絹御上下

右之通佐伯直衛様

御セ話御取成しを以

御拝領難有仕合頂戴

仕候事

右之御役人様方へ

御国元紙布紙子之品

進上仕御礼申上候事

同十一日八ツ時

袖ヶ崎御屋敷出立千駄

木へ夜の五ツ半時着仕候事

十二十三日逗留仕所々見物

用事相調十四日四ツ半

時千駄木出立、夫より東通り

と相尋行徳泊り、成田村ノ

不動尊段々戻りかけニ而

東濱通り岩城相馬の方へ

出、三月朔日目出度夜の

九ツ時青根帰着仕候事

委細道中記留置申候、以上

柴田郡前川村之内

青根湯守

善兵衛

御金山方え金百両

指上御時節柄を勘弁

深切奇特之事ニ候、依之

青根温泉永湯守ニ

被成下旨被

仰出候事

元治元年

子ノ十二月

青根■代持高寛永十九年

壬午五月廿五日御竿答

十八間

本地挽

八文

喜兵衛

一下屋敷十四間 八せ九歩

十八間

右之者遠刈田新地十助家内候処、

十七文 彦惣

享保十九年九月廿一日

御公儀様より御役人被相下御

一同 十八間 老反

竿被相入候事、肝入ハ川崎

廿間

本郷四郎兵衛勤仕候良也

式拾文 喜右衛門

一同 十四間 九せ十歩

廿間

〔11〕永々日記帳〔弘化二（一八四五）〜明治一二（一八七九）年〕

十九文 権十郎

（表紙）（「弘化二年六月十五日」の付箋貼付）

「（一）」

一同 廿間 老反四せ廿歩

廿二間

永々日記帳

式拾九文 藤七

酉正月吉日

一 妙子下屋敷七間 四せ五歩

弘化二年六月十五日晩より長雨天ニ付、名号海道かゝ
沢かけ相はしり候義ハ六月廿三日昼八ツ時相はしり申

候

川崎御惣毛御延見御礼諸入料寛永代御礼分

酉ノ十月四日

一 壹〆五百三拾三文

同

一 八百拾八文 諸懸り分

但シ其時次第

〆式〆三百五拾壹文

右四人割

上野源之丞殿 奎

松倉三右衛門殿

嘉永元年申三月廿五日

質物渡世之者共式拾五両壹歩之利足ニ而は間ニ合兼候
ニ付、天保十四年金高多少ヲ以分段被成下、金拾両以
下は壹ヶ月拾両ニ付壹歩、式拾両以下は拾五両ニ付壹
歩、三拾両以下式拾両ニ付壹歩、其余々被相定候通式
拾五両壹歩之利足ニ被成下、残貸之分は百文ニ付三文

之利足ニ被成下候方ト各先役共吟味被申聞、当分質物
限り吟味之通被成下候旨申渡置候処、其後年数も相立
無際限是迄之通利場可被指置様無之、扱亦被相定候通
之利足ニ而は質屋渡世之者共及迷惑ニ候事ニ相聞得候
間、当分取ニ拾五両壹歩之利足ヲ以取引候様可被申渡
候、乍然金高五拾両以上貸渡分は金高多ク候間相定之
通式拾五両壹歩之利足ヲ以取引候様首尾可有之候、同
役中令吟味如此候、已上

川崎御地頭様大手先え土手築方被遊候ニ付御知行御百
姓共手前え御割分相成候所、仁右衛門義は御小性通ニ
而村地肝入之支配ニ無之候段申上候、御役人手前より
御手伝之義被仰渡候ハ、御手伝申上候趣ニ申上候得は
其義ニ而御役人様手前より被仰遣候間、一ツ前六百文
御手伝仕上候事、次ニ御蔵入御百姓善右衛門えも村地
肝入十蔵方より同様首尾合有之候ニ付、御蔵入之者え
御地頭様地肝入支配ニ無之候間、首尾合ニ而は相出可
申様無之御役人様より御手伝之義ニ被仰渡候ハ、御近
所ニ住居候者ニ有之候間、御手伝之義ニ候ハ、可相勤
申段ニ地肝入方え申進候得共、如斯ニ而手伝呉候様之

趣ニ而代六百文相納候、末々共ニ如斯え引合可申候様
可被成候事

嘉永五壬子年三月廿八日ニ相納

嘉永五壬子年七月

山神様御屋ね替ニ付入料扣置

一 五拾人 ふき方并ニ足代懸

かやね切ぢ立廻り迄

此金七切壹分四り貳毛

代相場壹〆五百文直し

金七切ト貳百十三文

一 壹人 御堂手入方

此代貳百拾四文

一 麻壹〆五百目

此金三朱也

一 百七拾六文 ■■■ 肴代

右ハふき仕舞ニ付酒肴拵方

〆 七切三朱ト

六百三文

五つ割壹人分

壹歩貳朱ト

百九拾六文ツ、

一 飯米 五斗

一 味噌 七升

一 しの竹 三丸

一 縄 貳千尋

薬師堂指かや諸入料左之通

一 正三切貳朱ト

代百七文 工役廿五人

一 白米貳斗五升飯料

一 酒三升半

右ハ壹人ニ半分ツ、相用候分

一 酒貳升 ぐしな

一 八十文 まき餅

一 百文 肴代

一 九文 紙三枚

一 六十文 畳糸

✂ 米貳十五升

酒五升半

右ハ御初尾代ニ而喜右衛門殿方

ニ而相出申候事

金三切貳朱ト

代三百五拾六文

五割壹人分

金粉七分

代七拾壹文ツ、

直し

金貳朱ト

代三百七拾壹文ツ、

外白米五升ツ、

縄百廿尋ツ、

一 すくろかや 五尺丸貳百包^(カ)

✂

右ハ五間ニ而割合出ニ左之通

一 五寸 ✂ 三枚 喜右衛門寄進

一 拾五分板半間 七兵衛寄進

一 三寸五分六寸取合三拾四五本 七兵衛喜右衛門

寄進

右之通ニ相懸候間追年心扣ニ如斯相印置

同年七月七日勘定致候事

御金山拾五品懸

金須敬助様并下代鈴木与八郎殿嘉永五年壬子十一月

廻村被成置、温泉場一統湯銭并ニ損料物等直上直下

之義被仰渡候ニ付書上如此

苅田郡沢内村之内遠刈田湯守方より湯銭并損料物等直

上被仰渡候ニ付、御郡方為御承知御披露書扣

口上之覚

御金山御役人主立金須敬助様御事当十一月中御見湯相

成、御領分中温泉場一統湯銭損料物等来正月より直上

ヲ以甲乙無之様取立可仕御首尾之趣奉承知候、為御承

知左ニ申上候

一 湯錢老夜拾文ツ、老廻り七拾文取立候様被仰付候

但し是迄老廻り四拾文之所三拾文直上

一 大布団老ツ 貳拾三文

但し是迄貳拾文之所三文直上

一 小布団老ツ 拾三文

但し是迄拾文之所三文直上

右之通御分領中温泉場一統甲乙無之様可仕御首尾合御座候間、依而右之段御披露申上候、已上

遠刈田湯守

勘十郎

嘉永五年十二月

肝入

直治殿

右之通湯錢并損料物等直上可仕被仰渡候段申出候ニ付、右之段如此申上候、已上

刈田郡沢内村

肝入 直治

同年同月

大肝入

阿部傳右衛門殿

口上書

御金山御役人主立金須敬助様御事、当二月中御廻湯被成御分領中温泉場一統湯錢并損料物等来正月より直上ヲ以甲乙無之様取立可仕御首尾合之趣奉承知候、為御承知左ニ申上候

一 湯錢老夜拾文ツ、老廻り七拾文取立候様被仰付候

但し是迄老廻り三拾文之所四拾文直上ケ

一 大布団老ツ 貳拾三文

但し是迄貳拾文之所三文直上ケ

一 小布団老ツ 拾三文

但し拾文之所三文直上ケ

右之通御分領中温泉場老統甲乙無之様可仕御首尾合御座候ニ付、右之段御披露申上置候

鎌先永湯守

市兵衛

嘉永五年

十二月

肝入

定右衛門殿

右之通湯錢并損料物等直上可仕被仰渡候段申出候ニ付
如此申上候、已上

刈田郡藏元村肝入

定右衛門

同年同月

大肝入

阿部傳右衛門殿

一 御金山御役人主立金須敬助様御事、当十一月中温
泉場御廻村之砌湯錢并損料物等一統ニ来正月より
直上ヲ以甲乙無之様取立可仕様御首尾合之趣奉承
知為御承知之左ニ申上候

一 湯錢壹夜拾文ツ、壹廻り七拾文取立候様被仰付候

但し是迄壹夜五文壹廻り込も同数ニ有之候処、

壹夜ニ而五文ツ、直上ケ

一 大布団壹ツ 貳拾三文

但し是迄貳拾文之所三文直上ケ

一 小布団壹ツ 拾三文

但し是迄拾文之所三文直上ケ

右之通御分領中温泉場一統甲乙無之様可仕御首尾合ニ
御聞候間、依而右之段御披露申上候、已上

下小原湯守

太郎兵衛

嘉永五年

十二月

肝入

寅治殿

右之通湯錢并損料物等直上可仕被仰渡候段申出候ニ付
右之段如此申上候、已上

刈田郡小原村之内

下小原肝入

寅治

同年同月

大肝入

阿部傳右衛門殿

御金山下代鈴木与八郎殿鎌先湯守宅ニ而御用向扣

口上覚

柴田郡前川村之内青根温泉場ニ付御村方へ拙者義手当振之義如何様仕候哉其段申上候様被仰渡承知仕候、先年より壹ヶ年代貳拾貫文宛補候相渡申置候、此段申上候、已上

口上覚

柴田郡前川村之内青根温泉場湯錢并損料物代直下ヶ之義大肝入衆より弘化弍年中被仰渡候義申上候、湯錢并損料物之義直下不仕候間仍而右之段申上候、已上

口上覚

- 一 壹夜ニ付 代拾貳文取立
- 一 三夜ニ付 代四拾文取立
- 一 残四晚分 無錢

柴田郡前川村之内青根温泉場湯錢取立候義去冬中御廻村之節御聞届ヶ被成候ニ付、其節口上書差上不申候ニ付此度取調左ニ申上候事

嘉永六年

三月廿四日

写

開発願書御下知

壹卷写

乍恐奉願上候御事

- 一 名号出湯壹ヶ所

此御運上代五百文

但し右は湯場御敷地之内ニ御座候事

- 一 新出湯壹ヶ所

此御運代(上ノカ)五百文

但し右は嶽山御林之内日当山湯神平御林之沢間ニ御座候所、屋敷地之内え懸樋ヲ以引方仕湯家作仕度奉存候間、湯口より弍丁半程御林之沢筋通相廻

シ候様仕度奉存候、毛上之障り一円無御座候事

右之通壹ヶ年御運上代壹ヶ所ニ付代五百文宛ヲ以当丑ノ年より向五ヶ年新規開発御免被成下度奉願上候、御年限中盛湯ニも罷成候ハ、春秋御廻村之節増御運上被仰渡候共異儀申上間敷候、無御異儀被仰渡候ハ、御山例御請狀奉指上候、仍而請合連名ヲ以如此奉願上候、

已上

嘉永六年丑ノ正月

柴田郡前川村之内青根
御湯守御山守開発願人
仁右衛門

同

開発願人

善右衛門

同郡同村之内川崎町

検断請合人

仲三郎

同村組頭

市之助

同村肝入

久七

大肝入

大沼十郎左衛門殿

御金山下役

鈴木与八郎殿

右之通壹ヶ年御運上代壹ヶ所ニ付五百文宛ヲ以当丑ノ
年より末五ヶ年請負願申出候間吟味仕候所、新規取立
之義も有之相当ニ御座候間被相免候方と吟味仕候、
追々盛湯にも相成候ハ、御年限中ニ而も増御運上之義
廻村見分之上首尾可仕候、無御異儀被仰渡候ハ、御山
例受状為指出候様可仕候、仍而右之段申上候、已上

御金山下代

鈴木与八郎

嘉永六年

二月

大肝入

大沼十郎左衛門

御代官

黒澤仁右衛門様

御本々

太田熊蔵様

御主立

高橋利三郎様

右之通大肝入大沼十郎左衛門等申出当吟味仕候処、右
出湯之義は係り御金山下代廻村見分仕候由ニ御座候所、

早速盛湯之見詰も無之試同様之取開ニ有之御役増可被為△

写

喜右衛門屋敷ゆつり替仕候に付内々右地形え立合相請候事、村役付肝入久治殿、組頭市之助殿、当屋敷組合七兵衛、喜右衛門、仁右衛門、善右衛門、十太郎妻、都合七人引揃境具為うち形仕候

天保九年七月九日

(付紙)

喜右衛門屋敷ゆつり替仕候に付内々右地形へ立合相請候事、村役付肝入久治殿、組頭市之介殿、当屋敷組合七兵衛、喜右衛門、仁右衛門、善右衛門、十太郎妻りん都合七人引揃境具為うちかた仕候

天保九年七月九日

(前「△」の続きか)

仕候様無御座此度願出候之趣無異儀訳ニ相見得申候間、

老ヶ所代五百文宛ヲ以忒ヶ所取合老貫文ニハ当丑ノ年より末五ヶ年被任下候方と吟味仕、村方并御林之内に付而ハ山林方えも取合申候処、指支無之段別紙之通申聞候間無御異儀候ハ、御郡奉行并御金山方係り両替所御役人連名被仰渡候様仕度御代官并山林方より之例紙忒通指添此段相達申候、已上

十二月

太田熊藏

金須敬助

鈴木勇右衛門

猶以御願指支有無之義御代官黒沢仁右衛門え取合之处、右紙面大肝入手代紛失仕候に付右紙面ハ相添不申右之趣大肝入申出御代官申聞候紙面指添相達申候、且当年分御運上之義は年半途ニ御座候得共丸役上納仕候段湯守係り御金山下代手前え申出候段右役直々申聞候間、丸役被召上候方と吟味仕此段も相達申候、已上

御聞判

同判

久馬

十四日

御郡奉行衆

御金山方係り

両替所本々衆

役人衆

御金山方主立役人衆

太田熊藏様

大友運三郎

鈴木勇右衛門様

平大三郎

千葉幸右衛門

左之通被仰聞候処承知、場所柄見分吟味致趣別而毛上等え指障り相成候訳ニも不相見得指支有之間敷と致御吟味之間、右之趣ヲ以夫々御吟味可相成此段申達候、已上

十二月五日

太田熊藏

大友運三郎様

鈴木勇右衛門

柴田郡前川村之内青根湯守仁右衛門等此度新規取立之義ニ付、別紙之通願申出御林之内式丁半程懸樋ニ而相通毛上等え之障ニは相成不申様ニは相見得候得共、山林方御指支有之間敷哉御取合候間否被仰聞度候、已上

六月廿日

柴田郡前川村之内青根新湯等開発願別紙之通御連名被仰渡候ニ付指出し申候御首尾合後被相戻候様仕度相達申候、已上

十二月廿二日

鈴木勇右衛門

金須敬助

太田熊藏

中地多利之丞様

中地多利之丞判

同廿三日

御代官衆

御金山本々衆

御役人衆

如斯御郡奉行衆被仰聞候、其心得首尾如斯被指戻候事

黒沢仁右衛門

十二月廿四日

大肝入

大沼十郎左衛門殿

柴田郡前川村之内青根名号出湯并新湯共ニ式ヶ所壹ヶ年壹々文宛之御運上ヲ以年数被相免御下知卷首尾合之

上返上仕候、已上

大肝入

大沼十郎左衛門

正月廿日

仁右衛門様

左之通柴田北方大肝入申出候間首尾合之上相廻し申候、已上

黒沢仁右衛門

正月廿一日

太田熊蔵様

金須敬助様

鈴木勇右衛門様

左之通御代官申聞候間相廻申候、已上

正月廿二日

金須敬助

鈴木勇右衛門様

太田熊蔵

左之通申来候ニ付御廻し致候間御首尾合後被相戻候様仕度此段申遣候、已上

正月廿五日

河東田善之進様 鈴木勇右衛門

左之通被仰聞度悉首尾合之上致返却申候、已上

正月廿八日

鈴木勇右衛門様 河東田善之進

左之通係り御郡ニは無之候得共手元取都御用ニ付為心得之相廻し候条首尾合之上柴田郡係り下代堀江要之助え直々相廻し可申候、已上

御金山下代

鈴木与八郎殿 鈴木勇右衛門

柴田郡前川村之内青根新湯取立之義ニ付願指出し御金山様より御取合ニ罷成候処、右願え肝入組頭出判無之候ニ付出判之上為指出可指上旨委細被仰渡承知仕出判之上為指出指上申候間御首尾被成下度奉存候、且又右被仰渡候節御金山様方より御取合之御紙面も被相渡候所、右御紙面手代共如何様取紛候哉見出兼全体鹿末之方より右様取紛も罷成不引合之義は何共可申上様無御座、折入不申不念至極之段手代共直々口上ニ而申聞候間、此度之義ハ無御吟味被成下度、以来之義ハ拙者手前ニ而申含置候様被成下度此段如斯申上候、已上

大肝入

大沼十郎左衛門

四月廿二日

仁右衛門様

柴田郡前川村之内青根新湯開発被成下度由村方願申出候ニ付、御願指支有無吟味可申達由被仰聞趣致承知村御願ニ指支候筋無御座候間右之趣御吟味可被成願指添此段申達候、已上

四月廿三日

太田熊蔵様

黒沢仁右衛門

鈴木勇右衛門様

猶以相廻候林方願ニ肝入組頭出判無之義ニ付別紙之通大肝入え申渡出判致上指出之所、其節御不合御紙面如何様相紛候哉見出兼候段別紙之通申出手代之者共不引合之義御座候、猶御吟味相成度申出候紙面指添申達候、且右出湯之内壺ヶ所御林之内懸樋ヲ以御通候得共、毛上にハ障りも無之由ニ候得共御林之義ニ御座候得は山林方えも御折合罷成候訳ト奉存候得共此段申達候、已上

写

一 其扱青根温泉之御運上代九拾貫ヲ以安政二年より末三ヶ年御年数ヲ以仁右衛門え被相任度願申聞相達候所、無御異儀御下知被相渡候間其心得首尾可被申此段申渡候、已上

大肝入

大沼十郎左衛門

卯ノ三月朔日

肝入

久七殿

- 一 当所喜右衛門義先年より目印之義ハ二ツ山ニ丸之事ニ御座候、当安政二年卯之七月より懸行燈え本のづ相印申候間追々之ため手扣仕候事
- 一 当所重右衛門義大瀧の上え見世相立候義ハ当安政二年七月新キ相立申候、追々之ため手扣仕候事
- 一 安政四年巳五月五日当所え大ゆきふりゆきの高サ壺尺ほと相ちもり申候
- 一 当所前大湯両脇惡水拔方安政二卯五月中相始
- 一 土堀方人足 長サ貳拾壺間

幅 三尺

此人足貳拾壹人

一片名出ス人足 長サ六拾三間

幅 三尺

此人足六拾三人

二口合人足八拾四人

金壹歩ニ付六人之割

一金拾四切

一 飯米壹石四斗

一 味噌七匁目

右割合之義ハ如斯

乍恐奉願上候御事

柴田郡前川村之内

青根御湯守

仁右衛門

一 拙者義同所温泉御運上代壹ヶ年九拾匁文ヲ以当午

ノ年より向三ヶ年申ノ年迄請負被任下置度奉願上候、万一御運上代指滞候ハ、請合方ニて聊も不指

滞上納可申上候、前書之通右同人え御請負被任下置度奉願上候、無御異儀被仰渡候ハ、御山例御受状奉指上候、仍而請合連名ヲ以如斯奉願上候、已上

柴田郡前川村之内青根

御湯守 仁右衛門

安政五年四月

同 同

組頭 伊平

川崎町検断

御運上請合人 仲三郎

同 同

肝入 久七

大肝入

大沼十郎左衛門殿

御金山下代

庄子平七殿

右之通壹ヶ年御運上代九拾匁文宛ヲ以当午ノ年より末三ヶ年受繼願申出尚御運上増之義吟味仕候所、当分是

迄之通代高ヲ以被任下度品々申出、追々盛湯且ハ広渡
世ニも相捌候ハ、御年限中ニも御運上増之義は拙者共
願手前ニ吟味首尾仕候間被相任候方ト吟味仕候条、無
御異儀被仰渡候ハ、御山例之御受状為指出候様可仕仍
而右之段申上候、已上

御金山下代

安政五年

庄子平七

四月

大肝入

大沼十郎左衛門

御金山御本_メ主立

與一樣

同

惣太郎様

乍恐奉願上候御事

一 名号出湯_壺ヶ所

此御運上代五百文

一新出湯_壺ヶ所

此御運上代五百文

右之通_壺ヶ年御運上代_壺ヶ所ニ付五百文ツ、ヲ以去ル
子ノ年より末巳ノ年迄五ヶ年請負被任下置候処、御年
数明ニ罷成申候間、又以当午ノ年より向五ヶ年前書代
高ヲ以受負被任下置候様御吟味被成下度奉願上候、御
運上増之義ハ段々被仰渡置候義ニ御座候得共、近年不
盛ニて増御運^(上_メ欠_カ)及兼申候間如斯之御吟味被成下度奉願
上候、且御運上代上納之砌指滞候ハ、請合弁納仕申上
候条無御異議被仰渡候ハ、御山例御受状可指上拙者共
連名ニて如斯奉願上候、已上

柴田郡前川村之内青根

開発御湯守

安政五年四月

仁右衛門

組頭

伊平

川崎町検断

御運上代受合人

仲三郎

肝入

久七

大肝入

大沼十郎左衛門殿

御金山下代

庄子平七殿

右之通壺ヶ年御運上代壺ヶ所ニ付五百文宛ヲ以当午ノ年より末五ヶ年受継願申出尚御運上之義も吟味仕候所、格別盛湯ニも罷成不申当分是迄之御運上代ヲ以被任下度品々申出追々盛湯ニも罷成候ハ、御運上増之義は拙者共願手前ニ吟味首尾可仕候間、被相任候方ト吟味仕候条無御異儀被仰渡候ハ、御山例之御受状為指出候様可仕、仍而右之段申上候、已上

御金山下代

庄子平七

安政五年

四月

大肝入

大沼十郎左衛門

與一様

惣太郎様

柴田郡前川村之内青根温泉是迄之運上代九拾〆文ヲ以

湯守仁右衛門義当午ノ年より末三ヶ年は迄通受負被相任度由之事

一 同郡右温泉之内名号之湯并新湯是迄之運上代五百文ツ、ヲ以当年より五ヶ年湯守仁右衛門義受負被相免候様被成下度由之事

右之通願出別紙末書之通大肝入等申出候処、当分是迄之上運上代ヲ以被相任度由之趣委曲申出候通之義ニて無余義訳ニ相見得候間無御異儀候、如願之御下知罷成御郡奉行并御金山方係り両替所御役人連名被仰渡候様仕度願指添此段相達申候、已上

水科與一

午ノ四月

曾根惣太郎

五月朔日判

兵衛方

御郡奉行衆

御金山方係り

両替所本〆衆

御役人衆

御金山方主立役人衆

柴田郡前川村之内青根温泉受継御下知別紙之通被相渡候間其心得首尾可有之候、已上

門正左衛門

午ノ九月十日

大肝入

大沼十郎左衛門殿

首尾有之可被指戻候事

大肝入

大沼十郎左衛門

九月十一日

肝入

久七殿

安政四丁巳三月

中井新三郎ト申者改正手形金壹切ト忒朱手形当所ニ而

真田喜平治様御入湯ニ御出被遊候節初而請取申候

右改正手形下略相成御城下表正金壹歩え忒朱手形式拾枚取引相成候事安政七申二月頃当所ニ而ハ忒朱手形壹枚代百文預り南方温泉場御湯守共吟味仕候事

写

右之通被仰渡候間当春御役々様御廻村之節御直々被仰談候御儀は私■戴主ニ罷成湯守仁右衛門方へ忒宇被為相任候様被仰談、此度御修覆仕御大士御曆々様御宿申上■共被仰渡各手元ニ而御殿之義は此末修覆仕自由可致、仍而忒札如斯申渡候、已上

肝入

久七判

安政五牛年

十二月

御湯守

御殿より

仁右衛門殿

乍恐奉願上候御事

柴田郡前川村之内青根

此日料代金五切ト

御殿年来不御用立候付而ハ連々大破ニ相成居去秋

貳百廿三文

中御屋根替ハ被成下候得共壁ハ勿論線板并戸障子

一金壹歩貳朱ト 釘酒肴

等迄大損ニ相成、御手入も不被成下候而ハ弥増大

一 六百三拾四文

破ニ仕候義ニ御座候間尚吟味仕候所、年来不御用

一金九切ト 板之方

立ニ罷成居候義ヲ年々御手入ニ相成候而ハ不少之

一 七拾八文

御物多も如何ト奉存、御内々も申上置候通同所湯

メ金拾六切ト

守御役銭受負人仁右衛門え被下置候様被成下度奉

百五拾五文

存候、御届之間之儀ハ右同人手前ニ而修覆仕候之

一 白米三斗六升 大工飯米

上圀置迫而御出馬之節ハ御用立候様被成下度、其

一 右ヲ三人五分ニ割

外共自分入料ヲ以手入仕御諸士様等御入湯之節ハ

一 右ヲ三人五分ニ割

相用度御届候間、御指支も無御座候ハ、右同人え

一 右人前壹斗貳合八夕五勺

被下置候様御吟味被成下度奉存候、且又右同所之

一 味噌壹メ八百目

義ハ嶽山下ニ而大雪相■年々雪開等

一 右ヲ三人五分ニ割

一 右人前五百拾四匁也

○

但し重右衛門義ハ半人之割ヲ以如此

安政六未七月前之井と新規立方大工并諸入料割合

一 白米五升壹合四夕三勺

左之通

一 味噌貳百五拾七匁也

一 三拾六人

大工働キ

安政六未七月廿五日大嵐有之、又以八月十二日大嵐ニ付屋形様江戸御上府二日通用留ニ付延引罷成候事

柴田郡前川村青根

御湯守乍恐奉願上候御事

拙者共居屋敷且持高之内より出湯先年より御湯守梭仰付段々請負被任下難有湯場盛湯湯治人宿渡世仕罷有、忝人忝夜湯錢拾文木錢五拾文都合六拾文宛ヲ以家作屋根普請都而破損畳表替等春秋手入其外家具等之義年々仕次ニ罷成、尚薪木等之義ハ近年近山林伐尽遠山より牛駄送又ハ人足等ニて運送仕候得は引着高直ニ罷成、且ハ諸品高直ニ候所、右之木錢ニ而ハ間ニ合不申存分湯治人取拵も相及兼年増湯治人不足弥々難渋指迫り申候間、御別段之御吟味ヲ以当年より木錢拾文増ニ被成下置都合七拾文宛ヲ以湯治人宿仕御湯守相続仕候様御憐愍之御吟味ヲ以如願之御下知被成下置候得は居家破損修覆并ニ諸家材共ニ何様ニか指砥全備湯治人え

不自由懸上不申様念入取拵仕候ハ、自然湯治人入込盛湯ニも罷成追々諸品下直ニ可罷成候間、其節ハ時宜之御吟味被成下是迄之通木錢ヲ以宿仕候而も仕当ニ間ニ合申候見詰ニ無御座候間、御別段之御吟味ヲ以当分如願之被増下御湯守永続仕候様御吟味被成下度、不顧御用多も拙者共連名ヲ以奉願上候、以上

青根開発請負人

御湯守

仁右衛門

安政七申年

正月

肝入

久七殿

右之通木錢直揚被成下度願申出候間拙者共手前ニ而も吟味仕候所、前書申上候通万物高直之義は御見聞被成下候通御届候間、如願之拾文直揚御吟味被仰渡候様被成下度此段申上候、已上

同郡前川村肝入

久七

同年同月

大肝入

大沼十郎左衛門殿

御金山下代

伊藤宗五郎殿

別紙之通南方御郡温泉守共并ニ黒川郡臺ヶ森湯守等願
申出候ニ付拙者共廻村仕直々も承り届吟味仕候所、近
年湯治人不足誠ニ此節諸品無類之高直ニ相成是迄之通
之湯錢木錢ニ而ハ万事首尾合不申前義申聞候間無余義
訳ニ相見得申候間、老々夜ニ付木錢拾文被増下取合
七拾文宛請取湯守相続仕候様被成下方ト吟味仕候、尤
諸品高直之義ハ勿論炭薪木等迄近山伐尽し遠山より牛
駄送或は人足等ニて運送仕自然為夫ヶ是等迄も高直ニ
相成候前ニ相聞得申候、万事以前え対し候得ハ既二三
増倍位之懸増ニ相聞得、夫故自然湯治人取扱等諸事相
続向行届兼候前ニ相見得申候間、湯守共一統引続ニ罷
成候様御吟味被成下度候、且追々諸品下直ニ相成候ハ

、是迄之通則直下ヶ之吟味仕候間、且去年中玉造御郡
湯守共一統願申上無御異儀旨御下知被仰渡候通有之候
間、此度迎も同様之訳ニ御座候間右えも御取合御吟味
被成下湯守共如願之被仰渡候様被成下度拙者共連名ヲ
以如此相達申候、以上

御金山下代

伊藤宗五郎

閏三月廿四日

黒川郡大肝入

遠藤周右衛門

国分 大肝入

武田幸治

名取南方大肝入

佐藤輕治

柴田郡大肝入

大沼十郎左衛門

名取郡秋保村温泉湯守筆頭別紙拾通之通湯錢木賃被増
下度由之義ニ付願申出御金山下代申聞候間吟味仕候処、
玉造御郡大口村始両村湯守共湯錢拾文木賃五拾文え拾

文相増都合七拾文之高ニ直揚被成下度由ニ品々願申出
順々御郡奉行相達一卷吟味被相渡、尤十二月中申達別
紙之通御指図不成罷候通ニ御座候処、右温泉湯守共申
候も此節柄諸品高直ニ付此迄之振合ヲ以湯錢等受取候
而ハ兎ニ角間ニ合兼候趣無余儀訳ニ相見得実事御首尾
合兼可仕進物付可申様へ無御座候間、猶又拙者共手前
ニても廻村折入見聞仕候処間ニ合兼候義は実事無余儀
訳ニ相見得如願之一々別ニも不記御分領中温泉湯守共
一統湯錢等直揚被成下、湯治人共猶又出精為取扱候様
被成下、追々諸事下直ニも可成品ニハ不打止急直下之
義吟味御首尾可仕候間、当分如斯ヲ以大口村等同様直
揚之義御吟味被成被仰渡候様仕度別紙御念卷等指添此
段相達申候、以上

曾根惣太郎

四月

三日

油井順之助

右之通御金山方本_レ等被申聞令承知無異儀候間、御勘
定奉行えも申儀候条各其御心得首尾可有之候、以上

四月

中寛之丞

廿一日

熊谷齋殿

曾根惣太郎殿

油井順之助殿

別紙之通御下知被仰渡候間、為心得之相渡候条首尾合
渡無延引可被指戻候、以上

御金山下代

伊藤宗五郎

六月廿六日

青根湯守

仁右衛門殿

○（前○からの続き）

不仕難成事ニ而右御入料金貳両宛一昨年迄被下置候得
共昨年より御吟味之上一円不被下置年増大破ニ罷成申
候間、御取合御吟味被成下度拙者共連名ヲ以如此奉願
上候、已上

青根湯守御役錢

受負人

仁右衛門

安政五年

四月

同 組頭

伊 平

同 肝入

久 七

大肝入

大沼十郎左衛門殿

丸永講中一ノ鳥居前え石燈籠奉納ニ付油料預り金之寛

一金壺切三朱ト

嘉永

貳百文

一 御手形三拾切也

安政六己未年

七月十九日預り

一 当村肝入久七殿え一札指出之扣此度拙者義御金山

方へ致献金候上永湯守被相免候而も御村方えハ是

迄之通年々代貳拾文宛をきない之義は道橋手入、一

一

湯坪石之方

長サ内行程三間半

文久二壬戌年六月中大湯新規建方入料

且ハ御役人様方御廻村之節歩伝馬歩卯時相勤候義

ニ付右代遣し申候、但し其年ニもより湯治人不足

家内相続等も六ツケ敷節ニハ右代可遣様無御座候

処、御上様より御領分中温泉場一統掟も被為有候

義奉承知候処、湯治人え諸品売払候者拙者方ニ而

如何様之品成共直段之義高下無之様売人え申渡候

条、万一心得違之者有之候節は於拙者指支申候間、

且ハ湯治人宿屋之者成共是迄之通御座候、諸御役

人様方御廻村え止宿之義ハ先年之通面々順達ヲ以

御宿申上、御宿歩卯時之義ニ付異儀申者於有之ハ

御役々様へ御伺之上御山例掟之通り為仕候、仍而

一札如件

青根開発永湯守

元治元子九月

仁右衛門

肝入

久七殿

此渡金八両也

横二間

一 金貳朱也

石屋方へ祝儀遣し

一 金五切半ト

湯坪内壱尺高サ

三百四十文

土はこひ人足

一 金九切半ト

湯坪両脇石かき共二人足代

一 貳百文

本山方湯材木取方分

一 金五切三朱ト

木挽方栗板杉板引方分

一 貳百廿壹文

大工方日料代分

一 金三拾切三朱ト

三百七十貳文

一 金七切半也

釘之方

一 金五寸

並六寸並五寸

一 同三寸五分貳寸五分

祝儀方

一 金壹両也

祝儀方

一 金九拾六切ト

三百三十三文

此外貫板大工木挽伐木出し人足本山分飯米致相候事

一 此度拙者義御金山方へ致献金候上永湯守被相免候

一 肝入衆へ遣置扣之事

一 此度拙者義御金山方へ致献金候上永湯守被相免候

一 此度拙者義御金山方へ致献金候上永湯守被相免候

元来湯坪之義ハ板敷ニ有之候処、此度新規建方ニ付追
年為心得之如斯相印申候事

文久二壬戌年

一 世見一統之麻疹ニ付温泉場大不作常年之半高も参
詣并入湯人無之候事七月下旬より一円ト申程無御
座候事

座候事

元治元甲子年八月より写

一 湯錢木賃拾文被増下候事ニ被仰渡候間、右之趣ヲ
以取立候様可有之候事

御金山下代

伊藤宗五郎

子ノ八月二日

仁右衛門殿

勘十郎殿

肝入衆へ遣置扣之事

此度拙者義御金山方へ致献金候上永湯守被相免候

一 此度拙者義御金山方へ致献金候上永湯守被相免候

一 此度拙者義御金山方へ致献金候上永湯守被相免候

而も御村方えハ是迄之通年々代式拾〆文宛補錢之義ハ道橋手入、且ハ御役人様方御廻村之節歩伝馬歩卯時相勤候義ニ付右代遣し申候、但し其年ニもより湯治人不足家内相続等も六ヶ敷節ニハ右代可遣様無御座候所、御上様より御分領中温泉場一統掟も被為有候義奉承知候所、湯治人え諸品売払候者拙者方ニて如何様之品成共直段之義高下無之様売人え申渡候条万一心得違之者有之候節ニハ拙者方ニおゐて指支申候間、且ハ湯治人宿屋之者成共是迄之通ニ御座候、且御諸役人様方御廻村御止宿之義ハ先年之通り面々順達ヲ以御宿申上候、御宿歩卯時之義ニ付異義申者於有之ハ御役々様え御伺之上御山例掟之通為被仕候様、仍而一札如件

永湯守 仁右衛門

元治元甲子年

九月

同村肝入

久七殿

一

御分領中御湯守共一統登仙之上追願申上候事

拙者共先年より御湯守御受負被任下難有精道罷在候所、去冬より願申上候通湯治人宿仕老人老夜泊り御湯せん拾文木せん七拾文取合八十文ツ、受取、鍋釜膳椀回土瓶茶碗酒道具炭薪木油等都而入湯中入用之諸道具諸品ニ望次第不自由無之様取揃貸渡入湯為仕候事ニ御座候所、近年湯治人も不足ニ罷成諸品年增高直ニ付去々年中品々願申上木せん代拾文被増下、當時之湯せん木せん取合八拾文受取上湯ニ首尾合和申候所、去冬申上候節よりも陳重高直ニ罷成其節米壺升百三十文渡候之所、當時分罷成式百文已上表呉座金壺切ニ付式枚式分渡之所、老枚八分と直揚縁布老反三〆文之所四〆文已上障子紙張百枚ニ付代四百文之所四百六十文、其他鍋釜膳わん等去年迄壺〆文之所壺〆五六百文直揚ニ罷成、炭薪木之義段々伐つくし誠ニ払底遠方より牛馬駄送御座候所、前文之通米穀高直ニ付尚更直増諸職人并召使候者諸役金も別而同断高直ニ相成候迎も首尾合兼、尤他領より温泉ハ等ニて木錢取

立ふり之義承り候得共、一日一夜之木せん代三百
 文位受取候由相聞得、左候上ハ乍恐亦以此度奉願
 義に御座候間、老夜泊り老人より百六十文ツ、受
 取候様御吟味被成下度義も恐入奉遠慮候事ニ御座
 候得共、拙者共手前ニて仕入之諸品已前之直段ト
 此節之直段ト引競候得共、三増位已上之直揚是迄
 之木せん代八十文ニてハ首尾合兼候中ニも須川嶽
 湯之倉温泉場之義ハ秋田境ト申内丸ニ他領同様之
 場所へ御座候得は、此度奉願木せん代百六十文ニ
 ても首尾合兼御座候得共、是ハ仲間之御いたみ候
 分ニ吟味仕右木せん代ニてハ誠ニ首尾合兼候間、
 先願書へ御取合御吟味被成下度奉願上候、各様御
 吟味不被成候而ハ御湯守相続之見詰も無御座御分
 領中御湯守一統登仙之上奉歎願候間、御憐愍之御
 吟味ヲ以早速御下知被成下度拙者共連名ヲ以如斯
 奉願上候、已上

星湯 庄右衛門
 同 孫右衛門
 川原新湯 平 蔵

同 さと
 川原 覚兵衛
 渡場 源 蔵
 同 善四郎
 同 勘左衛門
 ■■■新湯守
 松本仁左衛門
 菅原覚治郎
 同 与右衛門
 同 忠 蔵
 赤湯 平 六
 同 萬五郎
 同 勘 七
 同 新 助
 わし湯 惣左衛門
 真坂目湯 吉郎右衛門
 川度湯守 平右衛門
 荒湯 戸左衛門
 寒風沢 久三郎
 とろろき

同 伊兵衛

宮澤 為左衛門

東山 用之助

湯の倉 専蔵

須川 彦太夫

上下 要之助

作並 伊三郎

同 喜蔵

秋保 寿右衛門

小原 太郎兵衛

鎌先 市兵衛

遠刈田 源兵衛

同 勘十郎

青根 仁右衛門

屋形様

御入湯被 遊候ニ付名号之湯新規建方仕候事、右大工柴田郡棟梁大川原喜吉ト申者也

大湯之儀ハ内通御上湯計修覆仕上候事

一 御門并御席下之義ハ御上之方ニ而御出来向ニ御座候事

写

柴田郡前川村之内

青根湯守

善兵衛

御金山方え金百両指上御時節柄を勘弁深切奇特之事ニ候、依之青根温泉永湯守ニ被成下旨被 仰出候事

元治元年

子ノ十二月

右之被仰渡候義ハ御代官北二番丁杵山通新妻芙記様御宅ニ而御願宿菊地平三郎殿同道ニて右御書附請取申上候事

一 別家新宅普請致候事

元治元子年六月

元治二乙丑年正月

乍恐口上書ヲ以左ニ奉願上候御事

一
屋形様来月廿日

御出馬青根

御入湯被為 遊旨被仰渡候処、同所御殿并引続拙者自分長屋等古損事候所自分入料ヲ以修覆仕指上申度奉存候間如願之御吟味被成下度候、無御異儀御座候ハ、御日合も無御座候間、急速御下知被成下度如斯ニ申上候、已上

柴田郡前川村之内

青根湯守

元治二年

善兵衛

正月廿八日

肝入

久七殿

右之通申出候間、急速御吟味御下知被成下度申上候、已上

肝入

同年

久七

同月

大肝入

大沼十郎左衛門殿

写

柴田郡前川村之内青根御入湯ニ付同所御殿等修覆湯守善兵衛自分入料ヲ以仕上度旨願申出別而被申聞相達候所、如願之被成下旨御奉行衆被仰渡順々御郡奉行衆被仰聞候条、其心得首尾有之追而入料かゝり高取調可被申聞候、已上

柴田吾一

丑ノ三月七日

大肝入

大沼十郎左衛門殿

御書面之趣ヲ以首尾有之入料懸高取調遊而可被申聞候事

大肝入

大沼十郎左衛門

三月十二日

肝入

久七殿

柴田郡前川村之内

青根百姓湯守

善兵衛

喜右衛門

七兵衛

十右衛門

右四人之者共来ル十二日青根御入湯之先え同所温泉場

御入口え袴羽織ニ而罷出居

御目見被 仰付候条其心得首尾可有之候、各之趣御郡

奉行衆え相達候上如斯候、已上

柴田吾一

丑ノ三月七日

大肝入

大沼十郎左衛門殿

首尾在之可被指戻候事

大肝入

大沼十郎左衛門

三月十二日

肝入

久七殿

永湯守

善兵衛

此度

御入湯ニ付御旅館并諸役所ニ居家御用立候付御金千疋被下置候事

永湯守

善兵衛

先年名号之湯修覆仕候付思召ヲ以御金被下置候処、其後相応之修覆仕置候付嶋木綿沓反被下置候事

御金山方へ温泉場八ヶ所ニ而御備金之割合拾ヶ年

之間相備人数割合之覚

慶応元年四月上納

一金貳両三朱也

仁右衛門方

遠刈田

一同貳両貳歩三朱也

源兵衛方

同

一 同壹両三朱也

勘十郎方

慶応二丙寅年十一月十五日

鎌先

一金九切半也

村田町ニて利足共相渡

一 同貳両三朱也

市兵衛方

小原

慶応三丁卯年十一月廿四日

一 同貳両三朱也

太郎兵衛方

秋保

一金八切三朱也

伊藤宗五郎殿へ相渡

一 同貳両貳歩三朱也

勘三郎方

明治八年

作並

水分神社鳥井^(ママ)建方入費相出し

一 同四両也

喜藏方

一 前大湯新規建方、東長屋新規建方

同断

一 諸入費

一 同壹両貳歩三朱也

伊三郎方

一 上ノ山口新道普請入費割合金貳十五切貳朱

上下

加茂之助方

明治七

一 壹両三朱也

一 鳥井前より下小屋迄道普請入費

右之通

一 名号湯口手入湯小屋引方入費

慶応元丑年四月

明治六年

一 金八切三朱

伊藤宗五郎殿へ相渡

一 新湯揚方両度入費

利

一 屋■地并畑地御竿入相成候事

一 宮城県より涌口御吟味相成

慶応貳年丙寅三月十九日昼七つ時御着

御屋形様 御出馬被遊御入湯候付御金并嶋木綿被下置候事

三月廿五日

御若殿様御出馬被成置廿六日ニハ遠刈田御廻木馬御覧、夫より同日所々より角力新宅前にて御覧被遊候、廿六日ニハ屋形様笹谷御境御出馬被遊夫より大森銅山所え御廻り

廿九日御帰城

一 金千三百疋

伊右衛門

一 嶋木綿三反

同人

一 金千疋宛

喜右衛門

十右衛門

一 嶋木綿壹反宛

七兵衛

拾石御下知写

一 柴田郡前川村青根拾石式ヶ所同所善兵衛并同養蔵

代替政吉え運上代三百文ツ、ヲ以受負被相免候所、当年限明ニ付代五百文ツ、増運上仕、此金貳朱宛ヲ以当寅年より末五ヶ年被免下候方と吟味仕候、年限之義ハ願出不相見得候得共是迄被任下振合ヲ以吟味仕候、已上

慶応貳年

寅 御判

正月

文之丞方

御郡奉行衆

御金山方係り

両替所

本〆衆

役人衆

御金山主立

役人衆

写

御分領中在々湯治場湯銭御直段揚之義御達相成居候処、御蔵方吟味之通御直段揚被成下旨相済候間此段申渡候、已上

遠 喜右衛門

慶応二年

とら八月廿四日

曾 惣太郎

主立下代

伊藤宗五郎殿

右之通被仰渡候間湯錢木賃取合代百廿文宛来ル十八日より受取候様首尾可被有之、右ニ付申請御用之義在之候条来ル廿九日迄ニ令登仙候様首尾可被有之旨被仰渡候ニ付直々無延引令登仙候之様可被有之、此段申渡候、以上

伊藤宗五郎

とら

八月廿四日

鎌先湯守

市兵衛殿

小原同

太郎兵衛殿

遠刈田同

源兵衛殿

同

勘十郎殿

青根同

善兵衛殿

小の

勘吉殿

慶応三丁卯年

五月中

一 濁川川筋湯の峯新湯相出御受負人兩人佐藤清之進様御内権六殿ト八幡堂伊藤六郎兵衛殿ト合行之御下知罷成申候

慶応三年

九月六日

一 屋形様御のり切ニて御出馬御入湯被遊候、夫より十三日白石町御宿七ヶ宿之内買町御宿湯の原御境目御覧之上湯の原御宿上戸澤御宿白石御宿り、夫

より角田町御宿り亘りの方へ御出馬被成置候段ニ
聞及申候

被仰渡青根永湯守

仁右衛門

御入湯ニ付

御旅館并諸役所ニ居家御用立候付御金千三百疋被下置
候事

青根永湯守

仁右衛門

名号之湯先年思召ヲ以修覆料として御金被下置候所、
其後も相応手入仕置候ニ付縞木綿壹反被下置候事

青根永湯守

仁右衛門

去々年中より三ヶ度

御入湯被為入候所、宜敷御世話申上候ニ付縞木綿二反
被下置候事

一 御金千三百疋

仁右衛門被下置候事

一 嶋木綿三反

同人同断

一 御金千疋宛

喜右衛門

一 嶋木綿壹反宛
右之通被下置候事

十右衛門
七兵衛

慶応三年

卯九月廿四日昼七ツ半時御山の御釜相ぬけ入湯人之内
にて五人死シ、刈田郡矢附村肝入銀作夫婦子供一人、
同宮町十五郎妻むめ老人、山形鍛冶町斧吉等硫黄水ニ
て相流申候

慶応四戊辰年

一 代相場金壹歩ニ付貳百四文相成、右故木錢蒲団
之直揚左之通

同年六月七日より

一 木錢壹夜老人ニ付

代百六十文

一 夜着壹ツ同

代百廿文

一 蒲団壹間同

代九十文

一 小蒲団沓ッ同

代五十文

一 屋形様え献納金被仰附候ニ付指上候覚右ハ九條様

大伍少将澤三味ト申者知り候ニ付会津公征罰蒙仰

上金左之通金三両ニ二月中金八両沓歩也四月上納

辰六月中御金山拾五品方ニて温泉場え鉛玉献納被仰附

候、永湯守之分ハ三拾貫目宛金沓歩ニ付三〆五百目之

相場ヲ以金納、当所ニ而ハ

一 鉛三拾貫目

仁右衛門

此金

一 同貳拾貫目

七兵衛

此金

一 同拾五貫目

喜右衛門

此金

十右衛門

善左衛門

但し沓人ニ付五貫目宛

辰九月中又以御郡方より調達金被仰附候事

金沓両沓歩也

仁右衛門

同沓両也

七兵衛

但し両人計

伊達湯の村陣屋詰

土井淡路守様御家来

天野彦兵衛家内

七人

下男沓人

竹中繁太郎

家内四人

下男沓人

天野三吾

貳人

神谷弥三郎

磯村文蔵

足輕七人

〆廿四人

河田縫殿之助様 瀬成田

熊藏

御安康珍重奉賀候、然ハ昨日御相談仕候土井淡路守様御家来天野彦兵衛等廿四人青根温泉場へ被指置候、追而遠刈田へ引移候様首尾相成候由之所、兵糧米之義は老人前玄米壺升三盃之割ヲ以御下金無之候得ハ立兼候由ニて一日何程懸ト申義見当相立肝入等手配致旅宿ニて止宿為仕置候由ニ有之、勿論遠刈田之方も同様之訳柄ニ付今以青根温泉場七兵衛、仁右衛門両家ニ止宿罷有候由付添御小人佐藤平左衛門今朝直々申聞候間、昨日御相談仕候通早速御吟味被下彦兵衛等迷惑不致様首尾被下度候、兵糧等之諸懸り之義ハ全体ニて御吟味罷成候御義可被有之候得共、彦兵衛等之事ニ致候而ハ宿ニて右様被取扱候而ハ最初御吟味相済被仰渡、私共方ニて談判仕候趣被行違甚々迷惑致候由ニ御座候間、呉々も早速御吟味被下候様奉願候

九月三日

高橋惣助殿

河 縫殿之助

土井淡路守様御家来天野彦兵衛等廿四人青根温泉場へ被指置候処、賄之義ハ外落兵並合通兵糧被立下候所、旅宿代為指出取扱居候由ニ候間、右代受取候分早速為相返外落兵並合之通取扱候様急速首尾有之、右ニ付御目附より折合被申聞候、別紙も取合為吟味之相渡候、乍勿論遠刈田へ取移止宿相成候而も同様之取扱候筈ニ候条此段も申遣候、以上

九月四日

富田珍平殿

高橋惣助

左之通御郡司衆被仰聞候間、外落兵同様老人壺日白米七合五夕味噌六十目相渡し汁のみ香の物ハ御郡ニて相雇炊出為指出候様早速首尾可有之、是迄受取賄代何程可有之哉取調可被申聞候、以上

左之通御明々被仰渡候間其心得早速首尾有之、是迄旅宿代受取置候ハ、相返候様可有之、受取置不申候ハ、委細御書面之趣ヲ以無紛取扱置候様首尾可有之、否之義ハ早速可申聞此段申渡候

九月十日

大肝入

富田珍平

肝入

久七殿

写

一 此度温泉守共一統御運上増吟味首尾致候様明々被仰渡候ニ付、尚又南方湯守共其許より御通相成候様致度、作並上下へハ私より申遣候間左様ニ御含可被下候、右之段如此申遣候、以上

伊藤宗五郎

辰ノ三月三日

永湯守

寿右衛門殿

写

秋保永温泉守

寿右衛門殿

曾 惣太郎

御手前義南御郡中温泉守主立相勤候様可有之、此段申渡候、以上

辰ノ六月五日

写

当年之義ハ其許共一統痛迷惑之義も各郡承知致居候所、当年柄之様之義ハ全体見聞無御座義ニ候間、然ルニ最早彼是ト申由諸運上等上納之時節ニも相致候間、猶又凶歳杯之節ニハ場所処ニより夫々御吟味振も在之候得共、当年様之義ハ前例迎も無之一統迷惑致候義ニハ候得共、其内ニも場所処ニより甲乙も在之事ニ相聞得候間、尚又夏中より諸御人数等も不被憚御宿等も致候者も在之候間、右御人数何程計御宿致候哉尚又其外諸費も不少相懸り候由ニ相見得、旁委細ニ書出し候様可被致候、右之段如此申渡候、已上

伊藤宗五郎

辰十一月十三日

永湯守主立

寿右衛門殿

同

善兵衛殿

湯守

勘十郎殿

永湯守

源兵衛殿

同

市兵衛殿

同

太郎兵衛殿

新湯守

斎藤理四郎殿

伊具郡大内村之内

青場湯守

庄兵衛殿

奥陸国

明治二己巳年改

一 陸前国

一 陸中国

一 陸奥国

一 磐城国

一 岩代国

柴田郡より気仙海岸筋迄

磐井郡より江刺南部領迄

津軽領より松前領迄

岩城領より宇田亘理迄

白川領より会津領刈田迄

出羽国

一 羽前国

一 羽後国

乍恐口上書ヲ以奉願上候御事

柴田郡前川村之内青根温泉御運上代々ヶ年九拾貫文并同所名号新湯式ヶ所にて同壹ヶ文都合九拾壹ヶ文ヲ以拙者義受負被相任難有相続罷在候所、近年世上壹統不景氣年増湯治人不足相成能々各代高にて受負仕候得は、首尾合兼候程ニ罷成申候所、拙者義ハ永湯守も被仰付置候ニ付而ハ及丈ヶハ御運上省候願不申上居候所、当形勢ニ付春中より湯治人壹円無御座湯家作等之手入も及兼候為体当暮ト罷成候而ハ日用相続も指逼り申候間、何卒右御運上代当年ニ限り御免被成下度奉願上候、右之次第ハ兼て御見聞御承知被成下候通ニ而七月初より刈田蔵王嶽参詣人杯も相応ニ在之可や相続之一助ニも罷成候得共、当年ハ是以壹円無御座温泉場盛不盛之義ハ御金山方御役々様御廻村御見聞も被成

下候通ニ在之、天保凶歳之砌も御運上代一字御免被成下候義も御座候間、彼是えも御取合御隣愍ヲ以当年丈ケ御免罷成候様被成下度奉願上候、来年ニ罷成盛湯仕候ハ、募可申ニ至り御運上代被召上候義ハ別而御吟味被成下度前書之趣宜敷被仰上被下置度如斯申上候、已上

前川村之内青根

永湯守受負人

仁右衛門

明治元年

辰ノ八月

肝入

久七殿

組頭

政吉殿

右御運上代御免ニ罷成候事

当所領主様え温泉御運上方願立之扣

大湯壺ヶ所

此御礼代五拾貫文

一 名号湯壺ヶ所

此御礼代五百文

一 新湯壺ヶ所

此御礼代五百文

私儀

村田御代官所前川村之内青根温泉旧御領主様より永湯守被仰付難有相続罷在候所、此度新御領分罷成候而も引続永湯守被仰付被下置度、是迄前書三ヶ所にて御礼代九拾壺メ文ツ、年々上納仕永湯守被仰付置候所、近年引続違作等にて湯治人至而不足ニ罷成日用相続ニも指支申候間、御隣愍之御吟味ヲ以右三ヶ所ニ而御礼代五拾壺メ文ツ、年々上納仕永湯守被仰付被下置度奉願上候、已上

村田御代官所前川村之内

青根湯元御百姓永湯守願人

仁右衛門

明治二年

巳ノ七月

組頭

政吉

肝入

久七

大肝入

富田珍平殿

当御領主様え願立扣

乍恐奉願上候御事

刈田郡蔵本村之内鎌先温泉并小原村温泉宮村之内遠刈田温泉守被仰付難有仕合ニ奉存候相続罷在申候所、然ルニ是迄右三ヶ所共ニ当時入湯人亍昼夜亍人より湯錢拾文木錢并入用諸道具一式貸渡候損料代共ニ百六十文布団亍間之損料九十文都合式百六十文宛受取居申候所、近年諸品追々共ニ弥増無類之高直ニ罷成如何様共間ニ合兼相続可仕様無御座候間、此度より当分之内一泊り亍人より損料代共ニ式百七十文布団亍間之損料代百文都合亍昼夜亍人より三百八十文宛受取候様被成下度奉願上候、右様ニも不被成下候而ハ物々高直ニ候方より諸雜費へ間ニ合兼私共相続も可仕様無御座至極歎カノ

敷仕合ニ奉存候間、御憐愍之御吟味ヲ以願之通被仰付候様被成下度奉願上候、尤諸物下直ニも罷成候節ニハ右准し直段引下候義ハ不折置願申上候様可仕候間、此段共ニ如斯ニ奉願上候、已上

宮村之内遠刈田湯守

勘十郎

下小原村永湯守

太郎兵衛

蔵本村之内鎌先永湯守

明治二己巳年八月

市兵衛

柴田郡前河村之内

青根永湯守

仁右衛門

大肝入

阿部養助

同年同月

同

富田珍平

南部当御代官

阿部九蔵様

菊地庄助様

澤田市兵衛様

菊地兵蔵様

湯木銭并損料物直揚扣

明治二己巳年八月廿八日より受取候事

一 代貳百六十文 木銭壹人前壹夜

一 同貳拾文 湯銭同断

一 同百文 蒲団壹ツ同断

一 同八文 燈明銭同断

右之通受取申候事

明治三庚午年八月下旬より

一 代三百三拾文 木銭壹人前壹夜受取候

一 代廿三文 湯銭同

一 同百拾文 蒲団壹ツ

一 同六拾文 小蒲団壹ツ

明治四辛未五月十八日ヨリ

代相場下略相成候ニ付

一 代四百文 木銭壹人前

一 同貳拾八文 湯銭同

一 同百八拾文 夜着壹ツ

一 同百五十文 蒲団壹ツ

一 同八拾文 小蒲団壹ツ

写 先触按察府

当治按察権大主典

上下五人

馬壹疋

右ハ御用ニ付今廿七日已上刻山形出立其繼村通行按察

府へ罷歸人足遣方ハ無之、馬壹疋相雇候条休泊、其外

共無差支様可被得其意もの也

当治按察権大主典

明治三年

庚午八月廿七日

写先触元按察府

大谷山形小参事

上下式人

朱馬老疋

山形懸十四等出仕

碧川真證

上下式人

一 両掛 三荷此人足四人

一 駕 式挺此人足七人

一 昇荷 老荷此人足三人

右ハ明十五日白石堯程別紙休泊之通山形え相越候条、
其駄々無通滞繼立可申者也、

元按察府

明治三年

白石より山形迄宿々役人

庚午十月十四日

柴田郡青根湯守

佐藤仁平

私儀旧来青根永湯守被 仰付難有相続罷在候処、然ル
ニ冥加金南部様御支配中願上湯坪老ヶ所錢五拾貫文外

ニ名号湯新湯式ヶ所錢老貫文ヲ以冥加金上納永湯守被

仰付相続罷在候所、去ル辰之年より不氣候故大湯至

而冷先年よりハ格別湯治人も不足ニ罷なり日用相続も

指支最早活計之程無覺束場合ニ御座候間、当年より刈

田鎌先温泉冥加金振合ヲ以錢式拾五貫文上納仕永湯守

被 仰付候様被成下度此段奉歎願候、以上

柴田郡前川村之内

青根湯守願人

明治四辛未五月

佐藤仁平

同 組頭

鈴木政吉

同 村長

大宮久七

郡長

富田珍平殿

助役

川村栄三郎殿

郡長

富田珍平

未五月廿七日

角田縣

御役所

御附札写

壹ヶ年金三両ヲ以当未年ヨリ向五ヶ年聞届鑑札下渡候

条年季明尚可願出

明治四辛未年六月三日

明治四年十月人別書上扣

陸前國柴田郡前川村百姓湯守

佐藤仁平

未四十三才

同郡今宿村鈴木長四郎方二女妻

ミツ

弘化三年十月縁組

未四十二才

妹

ツカ

未二十六才

同国同郡葉坂村百姓長男

善吉

未二十三才

明治二年十一月庄吉末子縁組

姪女 千代

未二十才

次女 喜代

未十四才

三男 善平

未十二才

四女 せい

未十才

五女 ツね

六才

六男 善六一

一才

入筆

姪女千代

孫女 千宇

一才

明治六癸酉年四月

柴田郡小十区

前川村農

一 金拾円

佐藤仁平

其方共儀今般各区え小学校設立之儀布告之趣ヲ感体シ
積年之疲弊ヲ不厭一同協力金百拾九円右入費之内え差
出、猶有志之者有之候ハ、協同尽力致度段願出右は方
今之朝旨ニ適シ且自他ノ表準トモ相成奇特之事ニ候、
追而ハ賞譽之詮議ニモ可及候得共先普置候事

宮城縣七等出仕完戸昌

明治六酉年

- 一 金百円ヲ以新湯竹樋ニ而引方仕候所、引方人ハ小
山田笠原儀十郎殿相渡し候得共少々計参り候処、
右ニ而ハ温泉ニ相成兼候ニ付別段吟味仕候事
- 一 金百五拾円計

湯家作涌口并堀方人足等之賄相立候義ハ伊右衛門、
七兵衛致候事、木樋之義ハ十太郎、貞吉、文四郎
方ニ而致候事

明治七戌年

- 一 上ノ山えノ新道普請仕候事

此入費百円計相出し

- 一 名号湯あけ方仕候事

- 一 大瀧湯手入致候事

明治八亥年

- 一 東長屋普請新規立替致候事

明治八亥年より九年六月迄

- 一 大湯普請新規立替致候事

- 一 新湯又以明治九子年六月より普請仕湯坪式ヶ所大
森屋敷大宮政吉殿、槻木屋敷村扱大宮久平殿被参
候而吟味相成申候事

写

第九大区柴田郡

前川村農永湯主

佐藤仁平

学校資トシテ金拾円差出候段奇特之事ニ候、仍而為其
賞別紙目錄之通下賜候事

権令宮城時亮代理

宮城縣參事渡邊習判

明治九年五月一日

目錄

木盃 壹個

以上

地券写

陸前国柴田郡前川村字青根圃五番

一 宅地壹段九畝廿六步

代価九拾円拾六錢七厘

此百分ノ三 金貳円七拾錢五厘

明治九年丙子七月一日

圃十一番

一 耕地貳畝拾九步

代価三十六錢貳厘

此百分ノ三金壹錢壹厘 地租

圃十八番

一 耕地九畝拾七步

代価壹円貳十八錢貳厘

此百分ノ三金三錢八厘 地租

圃二十五番

一 耕地貳畝九步

代価三十壹錢三厘

此百分ノ三金九厘 地租

圃三十四番

一 耕地七畝廿五步

代価壹円六錢

此百分ノ三金三錢貳厘 地租

圃三十五番

一 耕地壹段壹畝五步

代価壹円四十八錢八厘

此百分ノ三金四錢五厘 地租

惣計金貳円八拾四錢

圃三十六番

一 荒地九畝廿七步

但し明治六年ヨリ十五年迄十ヶ年季

公債

明治十一寅年

一 金五十円也

但シ

一 金四円也

一 同十一円也

一 同十貳円五十銭也

一 同十貳円五十銭也

〆合計金四十円也

右之金額出金及候得は五十円之公債証券請取候由
ニ被申談候事、但し利数之義ハ金百円ニ付壹ヶ年
金六円宛御下渡りに相成候由、尚又備金悉皆之期
限明治十二年より貳十五ヶ年季之由

(一紙挿入)

「 公債

一 金五拾円也

但シ

一 金四円

御請

明治十一年

納

一 同拾壹円

八月三十一日
同年
十一月三十日

一 同拾貳円五十銭

同十二年
同十二年
二月廿八日

一 同拾貳円五十銭

同十二年
同十二年
四月三十日

合計金四拾円也

右之金額出金ニ及候得は五十円之公債証券請取候
由ニ被申談候事
但し利数之儀は金百円ニ付壹ヶ年金六円宛御下渡
りニ相成候由
尚又備金悉皆之期限明治十五年より二十五ヶ年季
之由

金峯久方殿ヨリ

記

明治十年旧七月十九日

一 金拾円也

預り

但シ利子之義ハ壹ヶ月十五円え二十五錢之割

(棒引抹消箇所あり、判読困難につき省略)

右元金拾円并利子として三円五十錢金正受納致候也

明治十二年卯ノ三月三十一日

金峰久方

年々脇宿人数届

安政六己未年

一 貳千三百三十貳人

七兵衛方

同

一 九百貳拾六人

喜右衛門方

同

一 百貳拾貳人

十右衛門方

✂

万延元庚申年

一 貳千七拾四人

七兵衛方

同

一 六百九十四人

喜右衛門方

同

一 百五十壹人

十右衛門方

✂

文久元辛酉年

一 千九百三拾壹人

七兵衛方

一 八百六拾人

喜右衛門方

一 貳百三十六人

十右衛門方

✂

文久二

一

一

一

✂

文久三癸亥年

一

一

一

✂

元治元申子年

一

此金廿壹円八リ

明治六癸酉年一月ヨリ九月八日迄

一 壹万貳千九百三十三人 老人代 壹リ宛

此金十貳円九十三銭三リ

同年十月ヨリ十二月迄

一 壹万九千百三人 老人ニ付代ニリ宛

此金三十八円廿銭六リ

明治七甲戌年分

一 三万千八百六十八人 老人ニ付代ニリ宛

此金六十三円七十三銭六リ

明治八乙亥年分

一 三万五千七百廿八人 老人ニ付代ニリ宛

此金七十壹円四十五銭六リ

明治九庚子年分

一月ヨリ十一月八日迄 老人ニ付代ニリ宛

慶応元乙丑年

一 一 一 一

一

慶応二丙寅年

一 一 一 一

一

明治五壬申年分六月八日ヨリ

五名人数 壹ヶ年調

一 貳万千八人

一 貳万九千七百八

此金五十九円四十銭

二万千八十貳人」

(一紙挿入)

「 記

十一年 十一月迄

三万八千九百壹人

十年 正月 十二月迄

三万九千九百八十九人

九年 一月 十二月迄

三万三百四人

八年 一月 十二月迄

三万五千七百廿七人

七年 一月 十二月迄

三万千八百六十八人

六年 一月 十二月迄

同年八月より壹人ニ付二

り宛

三万貳千四百四十七人

五年五月八日より十二月迄

明治十丁丑年分

一 三万九千九百八十九人

此金七十九円九十七銭八厘

明治十一戊寅年分

一

錢相場上、下時月覚

客人より取高之覚

安政六己未年

一 八百三十四〆四百十三文

入料〆

一 金壹切貳朱ト 代五〆五百四十文

茶料

手形四十切ト

一 六十九〆百三十文

出湯役

〆

安政七庚申年改万延元年成ル

一 九百三十七 〆十八文

一金貳十切三朱也

一 七十式 〆 五百六十文

 α

料

出

八拾七ノ四百七十壹文

癸亥年

脇出

(一紙挿入)

「文久元年正月より六月迄

一 貳百三十九ノ九百八十七文

一十七ノ百三十文

一金六切三朱卜貳百文

高

出湯

茶料

元治元甲子年

千五百貳拾六ノ五十七文

百拾ノ四百七文

金三十兩 切代貳拾六匁七百十貳文

百四十式 六十式文

 α

出

料

脇出

萬延二辛酉年

慶應元乙丑年

千六百十三ノ九百七十文

八拾八 〃 九百八十九文

金貳拾五切代貳拾八ノ六百文

百廿八 〃 五百廿三文

 α

出

料

脇出

壬戌年

慶応二丙寅年

一 千百九十二匁五百三拾五文
 一 五拾八匁貳百六拾六文
 一 金二十五切三朱
 一 代拾九匁五百三十五文
 一 千百拾七人
 一 拾匁四百六十文

出 料 人数 脇出

明治元戊辰年
 一 百九十五匁百五十貳文
 一 四匁八百廿文
 一 金貳歩壹朱ト代六匁廿文
 一 七拾三人
 一 九匁九百文
 右年春より代相場貳匁文より貳匁四百文相成

出 料 人数 脇出

慶応三丁卯年

正月より之分

一 貳百五匁五百十九文
 七月より

出

明治二己巳年
 一 千四百貳拾匁五百八十文
 一 四十三匁貳百六十文
 一 金十八切三朱ト

出 料

一 千九百九匁八百五十五文

一 八拾貳匁七百三十三文

一 金六拾四切三朱ト百八十文

一 千七百七拾人

一 百四拾九匁六百四十貳文

是迄代相場壹匁六百文也

出 料 人数 脇出

一 六百八十八人
 一 六十四匁五百三十文
 右年も代相場貳匁文より貳匁四百、貳匁五百文相成申候、但し九十六文にて百文通用

人 脇出

明治三庚午年

一	千八百貳十五〆三百三文	〆	右之内燈明ちん共二	料
一	七十八〆五百五文	出	金四十貳切三朱ト	
一	金三十五切半ト貳百八文	料	代三十九〆八百四十文	
一	六百五十壱人	人	千百六十人	人数
一	百三十貳〆六百五十四文	脇出	貳百七十四〆貳百廿九文	脇出
	右代相場貳〆五百文、百文ハ九十六文にて、長百		右之内へ燈明ちん共二	
	にて貳〆四百文			
	明治四辛未年五月十八日より		明治五壬申年	
一	代相場三〆六百文相成申候事	〆		人数
一	同年六月十日前代五〆文相成申候	出	同年五月迄	
一	六月十五日より代四〆文十月十五日迄	料	但し同年新八月八日より木錢	
	通用相成申候事		代貳百八十文之所三百文ツ、受取候事	
	十月十六日より			
	代相場三〆六百文相直り申候		明治六癸酉年	
	明治四辛未年		旧七月十六日より十月迄	
一	四千三百貳十八〆九百十六文	〆	一 三千六百五十七〆百十文	〆
一	貳百貳十六〆七百十四文	出	同断	
			一 千貳百八十貳人	人数

一

明治七甲戌年

料

一 三千五百五十九人

人数

一

貳千六百十八人

人数

一 千五百貳十貳円八十三銭

料

一

九千貳百六十貳〆三百三十文

料

(裏表紙)

「 〆 」

明治八乙亥年

佐 〆 仁右衛門 〆

一

三千百七十九人

人数

一

九千九百〇六〆五百文

料

一

但し同年新八月八日より木銭代三百文之所三百五十文宛受取候事

料

四 温泉の運営

〔12〕 掟之事

掟之事

明治九丙子年

一 湯場普請之節ハ人足可相出候事

一

貳千七百十七人

人数

一

千百貳十貳円壹銭六り

料

一 湯場乱ニ相成候節ハ僧都方可相出候事

一 御郡方并御金山御役人様御廻村之砌ハ御案内并宿元え面々相詰御取扱可申上候事

一 海道筋春秋普請之節ハ人足可相出候事

一 其処神社仏閣見苦敷無様可致候事

明治十丁丑年

一 先年より仁右衛門、喜右衛門処ハ客仁参り屋敷坂

へ趣候ハ、互ニ詞掛返不被苦訳、十右衛門、七兵衛処ハ海道筋故貫場兩落内え相入候ハ、互ニ詞掛返不被苦候事

一 其外海道通行之者え下人下女共ニ詞掛返義ハ不成相掟ニ仕候、心得違之者客人え詞相掛宿引等仕候者より先年通五メ文咎料可為相出候事

一 御公儀様より被仰渡御法度儀惣相守可申候事

一 客仁仲たり共御制禁為致間敷候事

一 面々客仁之内甚乱妨致候者有之候節ハ宿屋立合之上勘定相済候ハ、好々相立不苦候事

一 面々留置客仁之内心得違之者御役錢不指出彼是ト申者差足出立可為致掟候事

一 面々座頭諸芸人等留置候節ハ永湯守方へ可為指出候事

一 長屋客仁方へ振売等一切不成相掟之事

一 長屋客仁方へ振売等致度候節ニハ永湯守方へ可申出候事

一 他領他村より相越長屋客仁方へ直売難為成掟之事

一 他領他村より相越長屋振売等致度者有之候ハ、永

湯守方へ願相出御役手伝之上振売等可致候事
一 同村成共長屋客仁方へ直振売等不成相掟之事
右拾七ヶ條之通面々心得相守可申者也

永湯守方

年号月日

誰殿

〔13〕（仙台藩奉行人連署状）（慶長一七（一六一二）年）

御分國中湯錢本錢四拾貫文ニ

被下置候間、毎年無異儀指上可申

者也、仍如件

大條薩摩守

実頼（花押）

慶長十七年

津田民部少輔

正月朔日

景康（花押）

鈴木和泉守

重信（花押）

山岡志摩守

重長（花押）

湯別当衆

〔14〕享保五年柴田郡前川村之内青根湯本え 御湯治二

付竹木諸道具渡方帳〔享保一二（二七二七）年〕

享保五年柴田郡前川村之内青根湯本え 御湯治二

付竹木諸道具渡方帳

一 壺ツ 御はん所御こたつやくら

但シ敷たつ共二

一 壺ツ いろぶち

一 壺ツ ■ 炉長壺間

横式尺五寸

一 式ツ 同断三尺四方

一 式ツ 大小御湯坪御上り台四ツ足付

一 式ツ 御閑所上下舟

一 式ツ 御小便所右同断

一 壺ツ 御閑所御はな紙台

一 式枚 御湯坪古板戸

一 式枚 同所古半戸

一 式枚 御湯坪古板戸

但シかけかね壺渡り、小かけかね壺渡り付

一 式枚 同板半戸

但シかけかね式渡り付

一 壺枚 御湯坪古板戸

但シかけかね壺渡り付

一 壺枚 小羽古懸戸

長壺間

一 壺枚 同新懸戸

長壺間

一 百八枚 杉ぶな板共

長壺間七寸より壺尺迄、厚五分より八

分迄

一 七拾八枚 御湯坪古板

長壺間横六寸より九寸迄、厚四分

一 六百六拾本

雑木丸太横長式間

廻り壺尺五六寸

一 三百三拾本

同木丸太深長貳間

廻り壺尺五六寸

一 五百六拾壺本

同木丸太方寸長九尺

廻り壺尺壺貳寸

一 千八百七拾四本

同丸太屋中間横共ニ

一 九拾本 雜輕杉

一 壺俵五斗 するすぬか

一 九丸 本折かや壺丸ニ付三尺丸キ

一 壺ツ 御前水箱

ふた共ニ貳枚

金物錠なし

一 貳枚 杉あかるこし

せらし半戸

一 貳拾壺丸 から竹貳つ割

物壺尺ニ付三尺丸キ

一 百本 三寸廻り

から竹

一 四拾六本 四寸廻り

から竹

右三拾壺口之通相渡置申候間、重而御用之節段々相渡
可被申候、以上

武田久左衛門

享保拾貳年

三月廿七日

湯守

二右衛門殿

同

喜右衛門殿

〔15〕（温泉場運営定約状）〔元文五（一七四〇）年〕

青根出湯之儀去年大湯普請等仕大分之骨折仕候、尤此
末大瀧妙子之普請仕度候間、当年より四ヶ年拙者共ニ
被相任被下度候、左候ハ、壺ヶ年ニ五拾メ文外貳拾貫

文ツ、御村惣受中間中え配分可仕候間、右之通被成下
度段別紙願指出申候処、願之通被成下候、仍而左之通
可仕候事

相済可申候、已上

青根

一 代七拾貫文 内 一 五拾メ文御役代

元文五年三月十一日 同

六兵衛(印)

一 式拾メ文受中間中え

配分仕代

同

喜右衛門(印)

但右代七拾メ文当四月より九月迄段々相済可申候
拙者共四人之内壺ヶ年ニ壺人ツ、役人相立置申候
而御村方より年々被相詰候格之通相勤可申候

同

善兵衛(印)

一 諸御役人様方御廻村被遊候節青根御寓り所八百屋
其外入料之分兼而之通御村方より可被相出候、尤
御伝馬歩夫も只今迄之通御村より可被相出候、御
宿卯時之儀は少分之節ハ青根ニ而相勤可申候、御
宿数多御座候而人不足之節ハ是又御村方より被相
出筈ニ申定候

肝入

四郎兵衛殿

権十郎(印)

一 右御用ニ付肝入組頭衆其外御山守衆御用ニ付被相
詰候節賄等之儀は拙者共方ニ而仕筈ニ申定候

〔16〕乍恐奉願上候御事〔安永五(一七七六)年〕
(裏書)
「出湯御役代之扣願書也」

右之通急度相(ハ)可申候、万(一)御役代等少シ(ハ)可申候

乍恐奉願上候御事

指滞申候ハ、面々家内之者売人等ニ相立申候而急度

一 柴田郡前川村青根出湯御役代五拾貫文御村定御受

ヲ以毎年上納仕来り候所、近年世の中不景氣ニ而金銭不通用ニ御座候処ニ湯治人年増相減御役代通りも出兼此式三ヶ年は少々宛弁出上納仕候処、

「
」湯治人至而不足仕秋ニ罷成候而も

弥増不足仕御役代通り半代も出兼候而当上納高義如何様ニも上納可仕見詰無御座候間、右五拾貫文之内式拾貫文如何様ニも仕上納仕残り三拾貫文当暮より六ヶ年符上納「
」奉願上候、当年之義は山根通り至而大不作仕宝曆六年のきかつニも相劣不申年柄ニ飯米等も無御座渴命体ニ御座候ニ付、つくのい上納可仕様無御座候間、御憐愍を以願之通被成下度奉願上候、以上

前川村組頭

重蔵

安永五年十一月

同村肝入

善左衛門

大肝入

日下伊平次殿

〔17〕天明二年被遊 御入湯ニ付御小屋材木切方木数左

之通り〔天明二（一七八二）年〕

天明二年被遊

御入湯ニ付御小屋材木切方木数左之通り

へけ石御林ニ而

一 百拾五本 長サ貳間半

廻り八九寸より壹尺迄

同山

一 百八拾本 長サ壹丈

廻り壹尺三四寸

同山

一 三百八拾五本 長サ貳間

廻り八九寸

一 式千式百本 長サ木有次第

廻り三寸五分より七寸迄

右之通り切方仕候、以上

入間田村肝入

とらの 相原銀四郎（印）

十月

同村組頭

与四右衛門（印）

青根御山守

仁右衛門殿

同

喜右衛門殿

権十郎殿

七兵衛殿

年御自由色々難奉頼候、仍而証文如件

喜右衛門（印）

天明四年

閏正月十六日

仁右衛門殿

七兵衛殿

権十郎殿

〔18〕店始末証文之事〔天明四（一七八四）年〕

店始末証文之事

右之出湯御役代上納不納ニ付御上様より御メ御役人被
相下御組合中数々御苦勞相掛色々吟味被相尽候へ共、
上納之見詰無御座、右ニ付御メり御役上納之儀ニ被召
上御組合え被相渡無扨被相受取とりほこし相払御役代
調達上納仕筈ニ被仰渡候所、御組合中数々御用捨之上
右店拾ヶ年御渡仕要用之御役代え被相回候上ハ右
年季之内如何様之事御座候共異儀申間敷候、何分拾ヶ

〔19〕（出湯方諸事覚帳）〔寛政二（一七九〇）年〕

乍恐憚をかへりミす

御内々壺ツ書を以奉申上候

一 享保三年同五年

獅山様御入湯被遊候御宿

一 大屋形様明和三年より寛政

元年八ヶ度御入湯被遊候

一 天明二年 御殿御次

御大所向等自分入料を以
建上候に付苗字永々御免
被成下候事

一 御殿雪除垣天明二年三年

御郡より御人足百八十人外二御
入料物御積りを以御修覆ニ
被遊候処、同四年より御人足七拾
人ニ而拙者ニ被仰付同五年迄
式ヶ年仕上候所、同六年より
拙者願之上自分入料を以
雪除垣永々仕上候儀ニ被
仰付候事

一 御殿御はそん御下り被遊候

御役人様御宿仕上候節御払
方被成下候而も足代其外夫卯
時拙者自分入料ニ而天明

七八年式ヶ年勤上候、尤

御殿御普請方へ相詰候御人足
宿仕候而も相定候木錢受不申候

一 明和三年より寛政元年迄

八ヶ度 御入湯御普請
方へ相詰候御人足宿仕候而も
相定候木錢代受不申候

一 青根湯守共天明三卯年

大凶作に付連々困窮仕
四年春ニ罷成親類方え
引込、同四年秋ニ相成立
帰り、又は同七年ニ罷成立帰り
申者も御座候処、相続可仕
様無御座候段、拙者方へ申聞
色々相続仕天明七年当
所喜右衛門七兵衛方へ六拾貫文余
助力仕候、同八年湯治人割合ニ

仕合力仕候、寛政元年も木錢
所務仕候内五拾貫文余合力仕候

一 組ぬけ

一 御蔵入御百姓

一 諸役一字御免

一 帶刀

一 麻上下

一 きぬつむぎ

御殿守も相勤先年より

代々 御入湯之節

御宿仕候間、右之通永々

御免被成下候様仕度乍恐

御内々奉申上候事

天明七年七月三日より

湯治人木錢割合

一 十八貫貳百文 七兵衛方

一 四十式×九百貳十文 市四郎方
×六拾壹貫百貳拾文

一 天明八年壹ヶ年湯治人

割合に而宿仕候事

百五拾貫文程手伝ニ相見へ申候

一 寛政元年又以木錢

割合に而合力仕候事

西五月

一 拾三×九百六十文 市四郎方へ

六月十六日

一 十三×貳百九十文

右之内六×八百十文 市四郎方へ

六×四百八十文 七兵衛方へ

八月四日

一 十貳〆五百貳十文

市四郎方へ

湯治人木錢割合

一 十八貫貳百文

七兵衛方

八月十九日

一 拾四貫五百八拾文

右之内拾〆貳十文

市四郎方へ

四〆五百六十文

七兵衛方へ

〆六十壱貫百貳拾文

申天明八年湯治人割合に而

十一月五日

一 五貫貳拾文

市四郎方へ

仕候撫角錢百五拾貫文
程手伝様ニ相見得申候

〆五拾九貫三百七拾文

寛政元年より又以木錢

割合ニ仕候覚

右之通去年迄三ヶ年

合力仕候事

西五月

佐藤仁右衛門

一 拾三〆九百六十文 市四郎方へ遣ス

寛政二年

正月

六月十六日

一 十三〆貳百九十文

天明七年未七月三日より
右之内六貫八百十文 市四郎方へ遣ス

六貫四百八十文七兵衛方へ遣ス

八月四日

一 十貳〆五百貳十文 市四郎方へ遣ス

八月十九日

一 拾四貫五百八十文

右之内拾〆貳十文 市四郎方へ遣ス

四〆五百六十文七兵衛方へ遣ス

十一月八日

一 五貫貳拾文 市四郎方へ遣ス

〆五十九貫三百七拾文

右ヶ年合

撫角錢貳百七拾貫四百九拾文

右之通市四郎七兵衛方へ合力仕候、以上

寛政元年酉十一月改置

諸願

一 拙者屋敷代持高

拾七文

右川崎伊達織部様方

御知行ニ御座候処、右持高

拾七文の所御知行ニ被成下

度候事

一 御組ぬけ

一 帶刀絹つむき

一 御百姓諸役一字

右之通永々御免被成下

度候事

辰

正月



〔20〕御分領中所々温泉ヶ所限り御役代并湯守名前帳

〔寛政九（一七九七）年〕

（表紙）

〔寛政九年

柴田郡前川青根湯守

佐藤仁右衛門

御分領中所々温泉ヶ所限り御役代并湯守名前帳

丁巳十月〕

同郡宮村之内遠刈田
一 同壺ヶ所

湯守
勘十郎

此御役丸錢六百文

名取郡北方湯本村之内秋保
一 同壺ヶ所

湯守
勘三郎

此御役丸錢三〆五百文

柴田郡前川村青根

湯守

一 出湯壺ヶ所

佐藤仁右衛門

此御役丸錢五拾貫文

黒川郡吉田村之内臺ヶ森

湯守

一 同壺ヶ所

市三郎

此御役丸錢壺〆五百文

刈田郡藏本村之内鎌崎

湯守

一 同壺ヶ所

市兵衛

此御役丸錢三〆文

玉造郡大口村之内川度（かわど）

湯守

一 同壺ヶ所

吉郎右衛門

此御役丸錢拾三〆文

同郡小原村

湯守

一 同壺ヶ所

太郎兵衛

此御役丸錢貳百文

同郡同村之内鷺巢

湯守

一 同壺ヶ所

新助

此御役丸錢三百文

同郡同村之内赤湯

湯守

一 同壺ヶ所

万五郎

同

新六

同

与次右衛門

此御役丸錢五百文

同郡鳴子村之内瀧湯

湯守

一 同壺ヶ所

勘左衛門

同

善次郎

同

三郎次

此御役丸錢七匁五百文

同郡同村之内原湯

同

一 同壺ヶ所

右三人

此御役丸錢壺匁文

同郡同村之内鷯ノ渚

同

一 同壺ヶ所

与右衛門

此御役丸錢貳百五十文

栗原郡

同

一 同壺ヶ所

平右衛門

此御役丸錢四十匁文

同郡同村之内寒風澤

同

一 同壺ヶ所

戸右衛門

此御役丸錢貳匁五百文

同郡同村之内吹上

同

一 同壺ヶ所

八郎右衛門

此御役丸錢五百文

西岩井五串村之内須川嶽

同

一 同壺ヶ所

甚之丞

同

長四郎

一 同壺ヶ所

養助

同

此御役丸錢五百文

孫左衛門

右同断

同

惣太郎

黒川郡大森村之内新湯

同

同

一 同壺ヶ所

甚右衛門

善右衛門

此御役丸錢三百文

此御役丸錢貳五百文

右同断

三ノ迫沼倉村之内駒湯

同

西岩井小猪岡村之内新湯

同

一 同壺ヶ所

軍治

一 同壺ヶ所

弥惣右衛門

此御役丸錢貳文

同

黒川郡吉田村之内新湯

同

右同断

喜平次

一 同壺ヶ所

平右衛門

此御役丸錢壺文

此御役丸錢三百文

但シ新規取立

玉造郡鳴子村之内中山

同

一 同壺ヶ所

幸藏

玉造郡大口村之内目ノ湯

同

右同断

此御役丸錢三百文

右同断

一 迫宮澤新湯

同

一 同壺ヶ所

八郎右衛門

右同断

志田郡下伊場埜村

同

一 同壺ヶ所

権五郎

此御役丸錢貳百五十文

右同断

此御役丸錢三百文

国分大倉村之内

同

一 同壺ヶ所

久内

宮崎村之内明賀原

同

右同断

一 同壺ヶ所

米蔵

此御役角錢壺𦵑文

右同断

此御役角錢壺𦵑五百文

国分作並新湯

同

一 壺ヶ所

喜惣次

一 出湯貳拾八ヶ所

右同断

一 拾七ヶ所

往古取立

此御役丸錢壺𦵑文

内

一 拾壺ヶ所

新規取立

黒川郡吉田村之内萩ヶ倉

同

一 同壺ヶ所

五右衛門

寛政九年丁巳十月廿六日御金山

下代門脇新右衛門殿下役之
太左衛門殿廻村被下右之扣帳
より写之

〔21〕乍恐奉願候御事〔寛政一二（一八〇〇）年〕

乍恐奉願候御事

柴田郡青根

御殿御屋根棟様事外廻り堀

笠御門等迄大破仕候に付、去秋中

御修覆被成下度段申上候に付、

御代官様御見分被成下候通ニ御座候処、

扨又先年より

獅山様

徹山様迄数々度御入湯

被為遊 御殿守被 仰付、

尤右御殿御次御大所向拙者

自分入料を以建上候ニ付永々

苗字御免被成下難有仕合冥賀

至極ニ奉存候、右 御殿御修

覆之儀拙者自分入料を以

仕上度奉存候、此末々共

御殿御屋ね井へい笠の義は

拙者自分入料を以御修覆

仕上度奉存候、若又永世至り

拙者自分ニ相叶不申時は

御上様より御普請被成下度

奉存候、猶又

御上様御入湯被遊候御時節ニ

は先年よりは迄之通り

御上様より御普請被成下度

奉存候、乍憚此段宜敷様

被仰上被下置度奉願候、以上

佐藤仁右衛門

寛政十二年

申二月

久吉

〔22〕 天保貳年五月出湯方請負人人指ヲ以被仰付候御

下知巻卷写〔天保二へ一八三二〕年〕

(表紙)

〔天保貳年五月出湯方請負人

人指ヲ以被仰付候御下知巻卷写

青根

仁右衛門

御別紙之通被仰渡候間、首尾可被申候、首尾合早速可

被指戻候、此段申渡候、以上

肝入

久吉

五月三日

青根ノ

七兵衛殿

青根出湯役御年限明共御別紙之通御運上を以仁右衛門
え被任下御下知順々被相渡候間、相渡候条首尾在之早
速可被指戻候、以上

大肝入

加藤惣助

四月廿七日

肝入

久吉殿

如此御郡奉行衆被仰聞候間、巻卷之趣を以首尾在之無
延引指戻可被申候事

萱 東右衛門

四月廿四日

大肝入

加藤惣助殿

左之通御金山方本々山田利兵衛等申聞候間、其御心得
首尾可在之候、御首尾合後御金山方御役人手前え直々
相廻御首尾可在之候、此段とも申渡候、以上

若 三郎左衛門

四月廿二日

萱場東右衛門殿

若林三郎左衛門様 山田利兵衛

遠藤要之助

柴田郡前川村青根出湯運上當年より向拾年湯守仁右衛門え被相任候義ニ付別紙之通御連名御下知被仰渡候間、指出申候条、向々御首尾罷成御代官手前より直々遠藤要之助差戻候様共御首尾相成度別紙御下知差添此段被申達候、以上

四月

熊谷忠五良様 大内保治

柴田郡前川村青根出湯増運上を以当卯年より向拾ヶ年湯守仁右衛門へ被相任義ニ付、御下知別紙壹卷首尾合之上相廻候、以上

四月十六日

柴田郡前川村青根出湯御年限明ニ付御運上不相当ニ而せり増吟味仕候処、是迄之代高よりハ四貫五百文相増都合六拾貫文ヲ以一村受負被任下度、別紙之通品々申出拙者共吟味仕候処、全体盛湯ニ体候而は右様ニ而も相当不仕受負人と湯守と引隔居候故実事え行届兼申候処、壹ヶ年ニ八拾貫文ツ、被召上候得は、當時之歩之ニ而は相当仕候義ニ見文仕候間、右代高を以湯守之内仁右衛門え当卯の年より向拾ヶ年被相任候方可然と奉

存候、品は同人義かふ柄もよろしく被相任置候へは第一候之御殿御より湯家作手入且は湯治人通路之義ハ両道筋共ニ普請等迄も春秋と手入不仕候而は不罷成、彼是えも行届候者ニ御座候間被相任候方と吟味仕候、一体湯守共四人ニ御座候得共、吟味承届候之上可申上義ニ御座候得共、右之者共増御運上仕候者も無之却而実事行届兼御用多ニ付罷成候間、仁右衛門え被仰付候ハ、万端御よりニも可相成と奉存候条、御取合御吟味被成下度別紙指添此段共に申上候、以上

御金山下代

大竹左右助

四月

右之通御金山下代大竹左右助申聞運上高之義は請負年限中ニ候共盛不盛ニ向運上高之儀ハ御吟味も被成下候事ニ御座候処、當時は盛湯ニ罷成六拾貫文之運上ニ而相当ニ在之段々吟味も為仕候ところ、湯守共内ニは運上増御吟味被成下候而も宜敷存含も相聞得候得共、中間いみ合在之実事え行届可申候様無之次第段々見聞仕候義ニ御座候間猶又吟味仕候所、仁右衛門義は湯守

四人之内ニも別而掟式もよろしく被相任候而も何分取廻ニも相成候者ニ在之、実意之間承拔候処、八拾貫文を以被任下候ハ、諸事諸普請相加請負可仕由ニ御座候間、右高を以当年より向拾ヶ年仁右衛門ニ請負被相任候方と吟味仕候、猶御取合御吟味罷成無御異義候ハ、御郡奉行えも御首尾相成被仰渡候様被成下度、此段相達申候、以上

四月

山田利兵衛

遠藤要之助

熊谷忠五郎

同判 新治方

十六日

御郡奉行衆

御金山方本々衆

役人衆

同請払役衆

〔23〕高遜り替シ証文之事〔天保七（一八三六）年〕

高遜り替シ証文之事

一 南北四間半東西

此坪

此代

右之通 御殿御建方之地面当年大不作ニ付如何様共露命引続兼候ニ付、露命為凌之金拾両貫請貴殿ニ永代高遜り仕候儀実正ニ御座候、此末々貴殿方ニ而御自由可被成候、仍而為後日之親類組合の連名ヲ以永遜り替シ証文如斯ニ御座候、以上

遜り人

喜右衛門（印）

天保七年

十二月

親類組合

七兵衛（印）

組合

十太郎（印）

仁右衛門殿

〔24〕本扣 乍恐口上書ヲ以奉願上候御事〔天保九へ一
八三八〕年〕

本扣

乍恐口上書ヲ以奉願上候御事

一 喜右衛門義兼而極難渋之所、去々年より大不作之
続又以当年連も不作ニ相見得露命相続之見詰無御
座依而奉願候ハ、右同人地形之内先年屋形様御入
湯之節

御殿御造永罷成候場所表間口四間半、裏行之儀は
肝入組頭并青根屋敷一統引揃五間之処境杭打方仕
候分此度拙者方え遜高二仕度、右親類組合内之吟
味奉願候、左様ニも被成下候ハ、右同人義如何様
ニヶ当飢渴も相凌候一助ニも罷成候義御座候間、
拙者方え永世高遜相受候様被成下度奉願候、左様
被成下候得は同人義も永御百姓相続候義ニ御座候
間、以 御憐愍御指支も無御座候ハ、願之通被成
下度奉存候、已上

青根屋敷

遜受人

天保九年八月

組合

仁右衛門（印）

七兵衛（印）

同

重太郎（印）

肝入地肝入 同

久治殿

善右衛門（印）

組頭

市之助殿

右之通申出候間、前文え御取合御吟味被成下度奉存候、
已上

右村与頭

市之助（印）

同年同月

同肝入

久治（印）

廣人様

傳九郎様

玉龍様

〔25〕乍恐口上書ヲ以奉願上候御事（天保九（一八三八）年）

乍恐口上書ヲ以奉願上候御事

一 去々年中大不作ニ而喜右衛門儀家内露命相続凌兼候ニ付、先年 屋形様御入湯被遊候御時節 御殿御建永罷成候場所之儀は喜右衛門拙者兩人屋敷地表間口七間御用立ニ候処、右之内四間半喜右衛門屋敷御座候、右表間口四間半之所拙者方へ遜高仕度儀ニ付相談御座候間、地形絵図面ヲ以金子引替罷有候処、此度願書指上候ニ付右地かた相改組合印形借請候様仕度内々喜右衛門方へ引合罷有候所、只今ニ罷成絵図面之通引渡シ兼候儀申聞今更右様不都合所存候而は拙者儀も甚々当惑罷有候間、何卒絵図之通引渡候様御吟味被成下度奉願上候、勿論右地形之儀ハ御地頭様御知行所御座候、全体去々年中儀は世上指迫り幾重も金代通六ヶ敷年柄ニ御座候へは品物等も預り候而も見当通可借請様無御座候、仍而先祖より遜之品もの壳代ニ相立右金子取揃相渡候儀御座候、右様指配候所ヲ彼は違変被

仕候而甚迷惑仕候、右金為聊共露命之一助ニも罷成候、此段以 御憐愍ヲ御吟味被成下度乍繰事奉願上条宜敷様被仰上被下置度奉存候、已上

青根屋敷

仁右衛門（印）

天保九戌年六月

地肝入

久治殿

組頭

市之助殿

〔26〕青根温泉御運上請負人ニ被成下候御下知巻卷写
〔天保一〇（一八三九）年〕

（表紙）

「青根温泉御運上請負人ニ被成下候

御下知巻卷写

湯守

佐藤仁右衛門」

乍恐口上書ヲ以奉願上候御事

柴田郡前川村之内青根温泉一村（以下欠）

乍恐口上書ヲ以奉願上候御事

柴田郡前川村之内青根温泉天保五年より去年まで五ヶ年一村御請負被相任置候所、御年限明ニ付右一村御請負は難相免於御金山方ニ此度別人御請負之もの御吟味ニ罷成候ニ付拙者儀御殿御_りも有之已前右御請負申上居候処、当年より如已前之御請負申上間敷や望有之候ハ、御向々え願書指上可申品々御金山下代衆より御取合御座候処、拙者儀前書之通已前八拾_〆文ヲ以右御請負申上居候事ニ御座候へ共、當時之儀ニ御座候へは是まで之御運上代共々年八拾_〆文ツゝ上納仕候事ニ而は中々御請負可申上様無御座候、品は先以指当り湯家作大破ニ罷成早速修覆新規立替も御座候得は不少之入料も相懸り候事ニ御座候処、其上已年より已来大不作引続き凶歲上り渴々之事ニ御座候へは湯治人も至而不足ニ有之縦合不少之入料相懸り候得共、湯家作不仕候而は第一不盛之根元ニも罷成候事ニ御座候間、旁々

是迄之通り御運上高ニ而は取続き見詰も無御座候、依而は先以_〆兩年も半御役四拾_〆文ツゝ上納仕当年より末五ヶ年御請負拙者え被相免候様御吟味被成下度奉願上候、右様御吟味被成下候ハ、早速湯家作等も仕明年ニも熟作ニ相成候ハ、湯治人も相出盛湯ニも相成候ハ、縦御年限中増御運上被仰渡候共異儀申上間敷候間、御憐愍ヲ以前書之通御吟味被成下度不顧如斯ニ奉願上候、右趣宜敷被仰上被下度奉存候、已上

柴田郡前川村之内青根

御殿御_り

仁右衛門

天保十年二月

肝入

久治殿

組頭

市之介殿

右之通願申出候ニ付御村内吟味仕候所、望之ものも無御座候間、仁右衛門え被相任候而も御運上代指滞り候者ニも無御座候間、右之段宜敷様被仰上被下置度奉存

候、已上

右村組頭

市之助

肝入并

御殿守 久治

同年同月

大肝入

加藤惣助殿

御金山下代

石川理惣殿

柴田郡前川村之内青根出湯去年まで一村請負ニ被相任置候処、当年年限明ニ付右一村請負は難被相免別人吟味相達候様被仰渡置望之者色々吟味も仕候処、此節望人も無之同所御殿御り罷有候仁右衛門と申者已前請負も仕御役代等も無滞り上納も仕候ものニ御座候間同人ニ吟味仕候所、委細別紙之通申出尚亦吟味仕候処、右湯と申は五六ヶ年已前修覆致候事ニ有之候へは最早諸方損し手入之所も有之、且名号之湯と申は是まで一

円手入も無之ものと相見得屋根并はしらとふ惣体大破ニ罷成新規立替無之候而は相成申間敷旁々不少之入料ニ可有之と奉存候、其上同所ニも不限引続き此節湯治人も至而不足ニ有之されはとて湯家作夫々修覆も不致候而は不盛之根元ニも御座候間、申出候通半役ニ御吟味被成下右同人え被仰渡候様被成下度、勿論明年ニも盛湯之増様ニも御座候ハ、尚亦拙者共出村見分仕御運上増吟味可申上候、当時請負人明ニ相成居候儀ニ御座候間、御取給早速御吟味罷成否被仰渡候様仕度別紙指添右之段相達申候、已上

大肝入

加藤惣助

御金山下代

石川理惣

同 同

桜井仁右衛門

三月五日

右之通大肝入加藤惣介等申出候ニ付猶吟味仕候所、右同所儀は去年まで一村請負ニ被相免置候処、当年より

年限明ニ付ては一村請負と申儀は湯家作等も見合ニ計
罷成自然大破ニ相及不盛之根元ニ相成候間、当春ニも
罷成候ハ、望候人も有之候ハ、吟味仕可相達と去年中
相達無異儀御下知被仰渡置候儀ニ御座候処、同所御殿
御メリ罷有候仁右衛門と申もの已前も請負被相任候者
にて当年より末五ヶ年被相免度、御役代之儀は是まで
老ヶ年八拾メ文つゝヲ以被相免置候様ニ御座候へ共、
右湯場大破ニおよひ諸普請も不少に相懸り候ニ付老ヶ
年四拾メ文つゝヲ以被相免下度段大肝入并御金山下代
吟味申聞候段無異儀訳ニ相見得申候間、先以当老ヶ年
四拾メ文ヲ以請負右仁右衛門え被相免、当秋ニ罷成候
ハ、盛不盛之段見分も仕明年御役代之儀は吟味相達候
様可仕候間、猶御吟味罷成無御異儀候ハ、御郡方并御
金山方請払役連名御下知被成下度別紙指添相達申候、
已上

窪田保之進

圓城目軍治

四月

方助方

同 判

御郡奉行衆

御金山方本メ衆

請払役衆

御役人衆

右之通五月十九日被仰渡候処、同月廿三日大肝入衆へ
御老巻指戻シ申候

御金山懸り御役人左之通

御本メ

菊田茂太夫様

御本メ

大石弥兵衛様

御役人

日野新十郎様

同

佐藤東右衛門様

同

窪田保之進様

御金山下代

桜井仁右衛門殿

同

石川理惣殿

右御役人え

御下知之上御礼廻り仕候事

甚々湯守迷惑相及

村内御百姓前御家中

衆年来青根へ登り

相客人方へ振り売等

致候ニ付、御役上納方へ

手伝申受度如斯

御届候、已上

湯守

佐藤仁右衛門

〔27〕御手伝面附帳（文久二へ一八六二）年

（表紙）

「文久二戌年

御手伝面附帳

八月吉日

」

口演

一 此度大湯新規

建方ニ付時節柄

万物高直ニ候得は

諸入料も相増候処、

肝入

一 出人 七人 大宮久七

但忝人ニ付忝百五拾文つゝ

組頭

一 同 四人 伊兵衛

右同断

一	同 四人 十蔵	一	同 貳人 庄吉
	右同断		右同断
一	同 四人 吉三郎	一	同 老人 万六
	右同断		同
一	同 四人 九左衛門	一	同 老人 弥七
	右同断		同
一	同 四人 政吉	一	貳人 永治
	右同断		同
一	同 三人 浅吉	一	老人 喜与吉
	右同断		同
	代七百五十文受取	一	老人五分 門蔵
一	同 貳人 半蔵		同
	右同断	一	三人 七右衛門
一	出人 貳人 久八		同
	但シ老人ニ付貳百五十文つゝ	一	貳人 庄八
一	同 貳人 久五郎		同
	右同断	一	老人 松吉
一	同 貳人 甚之助		同
	右同断	一	老人 庄六

同

周蔵

石井米吉

勘五郎

一 耆人 権七

同

一 金壺切也 石井久四郎殿

一 石井彦太郎殿

一 佐藤繁治殿

一 幸之助殿

一 金式朱也 勇吉

一 金式朱也 専太郎殿

一 文六

一 幸之丞

一 久之丞

〔28〕乍恐口上書ヲ以申上候御事〔慶応三へ一八六七〕

年〕

乍恐口上書ヲ以申上候御事

一 柴田郡前川村之内青根温泉年来請負湯守被 仰付

難有家内相統罷在申候処、去ル万延元年 御上様

へ御貸上金被仰付指上申候、其後御村内へも少々

たり共御備金ヲも仕、又以御金山方へ御時節柄之

砌金百両献金仕候上永湯守被 仰付難有奉存候事

一 去々年春 屋形様御出馬御入湯被為遊候節にも御

殿并湯家作等迄自分入料ヲ以普請仕上候処、御首

尾能御入湯御帰城ニ被為遊恐賀至極難有拙者迄大

慶ニ奉存上候事

一 拙者儀家内善右衛門義、品依有之聲善左衛門同屋

敷代御百姓願申上居家普請仕候節も組合納得之上

一統より手伝申受家作出来ニ相成申候、其後

屋形様御参府御下向并御郡方御役々様御廻村之砌、

人馬割合諸歩夫等手伝致呉候様相談ニ被相及候ニ

付右手伝仕居申候、去々年より

屋形様両三度御入湯被為遊候砌は御郡方寄物品人

馬方御役所諸式御用立ニ罷成

御地頭様御下宿所ニ罷成難有仕合奉存候事

一 去々秋より去秋八月迄は拙者儀親類懇意之客仁等組合納得之上、少々宛善左衛門方へ止宿為致罷在申候所、去十一月中御金山方御主立奈良坂喜右衛門様、下代伊藤宗五郎様御廻村之砌、村田町ニおゐて善左衛門義人頭ニ相成不申候上ハ人宿不被仕候段御談ニ罷成候ニ付、帰宅則右之段相通申候所、恐入無異儀御事ニ奉存候事

一 当夏中迄ハ一円人宿不仕罷在申候処

御地頭様御家中榎山廣人様并御村肝入久七殿御出被下、善左衛門義、人宿御指支ニ罷成候義無異義筋ニ候得共、別ニ話計之営迎も無之露命相続も無覺束歎敷事ニ被思召、組合中へ御口入被成下候義は永湯守余り客其外親類之客人等宿為致露命相続代御百姓罷成候様御談ニ有之組合中納得仕居候事

(右の条文同主旨の棒引抹消箇所あり、省略)

一 八月中嵐田小右衛門様御談ニは新宅ニ而客人等止置候様ニ相見得候ハ如何之訳ニ候哉否組合中へ御

聞糺ニ被成候節、組合中より申上候は永湯守善兵衛余り客止宿致居候義ニ申上置候、折節山田民之介様御入湯ニ御出被成候而組合一統睦敷代御百姓相続罷成専一ニ候間、頼母組合一統納得仕御談被成下御酒迄被下置納得仕居候事

右之段御談被成下候上、又以肝入久七殿同道ニ而六月中御出被成下組合中寄合此末尚々睦敷納得之上露命相続代御百姓罷成候様御談被成下、御酒杯被下候而納得仕居候事

一 又以八月中組合より御金山方へ申上人宿一円不罷成段、拙者方へ御断ニ罷成候所、折節山田民之介様之御口入ニ而永湯守余り客等宿為致露命相続罷在候様、組合中納得致呉候様ニ御酒杯被下置和睦罷在申候事

(付箋)

「本百姓被相談組中承知罷成此末睦敷待是異乱無之候様迎御酒まで被下納得罷成居候方」

一 此度組合中より御金山方善左衛門義人宿被致候而

は拙者共永統之障ニ罷成候段、書付を以願申出候
 処、右願書拙者方へ吟味せしめ候而可被申聞段、
 御附札を以御戻ニ罷成候処、御見聞被遊候通青根
 屋敷と申は御田地込も無之湯治人之潤を以、御郡
 役罷在家内相統罷在候、御場所柄ニ御座候処、人
 宿御指支ニ罷成候而は代御百姓永統之見詰無覺束
 奉存候間、前文之趣宜敷御吟味ニ被為及 御慈悲
 之御吟味を以何卒善左衛門義代百姓永統罷成候様
 人宿為仕候様被成下度乍憚口上書を以奉願上候、
 尚山御役人様へ申上善左衛門義人宿一円不罷成段
 拙者方へ御断ニ相成候所、折節山田民之助様之御
 口入ニ而永湯守余り客宿為致露命相統罷在可申様
 組合中へ御談被成下候而納得仕居候事
 此度組合中より御金山方へ善左衛門義人宿被致候
 而ハ拙者共永統之障ニ罷成候段、口上書を以願申
 出候所、右之願書拙者方へ吟味せしめ候而可被申
 聞段、御附札を以御戻ニ罷成候所、御見聞も被
 遊候通青根屋敷と申は御田地込も無之、湯治人之
 潤を以、御郡方諸役勤仕家内相統罷在候御場所柄

ニ御座候所、人宿御指支ニ罷成候而ハ、代御百姓
 永統之見詰無覺束奉存候間、前文之趣宜敷御吟味
 ニ被為及 御慈悲之御吟味を以、何卒善左衛門義
 人宿為仕代御百姓永統罷成候様被成下度、乍憚口
 上書ヲ以奉願上候、尚組合中より指出候口上書相
 添如是ニ御座候以上願之被仰渡候様被成下度申上
 候、已上

之見詰無覺束奉存候間、前文之趣宜敷御吟味ニ被
 為及何卒

御慈悲之御吟味を以善左衛門義代御百姓永統罷成
 候様人宿為仕被下置度、乍憚口上書を以奉願上候、
 尚組合中より指出候間、願之通被仰渡候様被成下
 度如是申上候、以上

永湯守

善兵衛

慶應三年

十月

御金山下代

伊藤宗五郎様

写

乍恐書付を以奉願上候御事

一 青根屋敷之儀ハ御見聞も被成下候通只今迄四軒ニ
而も漸々相続相立居候場所ニ御座候所、右ヲ御勘
弁被下候上、去秋御廻村先村田町ニ而善左衛門人
宿御指支之儀被仰渡候処、同人義不得止事人宿致
居候事ニ候得は、追年ニ至り拙者共永続之見詰無
御座候間、前文之通御憐愍之御吟味を以人宿御指
支被成下度奉願上候、以上

柴田郡前川村之内

青根温泉場

七兵衛

喜右衛門

十右衛門

慶應三年

卯ノ十月五日

御金山下代

伊藤宗五郎様

御附札写

如此茶屋共等申聞候間、其段吟味早速可申聞候事

伊藤宗五郎

十月六日

永湯守

善兵衛殿

〔29〕慶応三年九月青根御入湯之節同所之者無残諸品

御払請候方上納金可仕旨書ヲ以左ニ申渡候〔慶

応四（一八六八）年〕

慶応三年九月青根御入湯之節同所之者無残諸品御

払請候方上納金可仕旨書ヲ以左ニ申渡候

金拾切也

白石四斗入壺俵

一 代拾貫貳百八拾文

諸物御払請候分

一 内金七切壺分七リ七毛ト

代五〆貳百四拾九文

諸品売上代

指引

残上納貳切八分貳り三毛ト

代五〆三拾壹文 喜右衛門

〆

一 金四拾切也

白米壹石六斗也

一 金壹切ト

代拾七〆百貳拾五文

諸物御払申請候分

外二

代拾四貫四百文

大豆九斗御払請候分

〆

内一 金九切ト

代八〆九百貳文諸品売上代

指引

残上納

一 金三拾貳切ト

代貳拾貳〆六百廿三文上納分

十右衛門

〆

一 金四拾切也

白米壹石六斗

一 代三拾五貫八拾五文

諸物御払申請候分

〆

内一 代八拾四貫七百七拾四文

諸式売上候分

外

一 五〆文 糯米壹斗分

指引

残上納拾貳切五分ト

代三百拾壹文 仁右衛門

〆

一 金六拾切也

白石貳石四斗也

一 金三拾貳切四分壹り六毛ト

代拾三貫八拾壹文

諸品御払申請金代

ノ

内一 金貳拾七切五分八り五毛ト

一 代五拾五貫四百三拾文

右ハ諸品売上金代

指引

残上納金貳拾四切八分三り壹毛ト

代七貫六百五拾壹文

ノ右ハ七兵衛相納候分

一 金四拾三切三分也

右ハ湯共四人貳石壹斗六升五合

御払申請白五升直段

壹紙

一 金百拾五切四分五り四毛ト

一 代三拾五貫六百拾六文

右之通早速取調相濟候様当役ニ被相渡候間、各其心得早速相納候様可在之、尤去秋中より此之頃迄指繰合割候分へも競ハ御責付不申受候共可申聞筈ニ可在御座、右之趣ヲ以難在仕合之段役付ニ計り不懸置候各共可申上旨ニ御座候、前文之通り急々皆納首尾可被申事

肝入

久七

辰ノ三月廿四日

右之衆中

〔30〕慶応三年九月青根御入湯ニ付同所仁右衛門御払

申請金并被相渡候分左ニ〔慶応四（一八六八）年〕

慶応三年九月青根御入湯ニ付同所仁右衛門御払申

請金并被相渡候分左ニ

一 金四拾切也

白米四斗入四俵御払掛候分

但金壹切ニ付四升ツ、ヲ以如件

一 同拾切八分式り五毛也

白米式石壺斗六升五合

但四人ニ而御払申請候分

但御直段五升之割ヲ以如此

一 代三拾五貫八拾五文

三口メ金五拾切八分式り五毛ト

代三拾五貫八拾五文

金直し拾七切五分四り三毛

右ハ相濟候分

一 代八拾四貫七百七拾四文

諸品指上候分

一 同五貫文 糯米壺斗指出候分

式口メ八拾九メ七百七拾四文

四拾四切八分八り七毛

指引

一 金式拾三切四分八り壺毛也

右ハ相納候分

右之通早速相納候様首尾可被申候、已上

肝入 久七

辰ノ

三月廿七日

仁右衛門殿

〔31〕（佐藤仁右衛門永湯守願につき達書）

柴田郡前川村之内青根温泉守佐藤仁右衛門儀、御金山方へ献金仕永湯守可被仰付旨御郡奉行連名順々被仰渡候ニ付右壺巻指出候処、右湯守佐藤仁右衛門儀文化之度品有之闕所被仰付候由之儀品々相達吟味可相達旨別紙如壺巻之吟味可相達旨御附札を以被仰渡承知仕候、係御金山下代吟味承届委細別紙之通伊藤宗五郎儀申聞吟味仕候処、安政五年之度右温泉年限明ニ付請負年限継被相免候之砌も右仁右衛門を以被相免相ミ得、乍勿論運上金年々御郡方へ相納同所役々末書を以両替所御金山方へ指出取納罷成、随而ハ於御金山方ハ連綿ニ右仁右衛門ニ取扱来此般取合罷成候得ハ申下候、改而於御金山方跡地善兵衛之儀相心得取扱振行違候ニ付係御金山下代承候得は、品有之文化之度闕所ニ被相行跡地

善兵衛ニ有之然るヲ佐藤仁右衛門を以永湯守願申上候

儀ハ今更土貢可申上様無御座不調法至極之旨別紙之通

跡地善兵衛申出候間、御郡人別帳無御座候上ハ此末之

儀ハ右善兵衛を以取扱候方可然と吟味仕候、且右青根

之儀ハ人頭四人之内右善兵衛儀永湯守ニ罷成候得は、

残人頭三人之者自然株離れ候姿ニ罷成名前振合御指図

之上全体之儀ハ別而吟味可相達品々大肝入吟味も相見

得申候処、前書にも相見得候通安政五年之度右壱名を

以年数請繼願出各様御下知之上壱人ニ而請負被相免相

見得、左候得は連綿と壱人湯守有之候条右之趣を以

向々御吟味罷成候様仕度、不少献金仕最早御賞之際に

も罷成候間、向々早速御吟味罷成候様仕度と相渡壱卷

并係下代申聞候、別紙指添此段申達候、以上

六月

曾根惣太郎

廿四日

奈良坂喜右衛門

如此御金山方役々申聞候間、尚吟味可被申聞候事

六月

監物方

廿七日

御郡奉行衆え

尚吟味可被申聞候事

七月

宮左守

二日

御代官衆

猶吟味可被申聞候事

新英記

七月四日

大肝入

大沼十郎左衛門殿

柴田郡前川村青根温泉守佐藤仁右衛門儀御金山方へ献

金を以永湯守御免被成下候由之儀ニ付、吟味被御聞届

同村ニ佐藤仁右衛門と申者無御座、当代善兵衛と申者

仁右衛門と名乗願立候ものニ相見得候得共、振合申候

之間御指図被成下度別紙之通申上候処、御金山方御吟

味被御聞届候上、尚御吟味可申上旨追々共御壱卷を以

被仰渡承知仕吟味仕候処、善兵衛儀名前違を以願立候

事に無相違候間、御下知之趣右同人え首尾仕献金取立

上納仕候様首尾仕候処、御金山方へ直納仕候段御取納
手形写ヲ以別紙之通肝入久七申聞候間、右之趣を以御
首尾被成下度候段、右善兵衛永湯守被仰付候共外同所
喜右衛門等三人之者共湯治人宿屋を始諸事は迄之通ニ
仕候様御吟味被成下度被相渡壹卷指添此段共申上候、
以上

柴田北方大肝入

大沼十郎左衛門

子ノ

八月

英記様

猶以御運上代之儀も是迄之代高を以永受ニ被成下訳ニ
可有御座候哉、年数請ニ可有御座候哉、尚御吟味被仰
渡候様被成下度此段共申上候、以上

如此申聞候所、御金山方へ相納置候金子ハ壹宇仮納ニ
相成居候而相見得、此度之御下知之廉を以本納之首尾
合相受候後壹卷取都相達不申候得ハ半途之様ニ候間、
本納之首尾合受候様可有之候事

新英記

八月十六日

大肝入

大沼十郎左衛門殿

如御附札之被仰渡候間、御書面之趣を以本納之首尾在
之御取納手形此壹卷へ相添早速可被申聞候事

大肝入

大沼十郎左衛門

八月十九日

肝入

久七殿

御付札ヲ以被仰渡候間、委細御書面之趣を以本納之御
手形此壹卷へ指渡可被申聞此段共申遣候、以上

肝入

久七

子ノ

八月廿日

青根湯守

善兵衛殿

〔32〕柴田郡前川村之内青根温泉請負并宿屋渡世振之義左二奉申上候事

柴田郡前川村之内青根温泉請負并宿屋渡世振之義左二奉申上候事

青根温泉請負之義天保之凶年前は御村老村請負ニ罷成地本ニおゐて拙者初四人共ニ御役錢取立主立仕居申候、品は新規湯家作等立替仕其後不作等ニ相成湯治人不足罷成候得は、御役錢上納可仕様無之仕合ニ奉存候間仍而減役奉願上候処、御向御役様御吟味難為成訳ニ被仰渡、又々押て出湯之義上湯仕御役錢出高ヲ以上納御免被成下度段々奉願上候、御役錢殘翌年上納仕候得は御村一村請負之義難為成訳ニ罷成、其後拙者義老二人而出湯受負被仰付置年々御役錢も無滯上納仕候罷在申候、春秋湯家作手入も拙者計仕■候、去ル嘉永年中新湯名号湯出湯式々所新規開発御免罷成申候、是迄数年請負湯守仕居申候処、脇三人之者共御役錢取立仕候者ニは無御座宿屋老筋ニ御座候、宿屋之義は是迄之通一統ヲ以仕候間、此度拙者義永湯守願上候而も別義無之年々湯治人より出湯御役錢取立仕上納申上候のミの事ニ御

座候、右之段宜敷被仰上被成下度奉存候、已上

柴田郡前川村之内

青根開発湯守

善兵衛

〔33〕乍恐奉願候御事

乍恐奉願候御事

青根湯守共先年は四人ニ御座候処、(一) 節死亡ニ罷成當時喜右衛門、七兵衛、拙者三人ニ而(一) 是迄湯治人罷越候節ハ往古より湯治人(一) 之内ニ而宿仕罷在候処、拙者儀家作候義ハ被遊御存候通喜右衛門、七兵衛家作よりハ間数も御座候に付湯治人も右兩人之者共よりハ相過宿仕罷在候処、去年七月初喜右衛門方より拙者ニ罷越候様申聞候間罷越候処、尤七兵衛儀も罷越居右喜右衛門方より拙者方へ申聞候ニハ湯治人不足ニ宿仕候而ハ此末相続仕兼候間、此已後ハ湯治人入組之高を以甲乙無之様人割合又ハ拙者方ニ而所務仕候木錢代之内喜右衛門、七兵衛兩人之者共より

よけいの木錢配分仕くれ候様ニ申聞、尤所吟味之事ニ御座候間、猶また木錢割合より人割合之方等御座候杯七兵衛方より申聞旁々行当候へ共及相談ニ吟味仕候処、扱又是迄宿仕候義ハ湯治人之心入次第勝手を以拙者方へ御出被成候御方も在之、又ハ喜右衛門、七兵衛方へ宿付被成候御かたも在之、此儀は如何様共吟味可仕様無御座奉存候処、拙者儀先年兩度類焼仕かり金も数々在之、其後大凶作等ニ而■

御上様より御手当等被成下難有仕合ニ奉存、漸々露命相続仕罷在候処、前書ニ申上候通再応申聞候間少分之義ニ御座候ハ、合力も可仕と申談候へ共聞入不申に付、当年ニ限り拙者方ニ而所務仕候木錢代右両人之者共よりよけい分割合配分可仕由相談仕候処、又以申聞候ニハ当年より向三拾ヶ年廿ヶ年拾ヶ年七ヶ年杯々追々に申聞家数も無御座所柄土貢挨拶ニも行当候故、去七月より拙者方に而所務仕候木錢割合喜右衛門、七兵衛方へ遣候処、年数客来去秋之様ニ木錢配分仕候而は拙者甚以相痛候、尤家作之義ハ前書ニ申出候之間数も在之御飯屋御次御大所向等迄年々修覆仕候義ニ御座候へは、

右両人之者共よりハ万事入料も相過罷在候故、右木錢人割合仕候而ハ此末相続可仕様無御座奉存候間、少分之義ニ御座候へは同職之儀ニ御座候間合力も可仕存入ニ当春中より段々は迄両人之者共え相談仕候所聞入不申、是^ハ悲人^ハ割合ニ不仕候へハ相続罷成兼候由、尤当年三月中より湯治人參次第人割を以宿仕候処、前文ニ申上候通拙者方へ御出被成かたも在之、又ハ喜右衛門、七兵衛方へ宿付被成候御かたも御座候所、客宿付始末大ニ彼是と取込湯治人之心入ニも不罷成事ニ而客參ル度毎ニこまり入、勿論当月初嶽參詣之者伊達より被參候客宿付之義に付遠刈田え相戻り泊り候者も在之、三夜泊り之心指參り候者ハ二泊り、式夜泊り之參り者は沓泊りに而罷歸り候体ニ而青根之不景氣ニ罷成此末相続可仕様無御座奉存候、今様之儀

御上様え申上候義は申上候も恐多甚遠慮至極ニ奉存候へ共、当春中より此末人割合廻り宿仕候に付不及是悲奉願候条何卒先年より仕来り通御吟味被成下度奉願候一 当所え先年より 御上様御役人様御廻村に付被遊御出候節御宿夫卯時御名御賄代御払方被成下候而

も不足分足代万事之儀湯守共ニ而相勤是迄罷在候
処、去年御殿御はそんな御見分被遊候に付七月九月
十月三ヶ度御役人様被遊御出候節御宿夫卯時足代
之義喜右衛門、七兵衛方へ相続仕候処、右兩人方
より拙者方へ申聞候ニハ仁右衛門儀

御殿守之義ニ御座候間持前之儀ニ御座候間、相か
まい申儀無御座候由申聞候処、御役人様御出も指
かゝり候間其儀ニまかせ御宿仕罷在候処、しかし
御用支ニ罷成候ハ、歩夫ハ手伝ニ可申段申聞候所、
去年限り候御事ニ御座候ハ、

御上様御用之儀ニ御座候間、拙者老人ニ而一字持
前ニ仕勤上候而も不苦御事ニ奉存候処、此末幾度
御用ニ而被遊御出候儀も相知不申候所、拙者儀
御殿守之儀ニ御座候間、御宿ハ仕候共夫卯時足代
等迄拙者老人ニ而此末勤上兼候節ハ御用支ニ罷成
候間、此段御吟味被成下度乍恐奉願候、以上

青根

御殿守

佐藤仁右衛門（印）

五 山林

〔34〕乍恐覚書を以奉願御事〔宝永五（一七〇八）年〕

乍恐覚書を以奉願御事

柴田郡前川村青根新御林之内長三丁程横式丁程之所、
北ハすみ川切南ハ金山沢切西ハ物見岩切東ハ野山境切
御湯守之者共薪山ニ此度被明下度奉願候、貞享元年ニ
花房御林之内梨ノ木平山長三四丁横式三丁程之所薪山
ニ被明下候得共伐尽ニ罷成渡世相続仕兼申候、先年小
原吉助様御山林為御見分当御村へ御出被成置候時分被
仰付候ハ、薪山無之候得而ハ湯守之者共迷惑ニおよひ
申儀ニ候間、野山湯本近所新御林ニ相立指置可申由被
仰付候条、右新御林相立置申候薪山伐尽次第二段々被
明下跡山又以守立着上ヶ候様ニ被仰付候間、右薪山願
之通被成下度奉存候、左候ハ、跡山ハ守立指上可申候、
湯本之儀ニ御座候条御国元ハ不及申ニ他国より御湯治
之衆御座候故大分之薪も相入申故ニ嶽下之儀田畑も無
御座候得は、馬相立可申様も無御座費用取抔相頼為伐
申仕合ニ御座候間、遠方より薪取可申様も無御座候条
御憐愍を以願之通被成下渡世相続仕候様ニ奉願候、以

上

柴田前川村青根湯本

孫右衛門

宝永五年子ノ六月廿一日

同 二右衛門

同 喜右衛門

同 七兵衛

同村肝入 甚十郎

茂庭三太夫様

只野平八郎様

吉田儀右衛門様

柴田郡前川村青根湯前上ノ平山

へけ石山御林之内より青根湯守四人
之者共炊料伐方之場所年々被相渡帳

御山守

佐藤仁右衛門

同

喜右衛門

寛政六年八月十日

■ 目判

菅野四郎助（印）

柴田郡前川村青根

一 湯ノ前上ノ平山

へけ石日当山

右式ヶ諸御林^(マ) 長拾貳丁

横八丁半

此坪数三拾六万八千四百坪

内

肝入

久治

（表紙）

「

〔35〕 柴田郡前川村青根湯前上ノ平山へけ石山御林之

内より青根湯守四人之者共炊料伐方之場所年々被

相渡帳〔寛政七（一七九五）年〕

（表紙）

」

一 壺ヶ所 長式丁

横壺丁半

但湯ノ前上ノ平山之内東ハ地付山境、西ハ到

湯沢切、南ハ到湯道切、北ハ野山境迄、青根

湯守共炊料山当年分山割如此

此野年御役代寛永代七^ノ式百文

右之通御手前共引添引渡候条、右境之より外え少も伐
込不申候、御留木之類ハ細木ニても立置候様惣而御林
猥り之儀無之様首尾可被申候、御役代之儀ハ申渡次第
無延引上納可有之候、其節本帳付渡シ之首尾可申候、
以上

郡 三右衛門（印）

寛政三年

十月

鈴 平右衛門（印）

小 利助（印）

大肝入

日下嘉右衛門殿

同村

肝入組頭御山守衆中

湯前上ノ平山御林之内

一 壺ヶ所 長式丁

横壺丁半

但東ハ到湯道切、北ハ到湯沢切、西ハ金山沢切、

南ハ花房道切、当年分山割如此

右之通引渡申候条前文之通相心得可被申候、以上

郡山三右衛門（印）

寛政四年

三月

梅津文太夫

同

一 壺ヶ所 長式丁

横壺丁半

但西ハ金山沢切、北ハ花房道切、南東ハ極印境切、

当年分山割如此

右之通引渡申候条前文之通相心得可被申候、以上

郡山三右衛門（印）

寛政五年

三月

小嶋信十郎

同

一 壺ヶ所 長式丁

横壺丁半

但南東折廻シ極印境切、西は去年分伐境切、北は新湯道切

右之通引渡申候条前文之通相心得可被申候、已上

山路長太郎(印)

寛政六年

八月

菅野四郎助(印)

同村

肝入組頭御山守中

同

一 壺ヶ所 長式丁

横壺丁半

但南東折廻シ極印境切、北は新湯道切

右之通引渡申候条前文之通相心得可被申候、以上

寛政七年

五月

斎藤仲五郎(印)

菅野四郎助(印)

〔36〕乍恐柴田郡前川村御百姓善兵衛奉願候御事〔文化

五(一八〇八)年〕

乍恐柴田郡前川村御百姓善兵衛奉願候御事

居久根廻ニ自分植立

柴田郡前川村御百姓

一 杉 壺本

善兵衛

但シ四尺五寸廻り

右之通拙者居久根之内朽木同様ニ罷成候杉御座候処、大風等之節風返罷成居家破損等も無心元奉存候間、被下置修覆等え相用候様被成下度奉存候条、此段宜敷様被仰上被成下度奉存候、以上

柴田郡前川村御百姓

善兵衛(印)

文化五年

八月

組頭

松之助殿

肝入

久吉殿

右之通申出候間、如願之居久根通り自分植立之杉壹本被下置居家修覆仕御百姓相続仕候様被成下度、此段如斯ニ申上候条宜敷様被仰上被下置度奉存候、已上

右村与頭

松之助（印）

同年同月

同 肝入

久吉（印）

仮大肝入

嘉蔵殿

右之通願申出候間、如願之被下置居家修覆仕候様被成下度奉存候、代苗木植繼之儀ハ同格之通首尾可仕此段共如斯ニ申上候、已上

仮大肝入

嘉蔵（印）

同年同月

甚左衛門様（印）

十右衛門様（印）

無異儀候間、伐方相片付候ハ、早速申出、伐請極印相請可申候、代苗木植繼之儀ハ兼而之通首尾可申候事

〔37〕（御林払下の儀につき達書）〔安政七（一八六〇）

年〕

五月廿八日

熊谷齋

御代官衆

御郡方横目衆

山林方本々衆

横目衆

御役人衆

山林方係り

両替所御役人衆

同係り

御郡御役人衆

柴田北方前川村御嶽山御林之内日当山片石長式丁横壺
丁此坪数七千式百坪雜木壺尺壺式寸廻りより五尺八九
寸廻り迄間原立之毛上同村青根温泉守共薪料安政七年
より末式々年伐方御払被成下度村方願書大片入申聞候
間、当御廻村之節山林方横目小嶋源四郎、同加勢御役
人小原熊治、御郡方係り御役人齊辰平、立合見分仕候
処、委曲別紙御直付書ニ相見得候通り之毛上金壺両式
歩ヲ以薪料ニ当来手代方被払下候方ニ吟味仕候条、尚
御取合御吟味被成無御異儀御座候ハ、御郡方横目連名
ニ被仰下候様仕度指添相達候、以上

四月

古山常治

大友運三郎

小嶋源四郎

鎌田正五郎

齊辰平

尚以同処之儀は前々より温泉守共御払被成下来候
間、此段も相達候、以上

熊谷齋

五月十五日

同■印定之書方

見届

小嶋源四郎

此ハ別紙

柴田郡前川村御嶽山御林之内青根温泉守共え薪料ニ
払被成下御直付左之通り

嶽山御林之内

一日当山御林

長式丁横壺丁

此坪数七千式百坪

但壺尺壺式寸廻りより五尺八九寸廻り迄雜木間原
立之毛上東伐境より壺丁西へ式本ならぬ木境奉峯
境より式丁北え柏木境
此御払金壺両式歩也

但金壺歩ニ付千式百坪

帳合

鳴原善治 はん

右之通御座候、以上

安政七年 山林方

閏三月

来七月壹季上納

右之通御直付書ヲ以御払被成下旨被仰渡承知仕候、請証如斯申上候、已上

柴田郡前川村之内青根

十右衛門

元治元年

十二月

同 喜右衛門

同 御山守 七兵衛

同 同 善兵衛

同 組頭 伊兵衛

同 肝入 久七

写 遠藤善藏判

柴田郡前川村嶽山御林之内日当山片石御林雜木毛上同
村青根温泉守善兵衛等四人え薪料被払下御直附請書左
ニ申上候
一 日当山片石御林壹ヶ所

長サ式丁横壹丁

此坪七千式百坪

但し雜木毛上壹尺二三寸廻りより五尺八九寸廻迄

間原立毛上来丑ノ年より末二ヶ年伐払可申如斯

此御払金貳両貳朱也

柴田郡前川村嶽山御林之内日当山片石御林雜木毛上同
村青根温泉守善兵衛等四人え薪料被払下御直附請書左
之通申上候
一 日当山片石御林壹ヶ所

長サ式丁横壹丁

此坪数七千貳百坪

但し雑木毛上壹尺二三寸廻りより五尺八九寸廻り

迄間原立来丑ノ年より末貳ヶ年伐払可申如斯此

此御払金貳両貳朱也

来七月壹季上納

右之通御座候、已上

山林方

元治元年

十二月

柴田郡前川村嶽山御林之内日当山片石御林雑木毛上同
村青根温泉守善兵衛等へ薪料被払下御直付書別紙之通
相廻し申候、村方被御聞届被仰聞度指添申達候、已上

遠藤善蔵

子ノ十二月七日

新妻英記様

齋 辰平様

皆川善治

如斯申来候間、請書為指出候様首尾在之可被申聞候事

齋 辰平

十二月八日

大肝入

大沼十郎左衛門殿

〔39〕（御林払下の儀につき達書）

見届

小嶋源四郎

柴田郡前川村嶽山御林之内青根温泉守共薪料ニ御払
被成下等直附左之通

一日当山御林 長貳丁

横壹丁

此坪数七千貳百坪

但し壹尺壹貳寸廻りより五尺八九寸廻り迄雑木

間原立毛上此御払金壹両貳歩也

但し金壹歩ニ付千貳百坪

右之通御座候、以上

閏

三月

御林方

柴田郡前川村嶽御林之内日当山御林伐境より西え二本
ならぬ木迄耆丁南へ伐境迄二丁前書之通御払被成下度
請書如此申上候、已上

閏三月廿三日
肝入

久七様

柴田前川村嶽山御林之内青根温泉守共薪料ニ御払被成
下御直附別紙之通山林方より相遣参候条、請書指出候
様首尾可有之候、以上

六 取引・交流

〔40〕貸方手扣〔寛政九（一七九七）年～安政三（一八

五六）年〕

齊 辰平

閏三月十九日

（表紙）

大肝入

「嘉永六年

大沼十郎左衛門

貸方手扣

尚以毛上調も無■之通り伐境等判書ニ加へ取調指出候

丑ノ正月吉日」

様首尾可有之、此段被申渡候、以上

大宮忠藏殿

拙者共薪料山御直附ヲ以被仰渡承知仕候、右ヶ所別紙

文化 丑九月

一 金三切也

当座利足かし

ヲ以申上候通ニ御座候、御請書如斯御座候之儀も御座
候ハ、御手元様ニて何分宜敷様御認指上被下度奉願上
候、以上

口入 我妻直助殿

役屋前より

文政七 申十一月

右同人

一 金六切半卜 吉兵衛殿

拾五匁五分 同かし

受人 佐藤吉郎殿

✂

文政八 西十二月

同 同

一 金壹切也

同かし

✂

遠藤勘五郎殿

文化十四 九月

利足附

一 金拾切也

かし

受人 直助殿

文政十二 十二月

利足同

一 金八切也

かし

受人 清兵衛

小室庄七殿

受人 直助殿

寅六月

利足同

一 金四切也 かし

大沼勘十郎殿

文政五 十月 利足附

一 金四切也 かし

御預り金之内 受人 亀吉殿

未ノ八月 利足同

一 金貳拾切也 かし

受人 甚八郎殿

大沼亀吉殿

文政十貳丑四月 利足附

一 金五切也 かし

同所 庄治郎殿

小室久藏殿

文化十四 三月 利足附

一 金六切也 かし

文化十四 七月

口入 大沼久兵衛殿
利足同

一金八切也

かし

同 大沼久平殿

文化十五 三月

利足同

一金六切也

かし

御預り金之内

同 大沼久平殿

文政貳 十二月

利足同

一金四切也

かし

御用金之内

文政四 五月

利足同

一金四切也

かし

大沼久兵衛殿

文化十三 九月

利足附

一金五切也

かし

口入 直助殿

文政元 六月

利足同

一金六切也

かし

川崎御預り金之内 受人 直助殿

大宮軍治殿

天保七 二月

利足附

一金八切ト

かし

七分五り

口入 卯之吉

受合 源吉

天保七 五月

利足同

一金四切也

かし

我妻銀蔵

文政六 四月

利足附

一金三切也

かし

口入 久蔵殿

大宮半十郎殿

半蔵殿

寛政十三 十二月

利足附

一金三拾三切也

かし

大宮寅吉殿

天保六 十一月 受人 卯之吉殿
一 金四切也

藤六方ミちよ

天保六 七月 受人 軍治殿
一 金貳切也 庄太夫殿

大沼千代吉殿

天保六 九月 受人 三代吉殿
一 金貳歩半也

新地 佐藤七右衛門殿

天保六 十二月 利足附
一 金四切也 かし 受人 卯之吉

天保七 二月 利足同
一 金四切也 かし

同 同人

佐藤重松殿

文政三年五月 利足附
一 金八切也 かし

川崎様御用金之内 口入 久蔵殿

佐藤市太郎殿

天保六 八月 利足附
一 金貳切也 かし

受人 秀介殿

天保七 貳月 利足同
一 金四切也 かし

天保七 五月 利足同
一 金四切也 かし

大沼千代吉殿

天保六 九月 利足附
一 金貳切半也 かし

永野清兵衛殿

清七殿

文政十二 十一月 利足附

一 金四切也 かし

文政十二 十二月 利足同

一 金貳両也 かし

圓田村ノ銀治殿

同村受人 卯之吉殿

天保六年 十二月 利足附

一 金八切也 かし

天保七 二月 利足同

一 金七切也 かし

小泉村 銀右衛門殿

家督受合人

寛政九 三月 喜右衛門殿

一 金三拾切也

肝入

寛政十二年五月吉日 同人

一 金貳拾切也 同村組頭

新吉殿

沼部 運右衛門殿

寛政九 八月

一 金四切也

小村崎村

借主

庄七殿

受合 伊惣治殿

文政九年三月 同 喜左衛門殿

一 金拾三切五分也

文政六年十月 同人

一 金貳拾切也 受合 喜左衛門殿

文政五年九月三日 同人

一 金貳拾切也 受合 喜左衛門殿

右川崎様御預金之内

村田本町 長藏殿

同所口入

享和元年十二月 治作殿

一 金貳拾切也

已十二月

一 金三十切 同人

同町 石田屋安左衛門殿

年符証文

享和四年三月 受合人

一 金拾五両也 願勝寺様

白石本町 石田屋近藏殿

文政十三年寅七月

一 文金九切也

同町 関屋清之助殿

文政十年いノ九月

一 金五十切也

圓田村 林吉殿

文政十三 十一月 受人

一 金貳切也 長谷川勇藏殿

同親類

清松殿

平澤御家中 太田長治殿

文政十三 十月

一 金三切也 受人 堀内直行殿

口入 長谷川勇藏殿

海老穴村 借主

十三郎

文政三 八月 組頭同

一 金貳拾切也 幸十郎

肝入同

卯左衛門

遠刈田受人

大沼久平

平澤御家中 宇佐美勝能様

嘉永二酉九月十二日

一 金貳拾五切也

宮町 丹野喜衛殿

一手形四十両 喜膳殿

八幡町 善蔵殿

一 金貳朱ト代百文

先々高不足

一 金貳朱ト三百十八文

七月廿五日より

八月五日迄々高

一 金壹歩ト三百三十文

八月六日より不足高

々金貳歩ト七百四十八文

安政三辰年 薫三郎殿

八月十三日

一 金四両也 用立

同十一月廿一日

一 金五両也 用立

相場三斗八升

内玄米八石受取

同十二月十五日 此金廿十切ト八十四文

一 金拾壹切也 用立

夫八郎右衛門殿

差引

々金廿六切也 用立

(裏表紙)

「佐藤氏」

「41」清酒通〔文化二(一八〇五)年〕

(表紙)

「文化貳年

清酒通

うし

正月吉日」

三月廿一日より八月七日迄

一 正味九百四拾貫

此代八拾壺×七百八拾文

一 拾匁

はた壺流

一 四匁五分

萌黄草風呂敷

去年中

一 四匁五分

布三反

×拾九匁ト

角代八拾壺×七百八拾文

内

一 丸代壺×五百文 駄賃代受取

指引而

銀拾九匁ト

代七拾七×貳百八拾文

此金拾六切七分貳り貳毛六才

一 金五拾七切壺分七り六毛 預り金

又

指引而

四拾切四分五り三毛四才

預り金

右残金当町源兵衛殿御取揃ヲ以来とらノ年より午ノ年迄向五ヶ年符ニ御申合仕候、右年符金返済之儀ハ酒調送り申候砌勘定之節八切九石宛御引落可被下候、依而如件

石田屋安左衛門

十月十三日

青根湯本

善兵衛殿

丑ノ十月十三日改

一 金四拾切四分五り三毛四才（印）

但し壺ヶ年ニ八切九り宛返済可仕候事

二月より七月七日迄

一 四百八拾貫 酒分代

此代三拾八×四百文

内（ここから「三拾五×七百文」まで横棒引抹消）

一 貳×七百文 駄賃代

下中御済被下候分

指引而

三拾五〆七百文 下中
此金七切六分八リ

右は寅ノ年返済（印）

一 酒千貳百貫

此代八拾九〆文

内卯ノ年分

一 四拾〆四百五拾文 年符金

此金貳両ト九リ分

指引而

四拾八〆五百五拾文

右之通槌ニ御座候（印）

十一月六日

（裏表紙）

「村田町

石田屋安左衛門

青根

佐藤仁右衛門様」

〔42〕 勘定調書（天保一四（一八四三）〜嘉永三（一八五〇）年）

勘定調書

天保拾四年十月

証文有り

一 金五拾八切九分壹リ七毛也

但無利足申合

内

一 金三拾四切貳分五リ也

但酉ノ八月十五日請取

右ハ境野村羽山頼母子より入

一 金三拾切八分六リ

但酉ノ十二月十五日受取

品々右同断

指引残金

一 六切壹分九リ三毛

但右ハ青根江入ル分

左之勘定ニ而指引勘定ニ相立候事

天保十四年卯七月覚

一金貳拾兩也 証文有り

此リ金八拾五切也

元利合百六拾五切也

一金五兩也 証文有り

此リ金拾八切貳分五リ

元利合金貳百三切貳分五厘

内

一金六切壹分九リ三毛

但右金ハ頼母子金請取

指引殘金也

指引殘金

嘉永三年戌八月改

一金百九拾七切五リ七毛

右之通御用立金ニ御座候

頼母子懸金御用立候調左之通

西ノ十月十五日

一金壹切五分也

此リ金粉貳分壹リ也

同十一月十五日

一同壹切五分也

リ壹分八リ八毛

同十二月十五日

一同壹切五分也

リ壹分六リ九毛

戌正月十五日

一同壹切五分也

リ壹分五リ也

同二月分

一同壹切五分也

リ壹分三リ八毛

同三月分

一 同壹切五分也

リ壹分壹リ三毛

同四月分

一 同壹切五分也

リ九リ四毛

同六月分

一 同壹切五分

リ七リ五毛

十 同金壹切五分

一 元金

〆金拾貳切也

此リ壹切壹分三リ壹毛

元利〆拾三切壹分三リ壹毛

右戌ノ八月改

右之通ニ御座候以上

佐藤勘三郎（印）

戌八月

佐藤

仁右衛門様

同

善右衛門様

秋保

勘三郎殿より勘定調

〔43〕金華山道中日記（金銭貸方扣帳）〔嘉永二（一八

四九）年（明治五（一八七二）年）

（表紙）

〔安政四年

金華山道中日記

巳二月吉日 〕

小山貞治殿

安政三年辰ノ四月

一 金貳歩也 御用立

百八ヶ月分 子ノ十二月迄

リ三切六分也

元利五切六分也

大森辰五郎様

安政五年十二月廿一日

一 金壹両 御用立

子ノ十二月迄

七十六ヶ月分 利五切六り六毛六才

元利合九切六り六毛六才

申十二月廿日

内金壹切也 御利足方受取

丑ノ十二月廿五日

内金壹切也 受取

阿部清七郎様

万延元申八月四日

一 金貳両也 御用立

戌十二月 此金壹切也 受取

いノ十二月 同金壹切 受取

うし 十二月 同金壹切 受取

新吉

水野十五郎殿

安政四巳年十月

一 金貳両也 かし

同年

一 金五切也 かし

×金十三切也

九十ヶ月分子ノ十二月迄

此リ十九切五分也

元利合金三十式切五分也

野上町 米吉殿

万延元申六月三日

一 金貳切也 かし

×

同人子 清吉殿

明治三年

午九月廿日

一 金拾両也 かし

前川本城ノ 清助殿

卯十月廿七日

一 金三歩也 かし

万延二年

酉ノ四月十五日 十八日迄

一 三十〆百四十文 御郡奉行様

老口

慶応三丁卯年

九月廿八日より十月朔日迄

一 金三拾五切半ト

式口 代三百四文

右ハ御山の御釜相ぬけ候ニ付人五人死、仍而御代官様并大肝入衆手代肝入殿御出村ニ付御賄料如斯御座候事

慶応四年

辰二月八日

一 五〆三十三文

石森様

二月十六日

一 七百五十五文

菊地様

四月朔日

一 八〆百八十六文

北作右衛門様

閏四月廿九日

一 十五〆三百四十式文

御横目様

御諸役様

大肝入衆

五月廿日

一 壹〆貳百九十五文

肝入衆

六月十五日 廿四日迄

一 貳十八〆百五文

平井様

八月晦日

一 四〇百八十五文 新田様

九月十九日

一 八〇貳百三十一文 氏家様

一 十一〇六百四十一文 損料

〆金壺切ト八十〆三百七十三文

内金貳両ト壺〆百廿八文入

引〆六十貳〆四百四十五文不足

三口 代金直し貳拾四切三朱ト代五百七十文

辰十一月十八日

一 六〆五百五十文 河田様

四口 内三〆文入

明治二年

巳ノ三月十四日

一 四〆四百八十文 伊藤様

五口 内九百六十文入

巳ノ三月十五日

一 七〆九百七十五文 坂時之介様

六口

巳ノ五月十日

一 壺〆八百四十五文 南部様

七口 御家中

巳ノ五月十九日

一 廿八〆九百四十文

御手形十九枚入

さし引

八口 〆廿七〆四十文

巳六月八日

一 味噌壺升

此代壺〆貳百文

一 米六升壺盃

十二月

内米貳升五合 受取

巳ノ七月十九日

一 米三升壺盃

同

一 貳〆八百五十文 玉山様

九

米方 〆 壹斗六升五合

九口

〆 金三十五切半 卜代百四十 〆 廿八文

外

一 白米 壹斗

同

一 壹 〆 貳百文 味噌 壹升

明治三年

午ノ

沼邊戸尻 良助殿口

明治五申九月

一 金拾五両也 用立

同人

同年十月 幸吉殿

一 金貳拾五両也 用立

沼邊村 弥平殿

明治五申九月

一 金五十切 用立

村田 大沼庄治郎殿

明治五 十一月

一 金七十五両也 米調金預り

狩野十五郎殿

未正月晦日

一 金三分也 用立

鉄炮 壹丁 預り

内下た 百三十足 受取

内そは 四斗 受取

渡辺周蔵殿

未二月

一 金壹分 用立

向之貞吉殿

子ノ十月十六日

一 金貳両也 御預り金之内用立

✂

同 十右衛門殿

一 五十六文 利足不足

子九月廿三日

一 金壹両也 用立

✂

川崎ノ本町 喜太郎殿

五月十二日 子供

一 金壹分貳朱也 かし

✂

善藏殿

門五郎殿

八月六日

一 代四✂三百七十七文 不足かし

七月十八日御城下柳町 庄治殿

一 代十壹✂五百文 不足かし

✂

巳八月三日御城下南木町 佐藤や運藏殿

一 代七百元 入用御用立

✂

御城下立町壹丁目仕立や 多々田屋市兵衛殿

いノ七月廿四日

一 代壹✂七百元 御用立

✂

御城下荒町 庄吉殿

安政五年八月六日より十七日迄

一 代六✂七百十五文 入湯諸入料不足かし

✂ 手形直し十七切八十五文

同肴町 源之助殿

同五年八月五日より九月四日迄

一 代十三✂五百廿九文 諸入料かし

✂

肴町川村屋源吉殿

嘉永二 八月十三日

一 金拾六切也 かし

但品受取候得共なら坂殿相送り

同三年九月朔日

一 金八切 入湯中入料かし

壹✂五百十壹文

寅ノ八月 同かし

一 代拾壹✂八百拾貳文

✂金貳拾四切

代十三✂三百廿三文

とら九月

内五✂文 受取

當八持参

御城下北目町 長左衛門殿

亥ノ九月朔日

一 金壹切半ト六百十八文

子ノ八月

一 金拾貳切壹朱ト五十三文

✂金拾三切三朱ト六百七十壹文

川村屋 惣之丞殿

文久元酉ノ八月

一 金拾三切ト代貳拾八✂六百五十三文

同 惣之助殿

文久元酉ノ八月

一 代三拾貳✂四百五十壹文

南木町 庄司屋 萬吉殿

一 代六✂貳百七十八文 先分 勘定不足

七月廿三日より八月廿三日迄

一 代八✂七拾壹文 勘定指引不足

✂代拾四✂三百四十九文

金直し九切ト三百九文

小野村木戸之藤治殿

安政六年卯八月

一 金拾切也 かし

名取北方長袋村 萬吉殿

安政三年辰ノ七月

一 金五切也 かし

文久元子年

川崎御屋敷様方

一 大豆五石七斗也

相は壺斗七升下り壺升

此金

一 玄米壺石五斗五升

相は壺斗六升下り壺升

此金

川崎表御貸上方

文久二戌五月

一 金三拾切也 御用立

下町 福治殿

(以下「文久三いた年四月」から「此金式十壺切六分式
リ五毛」まで横棒引一本あり)

文久三いた年四月

一 金拾七切三朱也 御用立

大松太郎様

同

一 金拾式切壺朱也 此分 御用立

二口メ三十切

此リ三切三分七リ五毛

同八月廿二日

一 金式拾切也 御用立

吉 丑之進様

此リ壺切式分五リ

三口

〆五十四切六分貳り五毛

此内 御相場壺斗四升 但し壺升下り

一 米四石九斗五升

壺斗五升

此金三十三切也

御相場壺斗七升 但し壺升下り

一 大豆三石八斗九升貳合五夕

壺斗八升

此金貳十壺切六分貳り五毛

慶応元丑ノ年

三月

一 金六切也 御用立

此り壺切壺分

六月

一 金三拾切也 同

此り三切五分

右へ

一 大豆四石

壺斗三朱五合

此金貳拾九切六分貳り九毛

一 米九斗三朱貳合五夕

八升五合

此金拾切九分七り七毛

二口

〆

とら二月廿五日

一 金貳拾切也 廣治様渡

同四月十六日

一 金四拾切 松太郎様渡

同六月晦日

一 金四拾切 廣治様渡

同六月十六日

一 金四拾切 丑之進様渡

同九月廿四日

一 金四拾切 廣治様渡

同十月廿日

一 金五拾切 松太郎様渡

元利

ㄨ

とら十二月

一 玄米八石也

相は四升壹盃

此金百八十八切貳分一り五毛

同

一 大豆壹石六斗也

相は六升五合

此金廿四切六分一り五毛

とら十二月

一 金四十七切四分八り 御用立

リ七切壹分二り二毛

卯四月十一日

一 金拾両也 御用立

リ四切 村上連之助様

卯八月廿五日

一 金貳拾五両也 御用立

リ五切 巳之吉へ頼遣

卯九月廿三日

一 金拾五両也 御用立

リ二切五分 檜廣治様

元リㄨ二百六十六切壹分二毛

九月廿一日

一 金五切半ト貳百四十文 御代参方

ㄨ二百七十二切七分五り二毛

十月十九日

内大豆壹石六斗也 政吉殿より

伊兵衛殿より

内同八斗也

十一月

内米壹石六斗也

十一月

内米六石也

慶応三年

卯十二月元

一 金百貳拾七切五分貳り九毛

此リ

辰四月十八日

一 金拾貳切也

此リ

御隠居様方

万延元申九月

一 金拾五切 御用立

夫志賀丈右衛門殿

✂

十二月

利足七分五り受取

酉ノ正月元金直し子ノ十二月迄

四十九ヶ月分利金拾貳切貳分五り

文久三亥八月十三日

一 金拾貳切也 御用立

夫阿倍七郎様

✂

いノ十二月

利足壹切受取

殿様方

文久元酉ノ八月

一 金貳拾五切也 御用立

夫三井平馬殿

子ノ十二月迄四十二ヶ月分

此リ金拾七切貳朱也

慶応二年寅十二月より

一 金七拾三切八分壹り貳毛

拾ヶ年賦壹ヶ年ニ付七切三分八り壹毛貳才宛御渡し分

右ハ通帳相出し候上如此

屋形様御貸上

万延元申九月十四日

一 金五両也 御用立

肝入久七殿渡

〔44〕 覚

覚

午九月改メ

一金四拾五兩 御口入之方

右へ御預り大小引当

同月迄 右

一金七拾壹切也 利足不足

同月

一金貳拾兩 来秋迄御用立

たう座かし

右之通御用立申上候、以上

大沼屋正七

午九月

佐藤仁右衛門様

〔45〕 覚

覚

午十一月

一米八石

但し四斗入廿俵也

未五月廿四日

内金五兩

受取

但手形八十切也

同五月廿五日

一米四斗

六月十二日

一米八斗也

但四斗入貳表也

同廿日

一米八斗也

同貳俵也

七月十日

一米八斗也

同貳俵也

七月十四日

一 白米四斗

壹俵也

廿二日

一 同八斗

四斗入貳俵

同廿四日

一 同四斗

壹俵也

未九月朔日

✂ 内正金六兩也

弥 ■ 太郎

右之通

八月

大沼屋正七

青根ノ

仁右衛門様

此金拾五切也

但し六百文通用 壹✂六百文割

✂ 貳拾五切請取

利足分差引

五拾八切壹朱不足

寅五月改メ

一 元金四拾五兩

元金

一 五拾八切壹朱

丑ノ十二月迄利足分

一 貳拾七切也

寅十二月迄分

リ足

✂ 八拾五切壹朱

右之通御座候、以上

正七

戌ノ十二月元

一 金四拾五兩

此リ貳拾九切壹朱

亥十二月迄利足

一 貳拾七切也

子正月より十二月迄

一 貳拾七切

丑ノ正月より十二月迄

リ✂八拾三切壹朱

内 手形拾五切

亥七月請取

小割此金拾切

内 拾兩也

子六月廿三日

佐藤仁右衛門様

寅十二月

〔47〕 覚

覚

丑ノ七月廿二日	上酒壺升	一 三十六文	濁酒五合
一 貳百四拾文		四月一日	夫なか川
同十月廿五日		一 貳拾貳文	酢壺盃
一 手形八切也	善右衛門様さし上	五月十一日	夫同人
とら六月十日		一 八十文	米四斗
一 三拾貳文	豆腐貳丁	十三日	つきちん
十月廿五日		一 八拾文	同四斗
一 百五拾文	酒三盃	十六日	同四斗
同		廿四日	同四斗
一 拾八文	酢半分	一 八十文	同四斗
卯ノ九月十一日	生酒壺升	廿七日	同四斗
一 百八拾文	夫なミよとの	一 八十文	同四斗
同	同壺升	六月一日	同貳斗貳升
一 百八十文	夫なか川	一 四拾四文	
閏九月四日	酒五合	三日	同四斗
一 九十文		一 八拾文	同四斗
十月三日		七日	同四斗
		一 八十文	

八日	
一 八拾文	同四斗
十三日	
一 四十六文	同式斗三升
廿三日	
一 四拾四文	同式斗式升
七月一日	
一 八拾文	同四斗
二日	
一 五十四文	同式斗七升
十日	
一 八拾文	同四斗
十六日	
一 四百文	生酒式升
十七日	夫なみよとの
一 八拾文	米四斗
廿八日	
一 八拾文	同四斗
十六日	

一 七十文	同三斗五升
廿五日	
一 九十四文	同四斗七升
十月一日	
一 八十文	同四斗
十三日	
一 八十文	同四斗
同	
一 八拾文	同四斗
廿日	
一 八拾文	同四斗
一 七十式文	濁酒五合壹升
十二月三日	夫なか川
一 八拾文	米四斗
廿四日	
一 八拾文	もち米四斗
×御手形八切ト	
三×式百拾式文	

外二

丑ノ十月三日

一 貳ノ四百文 代御用立指引残り

とら九月廿六日

一 壹ノ百七十文 同断

但シ喜右衛門宛ニ而御用立

ノ

右之通御座候間御引合可被成下候、尤私借用仕候分も

御座候間御指引被成下度奉願上候、以上

庄治郎

辰ノ

十二月晦日

仁右衛門様

七 証文

〔48〕金子借用証文之事〔沼辺村、寛政九（一七九七）年〕

（帯）

「沼邊村運右衛門殿かし金証文」

金子借用証文之事

一 老歩判金四■切借用仕候、御利足之義ハ六拾切壹

切十月並相場を以元利共ニ当十一月中ニ急度返済

可仕候、為其証文如此御座候、以上

沼部かり主

運右衛門（印）

寛政九年八月五日

青根ニ而

佐藤仁右衛門様

〔49〕証文之事〔宮村遠刈田、寛政一三（一八〇一）年〕

証文之事

一 老歩判金三拾三切也

右之通り此度実正ニ借用仕候、利足之義ハ拾五両

老歩之利相加来犬之五月中元利引添返済仕候、為

後之証文如件

遠刈田

同氏半蔵（印）

寛政十三年十二月

大宮半十郎（印）

佐藤仁右衛門殿

佐藤仁右衛門殿

〔50〕（金子借用証文）〔小齋村、享和四（一八〇四）年〕

（端裏書）

「伊具郡小齋村証文」

一 壹歩判金貳切也

右之通諸雜用ニ行当申ニ付借用仕候処実正ニ御座候、
右金返済之儀は来月中ニ急度返済可仕候、為是証文如
斯ニ御座候、以上

伊具郡小齋村

三郎兵衛

享和四年三月

同 同

仲右衛門

青根

〔51〕（金子借用証文）〔文化五（一八〇八）年〕

一金貳切

玄米壹俵也

右之通借用仕候処、右金子之儀此度婚禮ニ付
行当借用申上候、且又御利足之儀ハ壹ヶ月ニ
六十切壹切之御利足ニ而当四月八月二度ニ御
元利共ニ急度御返済可仕候、若此者指支当御
座候ハ、口入方ニより急度御勘定可致候間、
為後日之口入相立証文仍而如此ニ御座候、以
上

青根借主

文化五年二月

庄七（印）

口入川崎

郷ノ

大宮吉左衛門（印）

善兵衛様

〔52〕（金子借用証文）〔川崎町、文化七（一八一〇）年〕

老歩判金六切也

一 右金借用仕候事実正ニ御座候、利足之義ハ御定之通り懸相可申上候、弁済義ハ来六月迄ニ元利共ニ急度御勘定可仕候、若指滞候節ハ口入方より無間違弁済可仕候、為後日新類受合手形一札相出如斯ニ御座候、以上

同新類口入

文化七年十二月

幸太郎（印）

川崎町借用

八内（印）

佐藤善平殿

〔53〕借用仕金子証文之事〔山形檜物町、文化八（一八一八）年〕

一一〇年

借用仕金子証文之事

一金五両也

但シ文字判也

右之通此度貴院御取次ヲ以只今慥ニ借用申処実正明白ニ御座候、尤返済之儀は当八月晦日限り拾五両え老歩之利足以勘定元利金共ニ急度返済可仕候、万一相滞候ハ、加判之者相弁急度返済可仕候、為後日仍而如件

最上山形檜物町

文化八年

借用主 四郎治（印）

未四月

青根湯元

加判 善兵衛

仙臺御領伊具郡木沼

宗畔院様御宿老

大浄院様

〔54〕金子店物請合証文之事〔文化一四（一八一七）年〕

金子店物請合証文之事

一文金八切也

右之通店物仕入金行当り借用仕候方実正ニ御座候、利足之儀は御定之通り御返済之儀は八月下旬訖度無間違御勘定可仕候、猶又仙臺表塗物方仕入金之

儀は御勘定之節間違等御座候ハ、口入方ニ而弁金御勘定可仕候、為後日之一札如件

借主

小室久蔵

文化十四年七月

口入

大沼久兵衛

佐藤仁右衛門殿

口入立合

我妻直助（印）

仁右衛門殿

〔56〕（金子借用証文）〔川内村、文化一四（一八一七）

年〕

一 金拾五切也

〔55〕証文耄札之事〔宮村遠刈田、文化一四（一八一七）年〕

証文耄札之事

一 耄歩判金拾切借用仕候事実正ニ御座候、利足之義ハ一ヶ月ニ六拾切耄歩之利ヲ揃急度無間違来月廿日迄ニハ返済可仕候、為其口入相立証文耄札如斯御座候、以上

借主遠刈田

文化十四年

遠藤勘五郎（印）

九月十四日

右之通り拙者共当諸上納ニ行当候ニ付此度御預り金之内拝借仕候儀実正ニ御座候、御返納之儀は来七月中御定之御利足付ヲ以御元利共ニ急度御返納可申上候、万耄拝借人指滞申儀も御座候ハ、始末人共方より急度御返納可仕、為其合口入并ニ始末人相立証文如件

川内村拝借人

千之助（印）

文化十四年十二月

同

左右吉（印）

同

清蔵（印）

青根

仁右衛門殿

同 庄八（印）

同 弥太郎（印）

同 萬五郎（印）

同 佐治右衛門（印）

同 清左衛門（印）

同 勇吉（印）

同 十吉（印）

同 与頭 吉助（印）

前川村与頭

門三郎（印）

右之通当諸上納ニ行当り御預り金之内拝借仕度早々申
出候間御貸付被下度奉存候、万壹差滞候儀も御座候
ハ、貴殿方より御村方へふり錢にて御勘定可仕、為其
末書如斯ニ御座候、已上

前河村肝入

文化十四年十二月 川内村兼役

青根 仁右衛門殿 久吉（印）

〔57〕証文之事〔宮村遠刈田、文政六（一八二三）年〕

証文之事

一 壹歩判金三切右之通慥ニ借用仕候事実正ニ御座候、
但し利足之義ハ壹ヶ月ニ六拾切え壹歩之利相加へ
元利共ニ当九月中ニ急度返済仕候、仍而為後日証
文如件

遠刈田

借主

我妻銀藏（印）

文政六年未ノ四月

口入

大沼久兵衛（印）

仁右衛門様

〔58〕証文之事〔小村崎村、文政六（一八二三）年〕

証文之事

一 金五両也 未ノ十月

右之通借用仕候事実正明白ニ御座候、此金御返済
之義ハ壹ヶ月ニ六拾切壹歩之割合を以来三月中ニ

ハ元利共ニ無相違御勘定可仕候、右金聊指滞候義
無御座候得共万一指滞候義も御座候ハ、請合并金
仕、御手前様えは御損相懸申間敷候、為後日一札
如斯御座候、已上

小村サキ借主

庄七（印）

文政六年十月

同村受合

喜左衛門（印）

仁右衛門様

〔59〕借用証文之事〔宮村新地、文政七（一八二四）年〕

借用証文之事

一 壹歩判金五切也

右之通借用仕候処実正ニ御座候、利足之義ハ定之
通り相捌申候、返済之義ハ当七月村頼母廿五日ニ
取附申候節急度返済仕候、若シ万一借用人指と、
こふり候ハ、私方より返金仕候、依而為後日証文
如此御座候、以上

新地借用人

佐藤庄太夫（印）

文政七年

五月

請合

丹野七兵衛（印）

仁右衛門殿

〔60〕指出シ手形証文之事〔文政一一（一八二八）年〕

（帶）

「前川村

龍藏

金三切半也 証文」

指出シ手形証文之事

一 鹿毛駒壹疋

但シ此買金六切半也

右之内金三切当月今日相立

残り金三切半来四月十五日迄

右之残金三切半来四月十五日迄ニ無間違御勘定可仕候、
若又借用人指滞候節ハ請合口入兩人方より急度并金可
仕候、仍為後証之一札如此ニ御座候、以上

借用人

龍藏（印）

文政十老年十二月八日

請合

門三郎（印）

口入

七兵衛（印）

仁右衛門様

〔61〕（金子借用証文）〔天保五（一八三四）年〕
（帶）

〔前川村極難渋之拾人え式拾切貸渡証文壺通〕

一 壺歩判金式拾切也

右之通り当諸上納ニ行当御村内極貧之者共拾人壺
人ニ付式切つゝ借用仕候義実正ニ御座候、但し御
利足之儀は式拾両壺之御利足付を以来七月紅花蒔
方仕節肝入久吉殿方へ懸方仕右御同人之所御手元
ニ而引留置紅花相払次第ニ急度御勘定可仕候、万

一拾人之内ニ而紅花蒔方不仕返金及兼候ハ、右之
分仲間弁金を以聊も無滞返金可仕候、為後日之肝
入組頭末書を以証文如件

借用人 專吉（印）

天保五年午十二月 同 庄右衛門（印）

同 千太郎（印）

同 十四郎（印）

同 清左衛門（印）

同 十郎治（印）

同 つね（印）

同 伴藏（印）

同 喜太郎（印）

同 久太（印）

青根屋敷 始末人

仁右衛門殿 権兵衛（印）

右之通御村内極貧御百姓共前文之通諸上納金ニ行当借
用申出候間、右返金之儀は前文之通りを以始末仕聊無
滞り返金為仕候間、私共方にて引請御勘定仕候間、依
而為後日之末書を以如此ニ御座候、已上

右村与頭

久右衛門（印）

同年同月

同村肝入

大吉^{（久カ）}（印）

青根やしき

仁右衛門殿

〔62〕証文之事〔天保六（一八三五）年〕

証文之事

一文金拾六切也

右之通り借用仕候所実正ニ御座候、但し御利足之義ハ御定之通り利相加へ当八月廿日迄ニ御元利相揃訖度弁金可仕候、若借主難渋仕候ハ、受合方ニ而弁金可仕候、仍而為後日証文如件

かり主

才藤巳之吉（印）

大沼久兵衛（印）

天保六年七月

仁右衛門殿

〔63〕（金子借用証文）〔天保六（一八三五）年〕

一 壹歩判金百切也

内

一 貳拾切 七月

一 貳拾切 閏七月

一 貳拾切 八月

一 貳拾切 九月

一 貳拾切 十月

右之通り御月わりヲ以御借受実正ニ御座候、御利足之義ハ御定之通り相懸当十一月御元利取揃御年貢米ヲ以御返済被成下候、御年貢相場之義ハ十一月村田丁六市並シ相場ヲ以御返済被成下候、為後日之御証文如件

御出入 丹野右仲（印）

天保六年七月

同 佐藤正左衛門（印）

同 高橋市左衛門（印）

金穀懸り

志賀甚左衛門（印）

御用達青根屋敷

佐藤善次殿

同 善右衛門殿

〔64〕証文之事〔天保六（一八三五）年〕

証文之事

一 文金四切也

右之通槩ニ借用仕候儀実正ニ御座候、但し御利足之儀は御定之利相加来申ノ四月中ニ御元利相加引揃急度返済可仕候、若同月本人難渋仕候ハ、受合方ニ而返金可仕候、仍而為後日之如此御座候、已上

借主

大宮寅吉（印）

天保六年十一月

請合

佐藤卯之吉（印）

仁右衛門殿

〔65〕金子借用証文之事〔円田村、天保七（一八三六）年〕

（帯）

〔圓田村志津ノ上屋敷銀治殿貸金証文式通入〕

金子借用証文之事

一 壹歩金七切也

右之通り借用仕候義実正ニ御座候、去年金八切十二月借用仕、此度金七切都合ニ而金高拾五切也、右金御返済之義ハ御定メ之御利加当六月御返済可仕、万一其節本人被指滞候ハ、請合方ニ而急度御返済可仕、仍而後日ため証文如斯ニ御座候、以上

圓田村借用人

銀次（印）

天保七年二月

遠刈田請合

卯之吉（印）

青根

佐藤仁右衛門殿

〔66〕借用仕金子之事〔山形檜物町〕

借用仕金子之事

一金式兩也

但し文字金也

右之通槌ニ借用申候処実正ニ御座候、尤返済之儀は来
亥五月限り元利金急度御返金可仕候、聊相違無御座候
為後日仍而如件

山形檜物町

庄司四郎治（印）

戌十月廿二日

仙臺青根

佐藤善兵衛殿

借主遠刈田

小室庄七

六月廿六日

同 我妻直助

青根

仁右衛門殿

八家

〔68〕親様死去に付御悔覚帳〔寛政元（一七八九）年〕

（表紙）

「寛政元年十月十五日

親様死去に付御悔覚帳

酉

佐藤仁右衛門」

〔67〕証文沓札之事〔宮村遠刈田〕

証文沓札之事

一 沓歩判金沓兩槌ニ借用仕候事実正ニ御座候、利足
之義ハ一ヶ月ニ拾五兩沓歩之利ヲ添当七月中ニハ
急度無間違返済可仕候、為後日口入相立証文如斯
御座候、以上

角

大川原本町

一 六百文

長蔵殿

白米四升

権兵衛殿

川崎中町

一	五百文	源太郎殿	一	貳百文	利左衛門殿
同	十七日	鉤取		うんめん貳は御悔二手代	
一	貳百文	利三郎殿		今藏被遣候事	
	白米壹升		一	うんめん貳は	庄右衛門殿
十五日	当所		同		
一	貳百文	七兵衛	一	同	市之丞殿
但し十月廿九日朝手前家内すゝめ受候事			同		
	同所		一	同	清之丞殿
一	五拾文	喜右衛門	同		
	菊半盃程		一	同	庄七殿
十九日	今宿村立野			右同人方より利左衛門手代今藏二被相頼被遣候事	
一	五百文	太四郎殿	同		
	白米貳升		一	百文	圓四郎殿
同	同所			右今藏被相頼候事	
一	貳百文	喜四郎殿	十月廿七日		前川大向与頭
	白米壹升		一	百文	嘉左衛門殿
同	同所				前川大向屋敷
一	百文	市太郎殿	一	百文	次兵衛殿
廿二日	村田				下なミかた

一	三十文	次郎兵衛殿	一	式百文	前川水上
	上なミかた		一	式百文	甚之助殿
一	三十文	松之助殿		右ハ十二月四日歩夫ニ参候節	
	なミかた		十二月五日	川崎本町半右衛門	
一	五拾文	十左衛門殿	一	百文	庄太郎殿
	永野町		同日	下なミかた	
一	式百文	清右衛門殿	一	百文	弥左衛門殿
十一月二日	村田本町		十二月	さゝや	
一	うんめん老は	源太郎殿	一	百文	九郎右衛門殿
十一月九日	上なミかた		三月廿日	川サキ中町	
一	五十文	庄兵衛殿	一	百文	半太殿
		新地	同	同	
一	十月十六日夜九ツ時参	八郎殿	一	百文	林右衛門殿
	同十七日朝より穴ほりろくしや	七太郎殿	同	同	
	く相成手伝受候事	十吉殿	一	百文	留吉殿
	十一月十四日すゝめニ三人共		戌三月廿日	さゝや	
	参り餅重箱ニ而持参		一	式百文	清四郎殿
	遠刈田		同	同	
一	百文	六太郎殿	一	式百文	清治殿

同

一 貳百文 奎兵衛殿

同
野上

一 貳百文 源之助殿

四月 宮町

一 うんめん三把 蓮蔵寺様

四月十一日 遠刈田

一百文 十兵衛殿

四月十三日
白石中町

一 うんめん大たは二而 喜六殿

夫次助殿被遣候事

御家中
同

一 同大たは二而 大波七兵衛殿

小下倉

一 仕度米 武兵衛殿

玄米貳升

大橋

一 貳百文 久次殿

外二仕度共二もち壺升

一 仕度 万蔵殿

白米五升

川崎中町

一百文
太郎八殿

四月廿九日 村田

一 なミうんめん弐把 久五郎殿

西十二月
川崎

一 焼ふ壺包 檜山左膳様

五月廿三日
川崎本町

一角錢貳百文 源七殿

六月廿八日
川崎中町

一角錢貳百文 次兵衛殿

七月九日 大向

一角百文 伊兵衛殿

〔69〕乍恐奉願候御事〔寛政二（一七九〇）年〕

乍恐奉願候御事

柴田郡前川村青根

御殿守佐藤仁右衛門義去十一月九日ニ病死仕候間、仮
御殿守同所湯守市四郎ニ被仰付罷有候所、右仁右衛
門忌中昨廿九日迄ニ而忌明ニ罷成申候間、仁右衛門嫡
子善兵衛義仁右衛門と名改仕直々 御殿守ニ被仰付候
様被成下、是迄之通苗字共御免被成下度奉存候、右善
兵衛義

御殿守被仰付候而も相并可申人柄之者ニ御座候間、如
此申上候条宜様被仰上被下置度奉存候、以上

前川村組頭

嘉左衛門（印）

寛政元年十二月晦日

同村肝入

大宮久治（印）

仮肝入

日下嘉右衛門殿

右之通申出候間、仁右衛門嫡子善兵衛儀仁右衛門と名
改仕、是迄之通苗字共御免被成下

御殿守ニ被仰付候様被成下度奉存候、右御用被仰付候
而も相并可申人柄之者ニ御座候間如此申上候、以上

仮大肝入

日下嘉右衛門（印）

寛政貳年正月八日

玉蔵様

半右衛門様

〔70〕柴田郡前川村青根佐藤仁右衛門養子家督奉願候
御事〔文化元（一八〇四）年〕

柴田郡前川村青根佐藤仁右衛門養子家督奉願候御事

青根屋しき御百姓

佐藤仁右衛門

高畑代拾七文

此人数

一 仁右衛門 五拾三 一 女子くら 十六

合式人 内 男老入

女老入

右之通持高人数ニ而御百姓ニ御座候所、当六月御城下
国分町大坂屋新七添人十代吉ト申者養子家督貫申候間、

右之者直々家督被成下度奉願候、仍而村出シ相添申上
候条宜敷様被仰上被下置度奉存候、以上

青根屋敷御百姓

御殿守願人

佐藤仁右衛門（印）

文化元年

十一月

親類

若左衛門（印）

五人組

七兵衛（印）

同

喜右衛門（印）

同

庄七（印）

組頭

嘉左衛門（印）

肝入

久吉（印）

仮大肝入

東吉殿

右之通申出候間、如願之被成下度奉存候、已上

仮大肝入

東吉（印）

同年

同月

三郎兵衛様

〔71〕乍恐口上書ヲ以奉願上候御事（文化九（一八一二）
年）

乍恐口上書ヲ以奉願上候御事

一 拙者儀先湯守佐藤仁右衛門代御百姓相続罷在申候

所、先湯守仁右衛門儀は去ル文化式年七月不屈之

儀有之二渡浜え流罪被 相行候由於同所病死仕、

其後

觀心院様御一周御忌御法事之御大赦ニ葬返御赦免罷成

申候処、右仁右衛門先祖代々より■引続

御先代様数度之御入湯被 為有某後

御殿守被 仰付勤仕罷在候故、御他領迄も仁右衛門ト申名前相聞得居 御領御他領共ニ右仁右衛門名前相尋入湯ニ罷越申候間、乍恐此度

屋形様御入部御祝儀ニ拙者義仁右衛門ト名改仕候義御免被成下度奉願上候、前文奉申上候通此度之 御祝儀ニ 御憐愍ヲ以名改御免被成下度不顧憚乍恐如此奉願上候条宜敷被仰上被成下度奉存候、以上

柴田郡前川村之内

青根湯守

善兵衛(印)

文化九年六月指上本扣

右判ハ内ノ判

此判也、惣右衛門

ニも此判也

〔72〕(湯守永請請願書)〔天保一二(一八四一)年〕

拙者義起返り方御郡御備金え為冥加之金貳百両献金被成下内願之義ハ、青根出湯御運上代受負去ル亥ノ年よ

り末五ヶ年被任下置候御年限中ニ御座候処、此度より御運上代五拾貫文ヲ以永請負人ニ被成下置候御義ニ御座候ハ、難有仕合ニ奉存候、御運上代之義ハ天明年中已前より享和年中迄五拾貫文ヲ以永ク被任下置候御義も御座候処、盛不盛ニより増減を以受負等申上候御義ニも御座候間、前書奉願上候通此度より五拾貫文を以永々被任下置度奉願上候、尤湯家作三ヶ所不少之御入料ニハ御座候得共手入修覆仕御村方も貳拾貫文ニて年々道橋手入之ため補も仕候御義ニ御座候間、右之趣宜様御吟味被成下度奉願上候、以上

柴田郡前川村御百姓

青根御湯守受負人

願人

仁右衛門

天保拾貳年

五月

〔73〕乍恐奉願上候御事〔天保一二（一八四一）年〕

ひかえ

乍恐奉願上候御事

一金貳百両也

右之通赤子養育御備金御金山御備金へ為冥加之献金仕度奉願上候、被召上候御義ニ御座候ハ、難有仕合ニ奉存候、御憐愍を以被召上候様被成下度奉願上候、已上

柴田郡前川村

青根御百姓御湯守

仁右衛門

天保十二年

六月

肝入

久次殿

組頭

市之助殿

〔74〕乍恐奉願上候御事〔天保一二（一八四一）年〕

乍恐奉願上候御事

一金貳百両也

右之通起返り方御郡御備金え為冥賀之献金仕度奉願上候、被召上候御義ニ御座候ハ、難有仕合ニ奉存、御憐愍ヲ以被召上候様被成下置度奉願上候、以上

柴田郡前川村御百姓

青根御湯守受負人

願人

仁右衛門

天保拾貳年

五月

肝入

久次殿

組頭

市之助殿

〔75〕（湯守永請願書）〔天保一二（一八四一）年〕

拙者義起返り方御郡御備金え為冥賀之金百五拾両献金被成下内願之義ハ青根出湯御運上受負去ル亥ノ年より末五ヶ年被任下置候処、此度より御運上代五拾貫文を以永請負人ニ被成下置候御義ニ御座候ハ、難有仕合ニ奉存候、御運上代之義ハ天明年中已前より享和年中迄五拾貫文を以永ク被任下置候御義も御座候処、盛不盛ニより増減を以受負等申上候御義ニも御座候間、前書奉願上候通此度より五拾貫文を以永々被任下置度奉願上候、尤湯泉屋三ヶ所不少之御入料ニハ御座候へ共手入修覆仕御村方へも貳拾貫文宛年々振銭是迄之姿を以補も仕候御義ニ御座候間、右之趣共ニ宜様御吟味被成下度奉願上候、已上

願人柴田郡前川村

御百姓青根御湯守

仁右衛門

天保拾貳年

五月

同村組頭

市之助

同村肝入

久次

大肝入

真壁庄治殿

〔76〕乍恐内願奉申上候御事〔天保一三（一八四二）年〕

乍恐内願奉申上候御事

拙者義荒所起返り方へ金四百五拾両也赤子養育方御手当金百五拾両柴田御郡北方御備ニ為冥加之献金被成下内願之義は、大肝入格并青根出湯御役代永請人ニ被成下候御儀御座候ハ、難有仕合奉存候、出湯（棒引抹消一行分あり、省略）被任下置候未タ御年限中ニ御座候得共此度奉願上候御儀は去丑年より御運上代壱ヶ年五拾〆文宛を以（棒引抹消部分あり、省略）被任下置度奉願上候（棒引抹消部分あり、省略）、盛不盛を以御役代増減御吟味被成下被仰渡候砌は御請負申上候御儀御座候間、前書奉願上候通り此度より御役代五拾〆文宛

を以（棒引抹消部分あり、省略）不盛不抱上納奉申上候、天明已前より享和年中迄五拾〆文を以永ク被任下置候御儀も御座候、其後御役増減を以御請負等も申上候御儀御座候、猶又湯家作三ヶ所修覆仕候にも不少之御入料金御座候得共拙者方ニ而手入仕、勿論御村内へも年々代式拾〆文宛道橋手入有之補も仕候儀ニ御座候間、右之趣共ニ宜敷様御吟味被成下度奉願上候、以上

柴田郡前川村御百姓

青根御湯守請負人

願人 仁右衛門

天保十三年

寅正月 願書手扣

〔77〕 寛（弘化三（一八四六）年）

出入司衆え 主水方

覚

柴田郡青根湯守仁右衛門儀養賢堂へ金百両調達仕候間、年々御運上代五拾〆文宛ヲ以永請負人ニ被成下度申出

候段、内願両道同所学頭指出候間、無延引吟味可被申聞候事

正月廿九日

早速吟味可被申聞候事

一學方

二月朔日

御金山方本〆衆

役人衆

早速吟味可被申聞候事

鎌 治兵衛

菊 茂太夫

二月二日

大肝入

眞壁新七殿

御金山下代

桜井仁右衛門殿

御別紙之通早速吟味可被申聞旨御連名ヲ以被相渡候間、於其御郡ニ御指支御折合之上私共方にても吟味相達候間、否之儀急速被仰下候様致度此段申進候、已上

石川理惣

桜井仁右衛門

二月五日

大肝入

真壁新七殿

此通御金山下代石川理惣等申聞候間、指支有無之吟味可被申聞候、且仁右衛門儀年々御運上代延納致儀にて永請負人之儀は無心元人品之者ニ有之候間、旁々折入吟味可被申聞候事

真壁新七

二月七日

久治殿

直々申談御用儀有之候間、歩夫者一道御越可被成候

久治

二月十日

仁右衛門殿

柴田郡前川村之内青根屋敷仁右衛門儀正月中旬内願有之候而御城下表へ罷登り温泉御運上代八拾〆文之所五拾〆文にて永請負人ニ被成下度内々奉願上候ニ付、為

冥加之養賢堂御別段御入料方へ奉献金旨順々被仰渡候

御儀奉承知候、無有之儀村かたへ吟味仕候所村方にて別段指支之儀も無御座候、猶仁右衛門直々招呼承り届ケ候へは、無相違金子百両也献金可申上旨願書ヲ以指出し申候、依而如願之御吟味被成下度奉願上候、已上

右村組頭

市之介

同肝入

久治

弘化三年

二月

大肝入

真壁新七殿

御金山下代

石川理惣殿

同

桜井仁右衛門殿

〔78〕御先祖様ヨリ御遜り之品左ニ印置覚帳

(表紙)

「御先祖様ヨリ御遜り之品左ニ印置覚帳

又養子善兵衛相調申候品共(一)孫え申(一)

印置申候」

善兵衛賀養子出生本吉郡北方本郷氣仙沼釜ヶ前町大田入口より北側東方え式軒目大家と申加藤兵三郎と云二男御城下国分町大坂屋新七右善兵衛えハいとこニ御座候得共、伯父と申度よし右大坂屋新七方より此家ニ賀養子参り申候、于時享和式戌年十月廿一日就吉辰、夫より文化元年十一月十五日養父佐藤仁右衛門品有之御城下御始末ニ有之、右品と申義ハ子孫え申置候義ニ候間委細ニ如此候、当所湯元之事ニ候間随分御客様方大切ニ可致上事ニ御座候得共、何と仰之間違ニ候哉金錢有之ヲ被見添久米宇左衛門と云士知行百五拾俵之女房入湯之体見せ不礼ヲ申懸、右ヲとやかくと申候而金子百両ヲ相出し右金ふ

んさんの砌同所向ノ喜右衛門と申者え■金も参り不申故、右喜右衛門御小人兵吉と申者え内慮致御始末相成、左候得は右喜右衛門義組合とハ申なから出入も六ヶ敷所存之義ニ御座候間、子孫含之ため申置候事

一 右之故障中又長袋町ニかわさき出生之小山利八と申者有之右久米宇左衛門と申合又候金五拾両相出シ、其砌御始末ニ相成右利八出奔ニ相成手前養父様御事ハ長渡浜え流罪ニ相成同所小宿さいのかミ彦五郎と申仁ニ御座候、同所ニ而親様しやきニ而文化三年八月五日ニ御病死被遊候、右介抱に同年七月十八日内ヲ出立同廿一日着夫より善兵衛御介抱仕候、同年赦状指上翌年文化四年くわん心院様之御法事ニ被相免帰参ニ相成、同文化五年六月同所え罷下りくわそうニ仕御死去御帰参御目出度奉存候

一 向喜右衛門義も北上川切御追払被相行申候、跡欠所被仰付右喜右衛門弟圓蔵義代百姓ニ相成地代金

七切

一 手前も欠所被仰付直々善兵衛代御百姓ニ相立地代

金五両

一 右故障共有之御遜り之金子共左ニ印置候得共、右

之様ニ而不残遣方致候得共、難有事ニハ入湯之御

客様方御出被成下候方より今日迄も相続ニ相成候

間、随分此上なから大切御世わ申上候様相心得可

被申候

一 御先祖様より被相遜候丸銭并角銭ハ一向ニ手入不

申候事、只御親様之被相残候銭并金子等ハ一字彼

是ニ而遣申候、子孫之ため如此申置候、御親様よ

り御遜被下候様成金百三拾切丸代八拾_〆文■并委

細左ニ印候

一 金百三拾切

一 丸八拾_〆文■

一 但御先祖様より之分ハ一向手入_{〔不〕欠力}申候、是ハ御親

様分計

一 朱膳わん

拾五人分

縁角之

せん

丸せん之

酒ぬり

わん共

廿人前

同黒

廿人前

木工せん

ふきくせん

拾人前

客人

丸せん

同 わん

なへ

同釜

茶かま

夜着

但シ上中下	布団	玄米	大豆	味噌之桶	大中小共	四本	ひへ	式せいろう	そは	壺ひつ	座頭等ハ	不心得候	右ハ妻方ニて始末致候事	皿鉢	取合	茶わん	取合	一	但シ対也	重箱	喰籠	茶わん	壺つ	大弁当壺	小弁当壺	大火鉢	壺つ	わく同	式つ	大七つ鉢	壺	黒吸物	皿共拾枚	朱符絵	吸物わん	拾人分	きる	道具共	一
-------	----	----	----	------	------	----	----	-------	----	-----	------	------	-------------	----	----	-----	----	---	------	----	----	-----	----	------	------	-----	----	-----	----	------	---	-----	------	-----	------	-----	----	-----	---

一 対銚子

一 壺通り

一 正蔵膳わん

一 壺人前

一 すゝの皿拾人前

一 真中之やくわん壺

一 ふきくせん拾人前

一 二ノせん付

一 布団

一 夜キ

一 味噌壺番ニ大キメ

一 并小かさ方式つ

一 もミ 四俵

一 文化貳年也

一 ほしい 一字

一 いなえ 一字

一 五月之小幡 貳流

一 但シしない引当ハ則善兵衛実方之定紋ニ

一 有之事、子孫ため染置候事

一 青地吸物わん 拾人前

一 但金糸め有り

一 善兵衛子供出生歳号月日

一 善兵衛長男善次享和元亥年五月十二日出生

一 二男慶治文化貳丑年正月廿二日出生

一 三女かきよ文化五年辰正月十八日出生

一 善兵衛相調子孫え相遜申品共ニ

一 御地仏堂

一 右ハ山形阿部町之吉野屋吉兵衛殿之

一 御世話ニ而御下り申候事

一 御三体之御仏様方

一 右同断

一 仏具

一 山形大十二而相調申候

一 御前つくへハ山形阿部町吉野屋吉兵衛殿

一 申請候品ニ御座候

一 漢楚軍談 壺通り

一 南部大平記 壺通り

一 北国大平記 壺通り

一 唐金なへ 七つ

但シ組なへニ御座候共

一 鉄なへ 廿

一 茶釜 五つ

一 ほしいせいろ 壺通り

文化五年大工又四郎迄申候事

〔79〕御先祖様より家内相続被仰渡代々申伝之事

(表紙)

〔御先祖様より家内相続

被仰渡代々申伝之事 〕

家内安全相続之事先祖代より書置

一 毎朝はやくおき手水おかへ口中を清くして諸神諸
仏拝シテ夫より薬師山神御両社様え参詣此所ニ而

蔵王権現其外日本の諸仏へ拝シ御礼とけへき事、

若又客人在之取込候ハ、見合参詣可仕事

一 父母ニ孝を第一ニ相勤可申事、其身ハ勿論子孫繁

昌可為事

一 湯治人客随分亭心ニ御取扱第一之事

一 客人方へ遣物心かけ置可申事、輕き物候へ共大根

漬等沢山漬方致可相出事、其時々模様ニ御座候得

共山いも塩肴成共心かけ客人の人柄ニより段々見

合上中下も可有事也

一 御一門様其外御家中御寺院様尤出羽伊達相馬他国

より入湯の御宿候節は献上物可仕事、右品々ハ其

時節見合相調可仕事

一 入湯御客人宿付出立時分は随分心を付亭心ニ取扱

可致事、尤門送り等仕候共下駄足駄無用之事、そ

うりを心かけ置無間違可仕事

御大身曆々御寺院諸士方ハ別而礼義を無如在可

仕事

一 歳暮之米村田町其外在々にて相調候共縦は百俵も
相調候ハ、十月末方より見合十一月十日時分迄之

内三四十も駄送可仕事、直段等見合候内延引相成候と雪ふり馬足通用不叶忝式升下直ニ調候共ひまたわれにて却而高直ニ相成損と心得へし、先年より雪ふり難儀する事あり三四十俵持参跡米見合調置不苦事、しかし其年の節ニ寄見合相調候事必々十一月初迄ニ三四十ハ持参する事也

一 老人者何方より成とも参り事度々有必々留事ニあらず、先年より入湯ニ参念頃顔覚も有又ハ宿元相知候者ニ候ハ、無抛事其人柄人僧あしき者と見受候ハ、必々留事ニあらず

御公儀様よりも御法度の被仰渡先年より承知仕候事

一 馬かたはくち渡世の者あしき者ニ心を付可申事、油断する事損と心得へし

一 秋ニ相成候ハ、葉かやかしかた雪かこいの事
一 毎年屋ね普請可仕事、其ふしんニ応しかやかき致十月中はこひ可申事、来春迄山ニ置候而ハ風ニ会又は夜火等の用心扱々ひまたわれなり譬ハ賃銭高直ニ候とも運方可致候事也、先年より度々普請ニ

付右の事ニ会候様能々難儀致考書置

一 来春ニなり二月中旬雪きへ模様ニ応しはくろかや屋ね不仕候共六七拾丸ハ年々心かけてかり方可仕事、毎年屋ね普請ハ忝ヶ所宛ハ可致と心得へし、屋ねふしんかさなり候而ハ大キニ難儀なり、尤入湯宿屋ニ候へハ屋ね損事候てハ見くるしく客の泊りも不足と心得へし

一 酒堅無用之事、客数拾人宿仕候事ニ御座候へハ酒等相用申候而何角不礼もあり、家内相続根元ニ不相成候事

一 はくえきかけのしやうふ忝文の遊なり共不仕候事、尤 御公儀様より兼而御法度之義ハ被仰渡置候、別而此家相続之義に付諸神諸仏様へ諸願申上置候事

一 鳥之類一円食事ニ不仕候事、鴨と庭鳥の玉子二品御免ニ申上候、右ハ火事火難尤家内安全相続ニ申上諸神諸仏様へ諸願之事
一 殺生無用之事、御曆々様御案内仕候儀ニハ無抛御先立は可仕候事

一 毎年疊の表替可仕候事甚以大切也、余の事見合候共家しふく渡世の仕入なり、人よりきれひ相働可仕事

此次キ当所涌井戸辺え御地頭様より用水取諸入湯之勝手ニ相成候様被仰渡候御書付有之候、右御書付手前ニ有之候事

文化五年戊辰之四月廿六日

其次キ

一 下ノ源之丞と湯之遣井戸辺え文化七年四月もり土仕候所、右ハ手前持分ニも無之所え手前人足計ニ而もり土仕候故源之丞より■不心有之手前持分之訳ケ何れ来参之訳ニ候所、手前持分ニは無之かし入湯人井戸端故えかり候故難義被成候事ヲ朝夕時々見居候故もり土致諸人のためと相心得候而もり土致候事、貴様所組合方へ申聞ス致候事是不念之様存候、■■當時入湯人も参り家々家内取込候事は手前之存候故組合へも不申聞持分ニ仕候事不念之様存候訳ニ申聞（棒引抹消一行分あり、省

略）候得は、右土組合中見分之上なけすて候間相心得候様其年之組頭前庄七へ右之親子居候而和方可申候間、随分諸人之訴も不顧候ハ、随分能キ事ニ候間、見分可被致候と申候、罷帰候共夫より時々見分致候様組合之者共え申遣候所、誰老人参り不申候而かわさき之桜井用吉殿、村田町源兵衛、宮町出湯請人済治罷越、右は其場々ニて指置候様申聞候故随分組合之ミ能ク候ハ、其尽ニて指置申候、仍而ハ中なおり可申候故役屋え罷越申候而酒杯随分たへ申候、各中立村田源兵衛、かわさき御家中桜井用吉殿、刈田宮町出湯役諸人済治也、出入其俣申候

文化七年四月

（棒引抹消部分あり）

文化八年向おのふ持分薬師之脇之所は同人き小屋之裏通り道間違ニ相成候所ヲ今文化八年辛未三月十五日当所庄七と申者、十右衛門立合、手前善兵衛、おのふ井者のくわ取ニは立の之小四郎は手前より向よりて立里の在山家之村庄助相出テくわ身相入候事、夫より新湯

道普請申事ニ而同年文化八年辛未三月廿日おのふ小屋裏之所相改申候、右小屋土蔵よりは迄之道真中之くへえ四尺壺寸五分有之、仍而雨落指引此度道新キ同前故四尺之間々ニ仕候、仍而式尺壺寸五分雨おち式尺申候道分手前より式尺相出し、若後日道ろん等有之候ハ、道真中ニ栗くる有之候、尤すミ入置申候間後日相改可申候、夫も紛候ハ、小屋土蔵より道真中え四尺壺寸五分有之候間、右之立合源之丞并十右衛門、其上庄右衛門、手前より私并村田之清三郎、最上度々沢之奉公人与六ニ候間、左ニ相心得置候様可申事、右之小屋之裏計其外は是迄有来り候通り之間道ニ候事也
文化八年辛未三月廿日改也

塗物の伝

しゆんけいぬり

一 くちなしせんし

一 生漆かんはい水

あふりくちなし水

右三へんくらいすり付テよし

一 上ハぬりかんはい黒目

あふら入

右ハ惣而色ぬり漆也

塗地物ぬり

一 きへぬのハむきうるしニ而はり

ちのこえとのこくわえ

右どうさひ地

一 とのこ地

一 地かたの生漆ニて

一 中ぬり黒目漆へゆしん入

あふらふ入水少入

一 上ぬり黒漆黒目ニ而はくろ水少入

右ハ黒ぬりの方色ぬりの方と

下地ハ同し

一 しゆぬりハ色漆ニて

一 す地はんくろ漆ニ す地

きおふ入

一 ちりめんたゝき

こくしつニゆえん入にうわ水
少入ぬり上きぬきれニ而うづ
一 おにたゝき生漆ニとのこ地ヲ
かためとぎその上こくしつニゆえん入ぬるす地ニ
而もよし

本しゆんけ

上へん

一 生うるし拾匁え 水拾匁

油拾匁

二はん

一 生漆拾匁え 水五匁

油五匁

三はん

一 生うるし拾匁 水貳匁五分

油二匁五分

上へん梅す入

一 黒目漆

右之通ぬり方可仕候事

〔80〕（書状）〔上山裏町・豆油屋作右衛門〕

一 翰致啓上候、甚暑之砌御座候処先以其御地 御家内
様益御壮健可被成御座奉欣然候、次ニ当方家内無別条
罷在候間乍憚御安慮思召可被下候、然は一昨午年四月
中妻子入湯ニ罷越候節万端御世話様ニ相成難有仕合奉
存候、其砌■子少々品物いろく及紛失ニ候之处帰宅
後私義当藩御重役様方へ品々奉歎願置候処今以御沙駄
も無之如何様共困入候次第ニ付御手数ニは可有之候得
共其御地ニおゐて御吟味可被下置候様之御取計之程奉
願上候、先は右之段御願旁得其意度如此御座候、謹言
申六月廿日

上ノ山裏町

豆油屋作右衛門（印）

青根

佐藤仁右衛門様

〔81〕（書状）〔秋保湯元村・佐藤勘三郎〕

尚以申上候此仁飛脚代并逗留之内ハ一日何程と申

義御直談之上御弘被遣可申候、何分御相對先貴様御いたミ勝ニも不相成様御相談可成候、以上

態飛脚を以申上候、追日秋冷相成申候処、御家内様御揃御機嫌能珍重之御事ニ奉存候、私家無為ニ道変罷在申候、将仙表藤山様方御借財御返済之義ニ付前頃中先以私方より紙面相添親類之者差上候処、為御挨拶被仰下候ニハ貴様方ニ而も御相続向御不如意ニ付其砌難被相済品々被仰下到所不分里之御挨拶と奉存候故其後紙面ヲ以又々申上、此地より御嶽参詣之者え御紙面ヲ以被仰下度品々申上候処、未ニ右之御答も無之扱又夏中善右衛門殿御越色々御相談金五両宛両月ニ被相済御約定も御違変ニ相成候得は品柄御直談も仕候へ共連も御難渋之悪計被仰立藤山様御聞済は無之事ニ存候へ共、貴様方当時御窮迫之間勘弁仕此節御返済振里之御始末証受取右間所様方押而取計罷在候処、右ニ付先頃中より貴様御いたミにも不相成様私方手元之人ヲ以申上候処、前書之通不分之御紙面被仰遣扱又当惑之次第御座候、段々御申合之御始末ニ随而先は私方にて取都早速為相登候様藤山様委曲被仰下候間、夏中より被罷

越候仁我妻豊七郎殿差登申候間、元右衛門殿御始末御申合之通を以金子御取調被相渡可被遣候、此不景氣ニて若又御勘定不相立訳ニも有之候ハ、藤山様御直々御越被成候方、又は御親類様ニ而も御下り被成前々より之御始末通りを以御取都ニ罷成候哉、此上は私方にて可然取計も不相出事ニ御座候間、此所御指考御返済相成候様可被成候、夏中善右衛門殿拙宅え御越之砌御直談之砌此仁ニ而も立入被居候事故、彼是旁々此度此仁を以申上候様藤山様より被仰遣候間如斯ニ御座候、委細之義早速可申上候、已上

勘三郎

八月十日

仁右衛門様

善右衛門様

尚以申上候、夏中は善右衛門様御心勞懸上申候へ共御城下迄も御登仙之处、私義諸事取計藤山様へも申達置候之処、先以不分成御紙面等御尊兄様より被仰下扱又当惑之到ニ候ハ、何分御工風御勘弁被相尽御返済

御片付可被成候、以上

九 補遺

〔82〕（伊達政宗書狀）〔内藤外記正重宛、』仙台市史資料編一二』二九二〇号文書〕

（袖追書）

尚々、少さきに御出候て可給候、不及御報候、

以上

大炊殿^{（土井利勝）}今夕為 上使御出必ニ候者、乍御大義、少もさ

きには御出候而可給候、可申談義候、恐惶謹言

八月十八日 政宗（花押）

（結封ウワ書）

「 松陸奥守

内外記様 ^{（内藤正重）} 政宗

人々御中 「

〔83〕（伊達政宗書狀）〔四竈勘右衛門宛、』仙台市史資料編一三』三八一九号文書〕

（袖追書）

不及返事候、かしく

善兵衛ニ遣候返礼、唯今令披見候、明日延候ニ付而、今日可有供之由、満足申候、早々待入、自之つかじりにかゝり、堂林筋へ可参候間、其心得候て、可有御越候、かしく

六日

（捻封ウワ書）

「 四竈勘右衛門^{（四竈勘右衛門）}より

（墨引） 四勘右殿 政宗 「

〔付記〕

調査に際しては、佐藤家の皆様に格別のご理解とご配慮を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。また、本書の刊行にご理解をいただいたNPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク事務局の皆様、古文書の解読に際してご協力いただいた東北大学文学部日本史研究室の兼平賢治、早坂昌英の両氏にも御礼申し上げます。

東北アジア研究センター叢書 第 50 号
江戸時代の温泉と交流
—陸奥国柴田郡前川村佐藤仁右衛門家文書の世界—

	2013 年 12 月 10 日発行
編 著 者	高橋 陽一
発 行 者	東北大学東北アジア研究センター 〒 980-8576 仙台市青葉区川内 41
印 刷	小宮山印刷工業株式会社



CNEAS

東北アジア研究センター叢書 第50号

江戸時代の温泉と交流

—陸奥国柴田郡前川村佐藤仁右衛門家文書の世界—

高橋 陽一 編著

高橋陽一編著

江戸時代の温泉と交流

陸奥国柴田郡前川村佐藤仁右衛門家文書の世界

東北アジア研究センター叢書

No.
50

輿地彙編

右道法食子共八号
一永北ノ里の大ノ村
二永北ノ里の村
三永北ノ里の村
四永北ノ里の村
五永北ノ里の村
六永北ノ里の村
七永北ノ里の村
八永北ノ里の村

